

左川ちか研究史論

——附左川ちか関連文献目録増補版——

島田 龍*

1 はじめに

1930年代前半、80余篇の詩を詠じた左川ちか（1911～36：本名川崎^{ちか}愛）は、一貫してモダニズム詩人の最前線にいた。現在では、与謝野晶子以後の近代女性詩人の極北に輝き、現代詩の起点となる詩人とみなされている¹⁾。生誕100年以上を経た今なお、数次詩集が出版されている。左川ちかの詩業は幅広い関心を呼び、多くの読者を獲得しつづけている。

左川ちか……。その存在は、女性詩人として、モダニズム詩人として、北海道出身の文学者として、翻訳家として、伊藤整の秘めた恋人として、早逝詩人として、多彩に表象されている。その詩は、シュルレアリスム詩として、都市詩として、風土詩として、恋愛詩として、青春詩として、種々に解釈されている。そのイメージは、詩歌創作、声楽作曲、人形造形、豆本制作などと、事事物物に触発されている。

ちかが記した詩篇・散文は、確認されているその殆どが、『左川ちか資料集成』（2017）などに収められている。しかし、ちかについて書かれた文献・資料を本格的に辿ろうとすると、分野が多岐に及ぶせいか、現在の状況はやや不十分であったように思う。とはいえ、例えばこれまでも、クリハラ再「左川ちか文献・資料一覧」（2004、2006）にまとめられた数十点は、簡にして要を得ており、初学の手引きとなるであろう。惜しむらくは、森開社版『左川ちか全詩集』（1983）の編集にあたった曾根博義が、紙幅の関係で参考

* 立命館大学人文科学研究所客員研究員

文献目録の附載を見送り、他日を期すも実現しなかったことである²⁾。

今回、1920～30年代を中心とした同時代の文献、兄川崎昇の短歌「妹」（1923年4月）から、waga 作詞作曲のボーカロイド曲「君去りしのち青く庭」（2018年1月）まで、およそ100年で約670点（HPを除く）を網羅した。2000年以降、飛躍的にその数が増えているのは、もちろんネット環境の整備が要因にあるが、詩そのものの普及浸透を背景に考えてもよいだろう。

目録のなかには、『詩と詩論』などのモダニズムを中心とした詩史的記述の一節にちかの名だけを挙げた文献や、彼女を題材にしたシンポジウムの新聞告知なども含まれ、直接左川ちかを深く知るとはいえない文献も含まれている。一方で、英語教育史、出版史、古書史など、あまり思い描かない分野で語られているところに遭遇もした。また今回は、とくに1930年代、同時代の批評・時評や追悼文など新出文献をいくつか発見した。今後の基礎資料ともなるだろう。

これからもどのような文脈でちかが語られていくのか、想像はつかない。そのため如何に取捨選択し、掲載するか否か浅慮を重ねたが、今回はちかの名が出てくる（稿者の実見した）総てを、あえて予断なく採録した。「関連文献目録」と題した所以である。それによってちかが、如何なる文脈や領域を横断し語られているか、その多種多様さが、若干の戸惑いも含め実感できるからだ。日本のモダニズム史に関心を持つ読者諸賢の目的と関心にそってこれを俯瞰し直し、向後の参考となれば幸いである³⁾。

左川ちかについて、現在の文学事典的理解を整理するならば、彼女は伊藤整、百田宗治、北園克衛らと出会い、翻訳家から出発、モダニズム詩人として飛躍した。その詩は故郷北海道の自然観と東京の都市生活者の側面をあわせもち、不安と孤独、生来病弱で死の影を内包している。主知的な詩風で、現代詩の先蹤といえる夭折詩人である、というのが最大公約数的な理解だろう⁴⁾。

このようなちか像の理解に再検討の余地は多分にあると考えるが、それに

は別の作業を要しよう。本稿では、個人詩集や同時代評の諸問題を調べたのち、それらキーワードに即して、これまでの評論・研究を整理していこう。現在、個々に孤立した印象の批評や解釈も少なくない状況にある。広範な研究・評論の動向を把握する前提となる、文献・資料整理が十分になされてこなかった状況に起因すると稿者は考える。文献目録を編んだ上で、左川ちかをめぐる言説の全体像とその研究史を具体的に述べ、今後の研究にいかなる諸課題が見出せるのかを考えてみたい。

なお本文で言及する文献は、註が必要なものを除き、書名と発表・発行年のみを記すこととする。文献の註があまりに煩雑になるのを避けるため、詳細な書誌データは目録を参照されたい。引用するちかの作品は、基本的に『左川ちか資料集成』（2017）所載の初出版をテキストとする。

2 個人詩集と合集・アンソロジーの特色

ちかの単独詩集は、生前に唯一刊行した、ジェイムズ・ジョイス『Chamber Music』の翻訳詩『室楽』（1932）を含めると、訳詩集2冊をあわせ、現在7種類を数える。死没直後に限定出版された昭森社版『左川ちか詩集』（1936）は、『室楽』とともに現在稀覯本に準じ、入手は極めて困難となっている。公共図書館・研究機関等の所蔵も限られているが、普及版・特製版ともに国会図書館デジタルコレクション図書館送信資料 (<http://dl.ndl.go.jp>) として限定公開されており、各地の参加機関に赴けば、閲覧複写等が可能である。その他同時代評、合集の一部もデジタル資料化されている。

ただ、昭森社版『左川ちか詩集』には留意すべき点がある。ちかは一度発表した詩に推敲を重ね、別に発表することが多いのだが、死後に制作されたこの詩集は、ちか本人の校勘がなされていない。むしろいくつかの詩篇の取り扱いにおいて、編者伊藤整の意思が少なからず働いている。

例えば伊藤整は、「左川ちか詩集覚え書 - 刊行者 -」（1936）において、「題

名の改められたものはその改題名によつた」とし⁵⁾、ちかの「死の髻」(1931『今日の詩』初出)を改題改作した「幻の家」(1932『文学』)については、「思ふところあつて二者とも収載した」としている⁶⁾。しかし、他の詩の数々に関しても、覚え書の原則は必ずしも守られていない。「夏のをはり」(1934『女人詩』)を改題改作した「季節」(1934『モダン日本』)は、二者ともに収録。「太陽の唄」(1935『るねっさんず』)を改題改作した「太陽の娘」(1935『詩法』)は、これを採録していない。また、「花」(1934『カイエ』)の一章部分のみを切断して収録するなど、著しい編集の痕が更にくつももある。

なかでも問題にされるのは、1935年8月1日付の同日二誌に掲載された最晩年の注目詩「海の捨子」(1935『詩法』)と「海の天使」(1935『短歌研究』)のうち、後者のみを収載している点である。果たして「海の天使」は、単純に「海の捨子」の“改作”と言えるかどうか、これについては準備中の別稿に譲りたい⁷⁾。また、「墜ちる海」(1930『レスプリ・ヌウボオ』)、「堇の墓」(1934『文藝汎論』)、「夜の散歩」(1935『椎の木』)など、10篇前後に及ぶ採録の取りこぼしも目立つ。

もちろん、それら“ずれ”の全てが、編者の何らかの意図や判断による選択の結果とは考えにくい。ヴァリエント(異文)を含むちかの詩を、伊藤が全て把握していたとは思えないからだ。いずれにせよ、伊藤によるちかの詩の細かな本文改変を含め、昭森社版『左川ちか詩集』は、多様な詩の一断面をある眼差しで切り取ったものといえる。

実は本人の生前から『左川ちか詩集』の構想はあった。1934年4月に詩誌『椎の木』に椎の木社近刊の広告が出ている。百田宗治を編者とし、ちかはそのための原稿整理を始めていたが、結局詩集の刊行は延期、生前には実現しなかった。ちかは病床で、自身の詩集を伊藤に託したようだ。かかる事情の一端は、百田宗治「左川ちかの死」(1936)、同「夭折した女詩人左川ちか」(1936)などに、後悔の念とともに語られている。椎の木社版『左川ちか詩集』が実現していれば、本人の意思が十分に反映されたものとなっていたで

あろうだけに、未完に終わったことが惜しまれる。

さて、昭森社版『左川ちか詩集』以後、詩をまとめて読むことにも難渋する状況が続いたが、その詩を読む機会を戦後提供したのは、複数の詩人の詩を収めた合集・アンソロジーであった。なかでも最も多い15篇を収録する、創元社の北川冬彦他編『日本詩人全集 6』（1952）に関して、塚本邦雄（「詩人について」1959）、鶴岡善久「左川ちかとく死」（1983）がその衝撃を語っている。

百田宗治編『詩抄 I』（1933）以来、合集の果たす役割は小さくない。今でも比較的入手しやすいものとしては、鶴岡善久編『モダニズム詩集』（2003）の内容が充実している。

三好豊一郎他編『類別日本詩集』（1963）は、自然・社会・人事等の各部門と主題ごとに現代詩を収録したユニークな詩集であるが、「虫」の項にちかの「昆虫」（1930）、「死」の項に「死の髻」（1931）を選び取っている。恋の詩のアンソロジーである中島みゆき編『日本の恋歌 3』（1985）、小池昌代編『恋愛詩集』（2016）は「緑」（1932）を収録する。

また、支部沈黙他編『北海道文学全集 第22巻』（1981）、木原直彦編『ふるさと文学館 第1巻』（1993）は、北海道の詩歌として「山脈」（1935）を、そして相賀徹夫編『花のうた 花の俳句短歌詩』（1990）、鈴木貞美編『モダン都市文学 X 都市の詩集』（1991）、東雅夫編『夢 書物の王国 2』、蜂飼耳編『大人になるまでに読みたい15歳の詩』（2013、17）、川上未映子編『早稲田文学増刊 女性号』（2017）などが、それぞれのテーマと問題意識に沿って詩を選び抜いているのは、殊に関心をひく。

ちなみに約30冊を確認した合集・アンソロジーでは、「死の髻」が7冊と最も多く、次いで「昆虫」「山脈」、続いて「緑の焰」（1931）「緑」、さらに「青い馬」（1930）「錆びたナイフ」（1931）「海の花嫁」（1935）などが多く選ばれている。城戸朱里「左川ちかと吉岡実 詩語の魅力と魔力」（2006）によると、学生たちには「錆びたナイフ」が最も支持を集めたらしく、現代詩

と共振する若者たちの感性はみずみずしい。

そして1983年、小野夕靄・川崎浩典・曾根博義が、森開社版『左川ちか全詩集』(1983)を編んだ。詩作を考えるうえで重要な散文、拾遺詩、当時の追悼文などを収録。あわせて小野の膨大な資料収集の成果を踏まえ、詳細な書誌研究を行った。全詩集によって、多くの人がちかに初めて出会い、または再会した。

埋もれていた彼女の詩を再び世に出した、非常に意義深い著書といえる。とりわけその詩には、ヴァリエントが少ないため、本格的な書誌研究をスタートさせた意味は極めて大きい。全詩集の精細緻密な校異を手がかりに、初出時と改作詩、昭森社版『左川ちか詩集』収録時の様々な異同を確認できることで、詩作思考の断片が窺われるようになったからだ。その後2010年に、小野は森開社版『左川ちか全詩集新版』を上梓した。新たに発見された作品群を収録、書誌研究を深化させている。あわせて生誕100年の年、翻訳詩など10篇を取めた『左川ちか翻訳詩集』(2011)を出版した。

全詩集新版が以前ほど入手閲覧が簡単でなくなった現在、昭森社版以前の雑誌初出時の原形にこだわった『新編左川ちか詩集 前奏曲』(2017)を紫門あさをが刊行した。さらに、全詩集版未収録の翻訳・散文等を初収録し、詩・散文・翻訳のヴァリエントを網羅した『左川ちか資料集成』(2017)を編纂、新たな一石を投じることになった。左川ちかの詩の多様な変奏に、読者がより直截に広く接触できるよう心掛けられた編集で、今後の受容と研究、詩人の詩作に際して多大な貢献を果たすものと期待される。昭森社版、森開社版、そしてこのたびの前奏曲・資料集成と、それぞれの編者の視点によって編まれた特色を踏まえながら読み比べる楽しみもできよう。

3 同時代評 モダニズム詩人、女性詩人、夭逝詩人

1930年代前半、詩誌『椎の木』では、主宰百田宗治を始めとする同人たち

が、ちかの詩を積極的に取り上げていた。とくに川崎昇・ちか兄妹と家族的な親交を結んでいた百田宗治は、同人たちのアンソロジー『詩抄 I』（1933）で、ちかの詩6篇を収録し、早くに「左川ちか・山中富美子」（1931）を著すなど、意を注いでいた。ただ、理論家ではなかった百田自身の特質ゆえか、愛情が込められた文章が目立つものの、詩そのものへの具体的な論評は、数をあまり見ない⁸⁾。

『椎の木』では、誌上同人論の第一弾として「特集左川ちかの作品」（1934）が生まれ、いくつかの短評が寄せられている。その中で濱名與志春はこう記している。

氏の作品が主知の詩であり、感傷性からぬけきつた感性の秀徹さである。その詩的精神に於てはあくまでも厳しい程の鋭覺さのスタイルの裡に氏の作の氣品さが 單つてゐる。秩序正しい律格と、美しいイメージの明確さ、簡潔なセンテンスとセンテンスの間に匿れてゐる暗示力。茲に氏の巧みな型式美が潜むてゐる。⁹⁾

春山行夫「直感」（1932）、莊原照子「『椎の木』第二年の注意を惹かれた作品」（1933）、匿名のXYZ「女流詩人評判記」（1935）など、他誌の評も含め読んでみると、濱名のように当時の詩人たちは、進歩的で秩序的な形式を有し、イメージ性豊かな主知的な詩風とみなしていたようだ。生前から声望を集めていたこともよくわかる。すぐれた評論家でもあった詩人伊東昌子は、「女流詩人の旗」（1935）で、「左川ちか氏の作品はその時代に於て一つの頂點を示したものであつた。數多の男性詩人たちをも凌駕したその強靱な青い火は驚異に値するものがあつた」とまで記している¹⁰⁾。

一方で批判的言辭もある。例えば、泉芳朗「創刊號を讀んで」（1934）だ。泉は女性詩誌『ごろっちょ』掲載のちかの「天に昇る」（1934）に、技巧派の詩才を認めている。しかし、シュルレアリスムの影響を受け、その詩はあ

まりに活字が転がり、作者は視覚的技巧を過信しているとも評する。ちかの詩に視覚性が強いのは、自身の散文「魚の目であつたならば」(1934)で、絵画と詩の類似性について彼女が自覚的しているように¹¹⁾、現在もしばしば指摘されるところだ。それが即ち批判に値するかどうか、判断は分かれよう。むしろ他の同時代評と比しても、彼女の詩の特質の一端を最も早くに見抜いていた発言として、泉の言は注目されるべきであろう。

この時代は、“詩人”であること以前に、なお“女”であることを求められていた。

例えば、西脇順三郎は「気品ある思考」(1936)で、「非常に女性でありながら理知的に透明な気品ある思考」が、その詩を生命づけたと、ちかを追悼する¹²⁾。対して田中克己は「左川ちかの詩」(1936)で、その詩が抱える過剰な知性に、「何時ノ頃カラカ自分ハ左川ちかの詩ヲ女ラシクナイモノノヤウニ考ヘコンデキタ」が、最近読み返すと感情が細やかで、「何ト女ラシイデハナイカ」「ヤハリ女ノ人ダナト感心シタ」と、男性詩人の視線でちかを悼んだ¹³⁾。

ちかの散文詩を乾直恵に示して、「この中に強烈な女性の肉體を感じないか」と語った、伊藤整の所感もこれに通ずるかもしれない¹⁴⁾。やや特別な事情があった伊藤については後述するとして、北園克衛「若き女性詩人の場合」(1933)によれば、西脇順三郎は教養の豊かさと技術の確かさにおいて、ちかが最もすぐれた女性詩人だと北園に話しており、彼らはあくまで左川ちかに好意的であった。

とはいえ、いやだからこそ、“女”でありながら“女”であることを詠じない“女”らしくない詩であるからよかった。あるいは逆に、“女”らしい詩であるからよかった、どちらにせよ、詩人としての特性ではなく、性別を先ず問題にし、性差に還元するジェンダーからの眼差しに晒されていたことには留意しなければならないだろう。

女性詩人が置かれていた現状について、ちかの詩をただ愛していたと、そ

の死を悼んだロシア文学者中山省三郎「海の天使よ」（1936）の一節を引く。

女なるがゆゑに、若きがゆゑに、理解しがたいゆゑに、或ひは黙殺し、或ひは蔑視することは屢々この國でくり返されてゐることである。この反対の場合も決して少くはないが、その場合には多くは理性を離れてゐる。必らずしも作品が物をいつてゐない。¹⁵⁾

次に北園克衛の評も挙げよう。1930年、川崎昇の紹介で左川ちかとお会い、その詩の完成度に驚いた北園は、自身の詩誌『白紙』に掲載を勧めた。デビュー作の一つ「青い馬」（1930）である。32年、『マダム・ブランシュ』創刊号でちかの「白と黒」（1932）を巻頭に載せ、新しい詩誌の首途を象徴させている。33年には、瀟洒なモダン文化雑誌『エスプリ』をちかと共同編集している。

北園克衛の「二人の若い女詩人」（1931）は、同時期の詩人のなかで左川ちかに発言した最初期に属する。「マドモアゼル左川ちかを知る人は殆んど歎い。進歩的な詩人に於てすら、彼女の眞の才能を識る人が凡そ幾人あるであらうか。そんなに、彼女は若いのである。しかし既に、彼女のエスプリは洗練され盡して朗朗たる一個の王國をなしてゐる」と紹介した¹⁶⁾。

北園は最も頻繁にこの若い詩人の詩そのものに言及した人物である¹⁷⁾。「左川ちかと室楽」（1932）では、「その類推の美しさが、比喩の適切が、対象の明晰がそれらに対する巧妙な詩的統制が僕を驚かせた」と、その作風を把握している¹⁸⁾。

「左川ちかと室楽」（1932）、「※」（1936）、「左川ちか」（1951）と、一連の文章において、黒い天鵝絨の洋装をまとい、水晶の眼鏡をかけ、黄金虫の指環をはめる、スタイリッシュなモダンガールの姿を、左川ちかに表象した北園克衛は、同時に単純な形式と構造に均整のとれた詩そのものの特質と、女性であるかどうか以前に、詩人としての素質を叙している。北園による追悼

文を註に引用する¹⁹⁾。

北園の理解が十全であるかどうかは別として、とくに彼女の生前において、彼なりにちかの詩をフラットに見つめようとしていた気配は窺える。死後の評価では、バランスが崩れ思いが過剰であるものの、現在も広く了解され得る見解だと思われる。が、「詩の世界では王女のやうに自由に大胆にふるまつてゐた」と讚美し、北園が詩的に描いた左川ちか像もまた一つの偶像ではあろう。魅力的ではあるにせよ。

当時のモダニズム詩壇では、澤木隆子、左川ちか、江間章子、中村千尾、山中富美子、莊原照子、伊東昌子ら 1900 年代後半～10 年代前半生まれの詩人たちが、東京や各地方で詩作を競っていた。江間章子の証言などによると、若い女性の活躍を後押しするような、比較的自由的な雰囲気があったようだ²⁰⁾。なかでも、ちかが身を置いていた二つのグループ、百田宗治が主宰する椎の木社、北園克衛が中心メンバーであったアルクイユのクラブは、その傾向が色濃かった。

そのような場でちかは、1932 年夏から翌年夏まで、アルクイユクラブの機関誌『マダム・ブランシュ』に、「夢」(1932)、「雲のかたち」(1932)、「花咲ける大空に」(1933)などを集中的に投稿、自身の詩風を深化させていく。いわば“マダム・ブランシュの時代”ともいべき 1 年を過ごした。父性的保護者の立場にあった百田宗治、翻訳を監修し、プロデューサーの立場にあった伊藤整とはやや異なるスタンスで、北園克衛はちかのパートナーとなっていた。

ところで、ちかの詩を編年順に眺めると、前半と後半で、その雰囲気が微妙に異なっていることに気づく。端的に形式面のみ指摘すれば、詩の長さが増し、ときに散文形式になる点だ。詩作前半期には、「緑の焰」(1931)程度であったものが、32 年夏前から翌年夏にかけ、「神秘」(1932)、「夢」(1932)、「雪線」(1933)と散文詩が増加、なかでも「冬の肖像」(1932)、「暗い夏」(1933)は、詩より散文としか言いようがない。

ちょうどこの過渡期に重なる、“マダム・ブランシュの時代”以前以後のちかの詩風の変遷を考える上で、一つの手掛かりとなるだろう。34年以降の散文詩は、「遅いあつまり」（1934）、「会話」（1934）、「海泡石」（1934）、「指間の花」（1934）と続き、後年は「前奏曲」（1934）、「三原色の作文」（1935）、「夜の散歩」（1935）と、短編小説の趣さえある散文を残した。

詩の散文化傾向に即し、ちか自身が小説を志向していたかどうか、彼女の発言は、心境の変化もあろうか定まっていない。中村千尾には、聖フランシスの『小さき花』を手に取り、一生に一度は自分もこういうものを書きたいと、真剣な表情で話していたという²¹⁾。

そのあとの年だろうか、阪本越郎、乾直恵ら周囲も小説執筆を期待していたところ、友人江間章子には、「私ね……もう、これからこれから詩を書かないつもり……小説を書くだろうと思うでしょ？ そうじゃないの……私、歌になる詩を書こうと思う……」と語っている²²⁾。8章で触れる、ちかの詩の音楽性を考える上で注目すべき発言である。

さて1936年、胃癌により24歳で亡くなったちかを、詩人たちが『椎の木』『海盤車』など各詩誌で哀悼している。一部を先に紹介したが、彼女とその詩を各人がどう認識していたか、その一端が窺える。のちに「早逝の女流詩人」として神話的に語られる彼女の詩人表象は²³⁾、この時期にほぼ完成していたと思われるが、これについては別稿で再検討したい。追悼文の過半は、森開社版『左川ちか全詩集』に再録されている。「女流詩人の第一人者で、明星的地位にあつた人」との萩原朔太郎の言は²⁴⁾、よく知られる一節だ。朔太郎とちかとの縁談が、百田宗治から川崎昇に持ち込まれたこともあった²⁵⁾。

『椎の木』『マダム・ブランシュ』をともにした同世代の詩人江間章子は、明るく賑やかで何かと対照的な性格であつたらしい²⁶⁾。お互いの心証を『文藝汎論』5巻8号誌上の「左川ちか氏」「明るい夢と江間章子さん」（1935）で交わしあうなど、とくに親交が深かった。江間はいくつか哀惜の言葉を残している。蜜豆屋でのたわいもないおしゃべり、「甘まい、アイスクリーム

のように、舌の上に乗せるとすぐ融けてしまふような小説を」書きたいと²⁷⁾、銀座で話していた彼女の普段の姿だけを書き留める「左川さんの思ひ出」(1936)は印象的だ。同年春、自身の第一詩集『春への招待』(1936)には、ちかの名を献辞に刻んでいる。

80年代半ばの森開社版『左川ちか全詩集』を契機に、江間は再び半世紀前の青春を回想し始めた。なかでも『埋もれ詩の焔ら』(1985)は、当時のモダニズム詩人たちの若い息吹が、その詩とともに鮮やかによみがえる「若き詩人たちへの鎮魂歌」²⁸⁾として書かれた。江間章子が思い出す彼女の姿は、近現代詩史における異才のモダニズム詩人左川ちかとも、百田宗治、北園克衛や伊藤整たちの眼差しに映る左川ちかとも異なる、恋を語り将来の夢をみる、等身大の若い女性のそれであった²⁹⁾。

ちかの死は、モダニズム詩史の歴史的分岐点と重なっている。西欧文芸思潮との出会いから始まったモダニズム詩が、生き残りをかけてポスト・モダニズムを摸索する時期である。追悼特集を組んだ『椎の木』は、内部の混乱や誌風の変化もあって、ちかの死から数カ月後に事実上休刊。『マダム・ブランシュ』を34年に終刊したアルクイユのクラブは翌年解消、VOUクラブが結成される。『マダム・ブランシュ』の終刊は、『VOU』『レスプリ・ヌウボオ』『二〇世紀』と、異なる三誌の創刊を促し、モダニズム運動は分解する。戦前最後のモダニズム詩誌『新領土』の創刊が1937年に迫っていた³⁰⁾。

4 伝記・評伝と伊藤整 ノンフィクションとフィクションの狭間に

評伝としては、北海道の詩人小松瑛子が著した「黒い天鷲絨の天使 - 左川ちか小伝 -」(1972)が最も本格的なものである。兄川崎昇、妹吉岡キク、北園克衛、女学校時代の同級生ら多くの関係者に話を聞き、道内の資料を精査しており、「これ以上の左川ちか論は出ることはないであろう」と当時評価された³¹⁾。ちかを知るには現在も必読の書となっている。この評伝はちかの

文学を考える上で主要な論点をいくつも提示している。『北方文芸』5巻11号(1972)に掲載された同文献は、その後、『江古田文学』63号(2006)に再録された。ただし、ちかの複雑な家庭環境など諸般の事情もあって、小松瑛子はその全てを記すことはなかった。

そのような状況に加え、詩作以外の関連資料の未整理もあってか、小松の文献以外に本格的な伝記・評伝はない。準ずるものとしては、余市や関係者を訪ね、伊藤整らとの関わりなどを述べた優れた紀行文、山森三平「詩人の街・そして海」(1989)があげられる。その他、9章で触れる新井豊美『近代女性詩を読む』(2000)、たかとう匡子『私の女性詩人ノート』(2014)などの評論は、ちかの伝記的歩みと詩の特色の要点を踏まえ、一文を叙している。なお、左川ちかを直接知る関係者は、『セルパン』編集長の三浦逸雄の息子三浦朱門を最後として³²⁾、現在ほぼ鬼籍に入ったものと思われる。記憶としての左川ちかはすでに遠くなった。

10代の川崎愛が、翻訳者左川千賀として、さらに詩人左川ちかとして詩壇に登場、活躍するにあたっては、周囲の年長の人物に恵まれた点も大きい。例えば川崎昇、百田宗治、北園克衛、春山行夫、城左門(城昌幸)、そして伊藤整である。

伊藤整からみれば、ちかは小樽時代から最も親しい友人、川崎昇の妹である。一時期、恋愛関係にあったとされるが、昇も含め三人ともそれについて、確とは証言していない。江間章子は当時、むしろ北園とちかとの間に友情以上のものを感じ、伊藤との関係は全く気付かなかっただらしい³³⁾。

目録には、伊藤の文献を試みに約20点記載したが、実際にちかに言及したものは、管見では、「左川ちか詩集覚え書 - 刊行者 - 」(1936)、書評「『左川ちか詩集』」(1937)、随筆「文学的青春伝」(1951)、事典項目「詩と詩論」(1952)の4点に過ぎない。無署名の覚え書が附載された昭森社版『左川ちか詩集』には、伊藤の名前はどこにも記されていない³⁴⁾。

伊藤整全集未収録であり知られてこなかった、2点目の『北海タイムス』

掲載の書評はどうか。三岸節子による装幀挿絵や出版元の昭森社住所など、詩集の周辺について細かに記しているにも関わらず、自身が編者であることには一切触れておらず、意識的に痕跡を消したとしか思えない。しかし、百田宗治の手になるものと思われる『椎の木』5年2号(1936)の詩集告知文には、既に「編纂者伊藤整」と明記されている³⁵⁾。伊藤が編者であることは、江間章子、川崎昇ら関係者の証言からも確認できる³⁶⁾。

伊藤はこの書評で、「西欧の新精神の詩風」のもと、「今までの日本の女流詩人とは全く違つた斬新なしかも感覚的に確実な才能を示し、「新しい詩に女性独自の感覚的根拠を与へた」と、その進歩性を高く評した³⁷⁾。後述するように、翻訳詩から出発し、その登場を演出、導こうとした、伊藤の見たかった詩人左川ちかの理想像がここにある。

そして3点目の「文学的青春伝」は1929年、伊藤の昔の恋人(根上シゲル)の妹律が手伝う、東京の喫茶店のもとに一緒に同行したのが、律の友人ちかだったかもしれないという一節のみである。左川ちか、根上シゲル・律姉妹といった、数奇な人生を歩む女性たちが、伊藤によって虚々実々に表象されることを踏まえると、意味ありげな一節ではある³⁸⁾。

最後の「詩と詩論」は、『増補改訂日本文学大辞典』(新潮社、1952年)の項目で、『詩と詩論』の詩人を列挙するなかにその名を記すのみである。

伊藤整の寡黙は、北園克衛の雄弁さとは対照的だ。おそらく妻貞子、川崎昇への配慮もあっただろう。一方でその反動か、ちかをモデルにしたと思われる人物を、直接間接に詩と小説に多数登場させている。具体的な作品に関して諸説はあるが、小松瑛子など先行研究の指摘を踏まえた。

おそらく最も知られているのが、自伝的な長編小説『若い詩人の肖像』(1956)の川崎愛子だろう。ただ、短編小説「海の肖像」(1931)の冬子、「妨害者」(1956)の町子の印象の方が鮮烈だ。「海の捨児」(1928)、「浪の響きのなかで」(1936)など、いくつもの詩もその一列に加えられよう。伊藤整の創作におけるちかの表象を、稿者が論ずるには他日を期すとして、フィク

ションとしての川崎愛／左川ちかを語った伊藤の意図は、どこにあったのだろうか、疑問は尽きない³⁹⁾。

曾根博義は『伝記・伊藤整』（1977）などで、伊藤作品全般における女性たち、恋愛・性愛体験の虚構と現実を詳らかにしている。ちかとの奇妙な関係についても、整の創作に目配りしながら、通俗にならず文学論として論じている。伊藤整研究で同じ題材をさらに掘り下げたものに、川西政明『新・日本文壇史5』（2011）がある。

整の息子伊藤礼の『伊藤整氏こいぶみ往来』（1987）には、「川崎の愛ちゃんのようにみっともない女はだれも嫁のもらいてがない。そう思わないか」と、母タマに言われ、困ったような顔をして無言だった整。そしてちかの死後、「一生おれからはなれなかった。愛していたわけではない」と、妻貞子に語った整の言葉が記録されている⁴⁰⁾。

二人の関係について触れた文献は少なくないが、富岡多恵子を始め主なものは、9章で略述する。川村湊「妹の恋 - 大正・昭和の“少女”文学」（1988）は、ちかの妹的感性が、兄的存在である整に“捨てられた”経験によって、その悲しみと絶望を詩に表現したという、“妹の文学”の誕生をみている。

確かにちかの詩の世界は、整の詩「海の捨児」（1928）の反歌とも読める「海の捨子」（1935）に象徴されるように⁴¹⁾、整の詩に接近浸透しながら、決定的に離れ去り、孤独な世界観を紡いでいる。そして、郷愁を誘う整の抒情的な詩の世界をはるかに凌駕していく。整との関係がどうあれ、それは詩人左川ちかの生成に必要な実践であったといえよう。また近代ナリコ「孤独の始末 左川ちか『左川ちか全詩集』（2009）は、川崎愛の生と恋の苦しみと、詩人左川ちかの孤独の意味に迫った好論である。

作者の伝記的背景に作品を還元する読解態度は、独立したテキストの自由な読みを妨げる危険性を常に宿す。が、秘められた誕生から特殊な恋愛、早過ぎる死まで、左川ちかの生涯には、確かに読み手を引きずるような強い磁力があることも否定できない。その磁力は評伝という形式よりも、小説や映

像などといったフィクションとドキュメンタリーの狭間の力を求めているのかもしれない⁴²⁾。

5 戦後空白期から伝説の詩人へ

昭森社版『左川ちか詩集』(1936)以後、1940年代以降になると、一部の合集や知己の回想を除き、ちかへの言及がまばらになる。それはモダニズム詩人への戦後の厳しい評価を背景に⁴³⁾、詩集を書見することさえ困難になった彼女への関心が、殊に減退した時代のゆえだろう⁴⁴⁾。ちかと異なり、長く詩作を続けた江間章子や中村千尾ら女性詩人たちも、そのような戦後モダニズム批判の例外ではなかった⁴⁵⁾。

それだけではない。近現代詩史のなかで、左川ちかが長く埋もれていた状況について、富岡多恵子「詩人の誕生 - 左川ちか」(1978)は、次のようにその理由を看破する。

おそらく左川ちかの生きていた時代には、女の詩人はひたすら女をうたうことに於てのみ評価された。また左川ちかの才能は詩を書く男たちに珍重されたとしても、それはあくまで珍重されただけで、その詩の新しさを詩の歴史の中の出来事のひとつとして受けとめ得る男の詩人はいなかった。⁴⁶⁾

富岡の発言を踏まえてだろう、男性が女性の詩に期待するような女性性と母性をテーマにしなかったことから、ちかの存在が捨象されたという、歴史(History)叙述が孕む政治性を坂東里美たちは告発している⁴⁷⁾。

例えば1950年代に出版された現代詩の講座・全集の数々を見ると、2章で述べた北川冬彦他編『日本詩人全集 6』(1952)が15篇もの詩を収録した以外は、木原孝一『ポエム・ライブラリイ 6』(1955)の昭和詩史の記述にちか

の名前のみが散見する程度である。

1950年代は「詩壇における世代間のヘゲモニー（覇権争い）が顕著になった時期であり、全集・講座類に“現代詩人”として名を連ね、その詩が収録・言及されること自体が詩壇の力学と人脈を反映していたと青木亮人は指摘している⁴⁸⁾。であれば、現代詩の歴史叙述の試みそのものが、戦前・戦後の詩壇との関係や具体的人選を含め、高度の政治性を帯びて戦後に出発したことを窺い知るであろう。

そういった生い立ちを持つ詩史叙述の正統性をめぐる男たちの闘争によって、既に没した左川ちかの名は早々にこぼれ落ちていった。かような状況に対峙する、一種の危機感を原動力として、後述する新井豊美たちの女性詩史の系統叙述を試みる動きが、90年代以降本格化するのだ。ちかを語ることは、既存の歴史叙述に対するカウンターの性格を多分に帯びている。

全集以外では、久保田正文・司代隆三『日本現代詩辞典』（1955）に「左川ちか」が立項されている。事典類によるまとまった記述の戦後最初期と思われる、注目に値する⁴⁹⁾。

「左川ちかの詩、あれはよかったなあ」と⁵⁰⁾、戦後ちかの詩を知った詩人たちの回想を、大岡信『昭和詩史』（1969）は書きとめている。塚本邦雄「詩人について」（1959）や吉岡実「救済を願う時 - 《魚藍》のことなど」（1959）のように⁵¹⁾、50年代に彼女への特別な想いを告白する詩人たちは、直接の知己ならずとも確かに存在した。しかし、戦後に詩作を始めた者の多くにとって、ちかの名前は知ってはいても、その詩の全貌を知ることは難しかった。80年代まで左川ちかは「幻の詩人」として、伝説化していくことになる⁵²⁾。

6 北海道 風土・自然・文学経験

ちかの創作活動は1928年の上京以後で、小樽庁立高等女学校生（現小樽桜陽高校）時代の具体的な活動は、今のところ認められていない。ただ、柏

木俊三「The street fair」(1934)を始めとして、ちかの詩に北海道の自然と空気感、気風が存することは、早くに指摘されている。また、自然の色彩、起伏、躍動描写に注目し、ちかの詩と小松瑛子の詩風を重ね合わせた**枯木虎夫**「石狩平原の手紙」(1966)がある。ちかの風土性に本格的に言及したのは、枯木に導かれ、左川ちかの詩と出会った**小松瑛子**「黒い天鷲絨の天使 - 左川ちか小伝 -」(1972)であった。

家族たちと離れ、中川郡本別町の叔母のもとで暮らす小学時代を経て、女学生時代を過ごした余市・小樽周辺では当時、伊藤整、川崎昇、従兄川崎(田居)尚らが詩歌など同人活動を営んでいた。そういった環境が、彼らの同人誌や伊藤の第一詩集『雪明りの路』(1926)への文学的関心を育んでいったことは、伊藤整『若い詩人の肖像』(1956)などからも推察できる。この頃**川崎昇**は、夜更けまで入試勉強に励む病弱の愛を気にかけて慈しんだ、「**妹**」(1923)という歌を8首詠んでいる。最後まで仲睦まじい兄妹であった。

入学^{いり}たさの一途^りころか夜更^りまで 妹は机に向き^りて起き^りをり
 時折^りの咳^りをのがさ^りず臥床^りゆ 母は優^りしき声^りかけにけり
 しかすがに入学^{いり}たき^りものか身^りの弱^りさも 思^りひになけん予習^りする妹
 本^りに伏^りし今は疲^りれの寝^りにつける 妹^なが愛^りしさにマント^りきせけり⁵³⁾

東京の詩壇で活躍するちかの動静は、北海道でもリアルタイムに伝えられていた⁵⁴⁾。

また、北海道文学の文献でちかに触れているものとして、**支部沈黙他**『北海道文学全集 第22巻』(1981)、**木原直彦**『北海道文学散歩Ⅱ』(1982)、**木原直彦編**『ふるさと文学館 第1巻』(1993)などが参考になる。『北方文芸』『余市文芸』といった地域の文芸誌、そして後志地方の郷土史関係文献も存在する。とくに川崎昇・川崎尚については、伊藤整と親しかった**北見恂吉**(鈴木重道)「余市歌壇史(四)戦前篇」(1979)などの一連の著作、ちか

の記述はないが、田居尚（川崎尚）『「青空」と伊藤整』（北書房、1975）などで、その一端を窺うことができる。しかし、北海道でのちかの文学上の足跡は、やはり乏しいようだ⁵⁵⁾。そのためか従来の北海道文学史の叙述の中では、伊藤整の友人川崎昇の妹として、青春群像の点景のように名のみ語られることも少なくなかった。

郷里余市では、武井幸夫「詩人左川ちか小伝 - 文献に残されている評言を中心に -」（2003）などが、現地ならではの知見も交えている。また近年、ちかが多くモチーフとする海や緑などの自然描写について、小松瑛子以来、新井豊美、井坂洋子、水田宗子らが重要な指摘をしている⁵⁶⁾。例えば、ちかの「緑」（1932）全篇を引用する。

朝のバルコンから 波のやうにおしよせ
そこらちゆうあふれてしまふ
私は山のみちで溺れさうになり
息がつまつて いく度もまへのめりになるのを支へる
視力のなかの街は夢がまはるやうに開いたり閉ぢたりする
それらをめぐつて彼らはおそろしい勢で崩れかかる
私は人に捨てられた⁵⁷⁾

汽車通学をしていた頃、春先の溢れる緑に目を痛め通院していたという⁵⁸⁾、自然への怖れと詩作との関係は根深い。抒情的な意味あいを一貫して排し、暴力性を帯びて表象される“自然”に土着性や現実味は希薄である。対象からの孤絶、それはちかの文体の特色そのものであろう。

北海道文学研究に長く携わっている木原直彦と、北海道文学の収集保存と振興に努めてきた北海道文学館は、70年代から左川ちかにたびたび触れてきた⁵⁹⁾。また、伊藤整ら多彩な企画展を開催している市立小樽文学館では、2013年に左川ちか展を企画、現在も関連グッズを販売するなど、当地からの発信

拠点の一つとなっている。

小松瑛子を始めとして多くの道内出身の詩人・研究者が関心を寄せてきたが、北海道とちかをめぐる全体像は、まだまだ不明瞭と言わざるを得ない。余市の川崎愛が、いかに東京の左川ちかへと変成していったのか。北海道の周辺資料を再検討し、その文学経験の初発と生成を考えていくことが求められよう。

7 翻訳詩人左川ちかと日本語表現の近代

1929年、伊藤整指導のもと、川崎愛は翻訳者左川千賀を名乗り、伊藤や川崎昇らが創刊した『文芸レビュー』から文壇に登場した。翌年から筆名を左川ちかとして詩作を開始、文芸レビュー社発行の『ヴァリエテ』から「昆虫」(1930)を掲げてデビューする。病没するまで30篇近くの翻訳にも携わり続けた。

『Chamber Music』(1907)を散文調に訳した、生前唯一の単著『室楽』(1932)は、伊藤整が『ユリシーズ』を訳すなど、日本でJ・ジョイスの翻訳・受容が過熱、ピークに達した時期に刊行された⁶⁰⁾。これは、佐藤春夫が『Chamber Music』を一部訳(1926)して以来、西脇順三郎訳(1933)に先行する、初の完訳であった。

三者の訳を比較検討した菊地利奈は、従来、西脇訳が最初の完訳であるかの如く扱われる誤解がままあったことに、ジェンダーの壁があった可能性を示唆している。また、北海道出身の伊藤とちかが、イングランドならぬアイルランドの文学作品に関心を抱いた意味を指摘している⁶¹⁾。

ちか訳『室楽』には、伊藤整「ジョイスの『室楽』」(1932)、北園克衛「左川ちかと室楽」(1932)、春山行夫「ジョイスの三著」(1932)、本山茂也「《室楽》」(1933)らの言及が確認される。北園は「最早や散文として訳し得べき如何なる部分も *texte*に残さなかった」と評している⁶²⁾。ただ、例えば『椎

の木』1年10冊（1932）に掲載された『室楽』広告には、百田宗治であろう、「美しい訳だと感心。これが韻文だつたらと惜しく思ひました」との声もあった⁶³⁾。

オルダス・ハクスリーに関しては、1931年以降の5、6年に永松定や森本忠らが、『新文学研究』や文学全集などで集中的に翻訳している。ちかの「イソツプなほし書き」（1929）は、ハクスリーを日本で最初に訳した例ではないかと思う⁶⁴⁾。「憑かれた家」「いかにそれは現代人を撃つか」を1931年に訳した、ヴァージニア・ウルフについても、葛川篤を始めとして『新文学研究』『詩と詩論』を中心に、1930～33年に初めて到来したウルフブームの最前線に、ちかの翻訳作品があったことがわかる⁶⁵⁾。

翻訳家初期に監修にあっていた伊藤整の関与は、決して過小評価はできない。1929年、まずは川崎昇と二人で編集する『文芸レビュー』で、フランク・モルナールやA・ハクスリーなど、平易なコント的作品の訳出から彼女に経験させている。ついで文壇が注目するジョイスの翻訳詩人として、『詩と詩論』といったメジャー詩誌に『室楽』を連載開始、その存在と将来性を斯界に認めさせた。

『室楽』はちかの訳出ではあるが、校訂が伊藤の手になるものであったことは、『椎の木』1年7冊（1932）の詩集広告などに明記されている⁶⁶⁾。同時期、V・ウルフを始めとするちかの翻訳作品を多く掲載していた『新文学研究』は、伊藤が編集を推進していた雑誌に他ならない。そしてちか自身の創作詩の掲載誌が、『詩と詩論』などの有力詩誌に本格的に移行する⁶⁷⁾。1931年半ばまで、ことはそのように推移した。プロデューサー伊藤整の綿密な戦略がそこに窺われる。他にもアメリカのシャーウッド・アンダーソンの小説を伊藤整に続いて『文芸レビュー』で訳したり、ミナ・ロイの詩を最初に日本で訳すなどした、翻訳史上の位置付けに関しては、個別の英語英文学研究で言及されている⁶⁸⁾。

そもそも、ちかの文学表現の営み自体が、翻訳から出発していることから、

その詩風は翻訳体験を経て生まれたものであることは否定できない。小松瑛子以来、ちかの翻訳についての指摘自体は多いが、ちかの創作詩にJ・ジョイスやV・ウルフの手法と似たような印象を受けると批評するにとどまるものも多く、本格的な論考は意外に少ない。

ちかは7年間で、欧米の作家20人前後の翻訳を手掛けている。「我が芸道の師」とジョイスを仰いだ伊藤はともかく、『室楽』だけを訳したちかにとって、ジョイスがどれほど決定的な位置を占めていただろうか。いかにモダニズム文学の巨頭とはいえ、ジョイスのみで論証するのは具体的論拠に乏しく、それこそ伊藤の目論見に陥りかねない。本稿では、個々の翻訳作品の具体的内容の分析までは言及しえないが、一連の翻訳体験の総体を捉える必要があろう。

ただ、菊地は先述の文献などで、ちかの『室楽』が日本にこれまでなかった本格的散文詩であることに注目しながら、創作における単語の表現や詩のスタイルに、ジョイスの翻訳体験の影響を指摘している⁶⁹⁾。『室楽』を散文調に訳すという判断が誰のものにせよ、ちかの散文詩を考える上で確かに興味深い。一連の研究報告の公刊が期待される。菊地の所論と並ぶものとして、藤井貞和『日本文学源流史』(2016)は、折口信夫の文学史を意識しつつ、ちかの翻訳詩に近代詩史における、日本語による口語散文詩の発生をみている。

また國重游は、「小説家としての左川ちか - ヴァージニア・ウルフとの比較において」(2009)で、ウルフとの比較を手がかりに、類似性の指摘にとどまらず、詩から小説へとちかの表現の方向性を仮説している。狭義のモダニズム詩人理解にとどまらない、左川ちかの特質を大胆に論じており、意欲的な論考である。

ジョイスに拘泥することなく、それ以外の作家たち、ハリー・クロスビーなども含めた全体的な分析は、坂東里美が一連の論考「左川ちかと翻訳(1)～(5)」(2012～15)をなしている。翻訳と創作表現との具体的な関係を立論し、ちかの詩的言語獲得の瞬間を明らかにした坂東が指摘するように、ち

かがジョイス以上に共感したであろう、前衛詩人ミナ・ロイの「寡婦のジャズ」(1933)と、ちかの「太陽の唄」(1935)を読み比べてほしい⁷⁰⁾。翻訳の過程で気に入った言葉やイメージを蓄え、全く別の作品に変容させるスリリングなちかの試みの一端が窺えるだろう。このような視点での更なる研究の進展を待ち望みたい。具体的なテキストをもとに、翻訳と受容を視野に入れ、モダニズム文学史の内外で左川ちかを位置付ける作業は、始まったばかりである。

『文芸レビュー』の左川千賀時代に関連して、今回の調査で新たに判明した事実をここに付記する。『文芸レビュー』1巻4号(1929)で川崎昇は、左川麟駛朗なる人物が編集アシスタント(主に広告担当)に加わったことを編集後記で付言している。「係」として同号、翌月号に業務的な一文を記しているに過ぎないが、件の左川麟駛朗氏とは左川千賀に次ぐ変名であろうか⁷¹⁾。

近年の動向として、盛んな詩の英訳に少し言及しよう。NAKAYASU, Sawako(中保佐和子)『MOUTH:EATS COLER – Sagawa Chika Translations, Anti-Translations, & Originals』(2011)、同『THE COLLECTED POEMS OF CHIKA SAGAWA』(2015、米国PEN翻訳賞)やKIKUCHI, Rina・Carol Hayes「Selected Translations of Sagawa Chika's Poems I」(2013)などの労作である。これら英訳とJohn Solt『北園克衛の詩と詩学意味のタペストリーを細断する』(2010)の研究などに触発され、翻訳を通じ海外のモダニズムと繋がっていた左川ちかを海外が逆発見したのである。

第二次大戦後、忘れ去られていたモダニズムの時代、20世紀初頭の日本において「最も革新的な前衛詩人」⁷²⁾がいたことを、彼らは驚きの眼で凝視している。なお、海外の文献については、紙幅と時間の関係で、今回は一部を除き、原則として記載を見送った。今後に期したい。

また、森開社版『左川ちか全詩集』(1983)、『新編左川ちか詩集 前奏曲』(2017)には『室楽』が収録、とくに前奏曲版は雑誌初出に揃えている点に

特徴がある。『左川ちか翻訳詩集』(2011)と『左川ちか資料集成』(2017)には『室楽』を含む翻訳詩篇、翻訳小説等が収録されている。

左川ちかの翻訳と創作との関わりを今のところ、稿者は次のように捉えている。まずは翻訳者左川千賀を名乗っていた翻訳初期(1929年4月～)。伊藤整がテキストを選択し、これを指導する。翌年(1930年8月～)のモダニズム詩人左川ちかの鮮烈な登場のために用意された前史である。

ついで北園克衛らとの出会いを活かしながら、次第に翻訳詩を中断、創作詩に集中する時期(1932年夏～“マダム・ブランシュの時代”)を迎える。

そして翻訳再開後の時期(1933年夏～)、詩作においても自立していたちは、翻訳作品を自分で選り抜き、ややマイナーな作者の作品にシフトするように、選択眼も自在に広がるようになった⁷³⁾。同時に、“マダム・ブランシュの時代”を経てモダニズム詩人から転回、さらに本格的な散文詩を志向し、独自の詩風を重ねていくようになる。

翻訳から出発したちかだからこそ、改めて翻訳と向き合うことで、モダニズム詩人のさらにその先、いわばポストモダニズムともいうべき可能性を見出すことが可能になったといえよう。投稿誌も高橋新吉、井東憲、山本和夫らが会する『るねっさんす』を始めとして⁷⁴⁾、狭義のモダニズム誌の枠を飛び出し、当時の横断的な文学メディアの空間で活動していくようになったものと考えられる⁷⁵⁾。左川ちかの全体像をモダニズムの一語に還元しがちな平板な理解は、今後大きな修正を迫られることになろう。

ところで、いつか銀座のようなところで、「シルビアビーチの本屋」のような店を持ちたいと、ちかは江間章子に語っている。ちかはそのやりとりを、内田忠への1935年夏の手紙に書き残している⁷⁶⁾。モダニストの拠り所として、1920～30年代のパリの文学シーンを彩った、S・ビーチのシェイクスピア・アンド・カンパニーのような店の女主人。亡くなる半年前、ちかが病を得たころの夢であった。

世紀の問題作、J・ジョイス『ユリシーズ』の出版元でもあったこの書店

は、第二次大戦中に閉店するまでセーヌ川左岸に佇んでいた。現在は同名の二代目店舗が左岸に店を構えている。セーヌ川とモンパルナスに挟まれたこの地区には、カフェや書店、出版社などが立地し、国籍・階級を問わず、女性芸術家たちのコミュニティサロンが形成されていた⁷⁷⁾。それは“左岸の女たち”が集う、一種のアジール（聖域、避難所）であった。

中保佐和子は、前述のちかの翻訳詩集において、左川の筆名はセーヌ左岸を暗示すると述べている⁷⁸⁾。管見の限り、この見解は日本の文献で見かけたことはないが、アメリカでは受け入れられているようだ⁷⁹⁾。

左川というペンネームの由来については、共産党本部の建物を省線の中から見た時に名付けたと、小松瑛子は言及している⁸⁰⁾。川崎昇たちからの聞き取りかもしれない。1933年に虐殺された、同郷の小林多喜二を想起するような、もう一つの時代相を反映した興味深い説だが、当時の非合法政党が本部たる建築物を有していたわけもなく、若干の疑問が残る。

ただ、代表作「死の髻」（1931）に「詩と思想の弾圧の中であって、わずかに支え得た社会的言語」を見た小松の解釈を思い起こすならば⁸¹⁾、ちかが有した同時代への関心、その詩の持つ社会的意味の可能性について、多分に等閑視されてきた傾向はあろう。いずれにせよ、筆名の由来は現状では真偽不明としか言いようがないが、アジールとしての左岸といい、“左”の持つ前衛性、自由性を踏まえるなら、両者の発想は存外近いところにある。

左川千賀時代に拠った『文芸レビュー』は、キュビズム、ダダイズム、シュルレアリスムといったフランスモダニズムへの関心が顕著であった。共同創刊者の一人、河原直一郎は当時、パリに長期滞在し、同誌連載「巴里通信」で⁸²⁾、セーヌ川沿いのカフェやボートで巡った風景、無国籍流の爛熟したパリ人の文化を語っている。同誌の「モンパルナス新風景」では⁸³⁾、カフェに集い、芸術談議に花を咲かせるモダニストを軽快なコメントリーとイラストで特集している。左川を名乗る直前、同郷の河原や伊藤たちを經由して、そのような左岸のトポスともいうべき力を感じていたのかもしれない。

詩を作り始め、左川ちかとして詩壇にデビューすることになる1930年8月。その夏、どこへも行かずに、部屋の世界地図をボンヤリ眺めて過ごしていたという。そうした時間が「ちょっとの間、たのしいです」と川村欽吾への手紙に綴った⁸⁴⁾、その視線は地図のどこを見つめていたのだろう。

最期まで自由と前衛、多彩な“左”なるものに導かれた左川ちか⁸⁵⁾。なるほど、「シルビアビーチの本屋」のような店を開きたいと夢見た詩人に、これ以上ない相応しい筆名であるように思う。

後年、日本のガートルード・スタインになったはずとの**阪本越郎**の予感、左岸のサロンを開いていたモダニストにその将来を重ね合わせた最高の賛辞だったのかもしれない⁸⁶⁾。

8 詩歌・音楽への影響

村野四郎は、詩「碑銘 - 左川ちか子氏のために -」（1936）で、黒衣をまとい、黒縁の眼鏡をかけたイメージが鮮烈なちかの死を悼んだ。同世代の石川県在住の詩人**打和長江**は、ごく私的な交流があったようで、ちかの住んでいた世田谷の情景を交えた冬の詩「黒縁の写真」（1936）を捧げた⁸⁷⁾。

その死から3年後の1939年に、**吉岡実**は昭森社版『左川ちか詩集』に出会い、自らの詩歌観が大きく変わったと、「救済を願う時 - 《魚藍》のことなど」（1959）、「読書遍歴」（1968）で語っている⁸⁸⁾。直接間接に影響を受けた詩人は少なくないであろう。

『マダム・ブランシュ』で交流のあった、同世代のモダニズム詩人**上田修**は、ちかの「海の捨子」（1935）の一節を引きながら、「左川ちかへの追憶」（1991）を詠んだ。**栗栖丈（中村文昭）**『『變奏曲』集四篇左川ちかに寄す』（2006）は、「昆虫」（1930）、「目覚めるために」（1933）、「雪の門」（1933）、「季節の夜」（1936）などを主題にした印象的な詩篇である。

佐藤弓生「少年ミドリと暗い夏の娘」（2008）は、ちかの「暗い夏」（1933）

への反歌を歌っている。中村恵美（神泉薫）「“ちか”幻燈」（2009）は、ちかの「私の写真」（1930）、「緑の焰」（1931）、「記憶の海」（1932）などの一節を引用しながら、コラージュのような独特の幻燈世界を詠んだ。

左川ちかの詩は、詩人以外にもインスピレーションを与えている。「かつて、詩の一部門的に音楽を伴奏風を使用した」と指摘されるちかは⁸⁹⁾、「歌になる詩を書こうと思う」と心境を吐露している⁹⁰⁾。「昆虫」（1930）などを朗読するとわかるが、韻律に富むその詩と音楽とのイメージ関係を考える上で、示唆深いのが作曲家三善晃の例である。

萩原朔太郎や丸山薫など、数多くの文学作品を題材とした三善は、ちかの4つの詩「白く」（1932）、「他の一つのもの」（1933）、「むかしの花」（1933）、「Finale」（1934）をもとに、声楽曲『白く～^マ佐川ちかによる4つの詩』（1962）を作曲した。曲に漂う絶望とリリシズムは、ちかの詩の世界に最も浸透している。三善は「作曲者のことば」（1963）で、次のように語る。

左川ちかの詩に不思議な絶望がある 失った声 向う側の音 見えない花
そしてもう近くに居ない夏 しかしそれは艶冶な装いにくるまれ
ほとんど誇り高きものの姿をして居る 微量の毒を含んだ棘が
老人を嗤ひ 少女らの指先に虚しい情感を植え 私を刺した⁹¹⁾

『白く』は最も評価されている三善の歌曲集の一つである。丘山万里子「生と死と創造と - 作曲家・三善晃論」（1981）などの評論もあり、今なお深く歌い継がれている。一般に左川ちかの詩は視覚的イメージ、絵画との関係で語られることが多いが、三善の音楽での受容のあり方は、言及が点在する1960年代の状況にあって、ひと際注目されよう。近年でも、2017年に芥川作曲賞を受賞した茂木宏文が、連作歌曲として「左川ちかの詩による二つの歌」（2017）を作曲するなど、音楽との親和性は極めて高い。

また、北海道の人形作家高山美香が左川ちか像を制作、国際的豆本作家赤

井都がちかの言葉の数々を造本、ともに展覧会を開いている。造形芸術でもその詩のイメージは確実に影響を与え、今後はサブカルチャー含め多様な領域での受容と展開が予想される⁹²⁾。

9 批評・評論・研究の近業

80年代の森開社版『左川ちか全詩集』出版、90年代の『現代詩誌総覧』シリーズなど、資料整備の進展を追い風に鑑賞・批評・評論・研究が増加していった。これまでと同様、詩人の発言が多いが、注目すべき見解も少くない。ここ10年ほどは、近現代文学研究者の論考が本格化している。

80年代までの文献として、屢述は避けるが、小松瑛子「黒い天鷲絨の天使 - 左川ちか小伝 -」(1972)は、個々の詩についてもこれを丁寧に読んだ重厚な研究である。「左川ちかが、戦後をへて二十年すぎた現在も、北海道の詩史に加えられなかった不幸をおもい、その発掘のため、私は左川の評伝をまとめた」と小松はのちに記した⁹³⁾。

「戦後空白期」の章で触れた富岡多恵子「詩人の誕生 - 左川ちか」(1978)は、小松文献とともに参看されるべき文献の一つであろう。「緑」(1932)、「海の捨子」(1935)などを通し、詩人左川ちかの誕生に必要な要素として、“男の才能の観察者であった女”を発見している。なるほど、それはもはや通常の恋愛関係などではなく、“伊藤整の恋人”と簡単に形容はできないだろう。富岡は言う。

もし真実、このひとが兄の親友である詩人と恋愛したとしても、その恋愛はこのひとの詩人が必要としたからであった。男に恋するよりも、兄の親友である詩人のもつ才能のありかを恋愛によってうかがうことで、自分の詩を見きわめる必要があった。⁹⁴⁾

2000年代以降の主要な議論の特徴は、ジェンダー概念によって対象を再検証する、フェミニズム文学批評の観点が顕著である点だ。詩史のなかでこぼれ落ちていた左川ちかを再発掘したのは、小松や富岡であったが、詩そのものに焦点をあてた分析は、文学批評の成熟を今暫く待たねばならなかった⁹⁵⁾。女性の作品を作家論の人生を彩る一要素として扱う傾向から、作品そのものを一種の文化テキストとして、その内部に分け入って読むスタイルである。左川ちかの研究にあたっては、90年代を過渡期として、本格的には2000年代ということになる。

もちろん、ちかの詩を読みたい、語りたいという思いの原動力の一つには、上述した本格的な女性詩史叙述への渴望があっただろう。むしろ女性詩なるものが、自明の無垢なかたちで発掘されるわけもなく、女性詩とは何かという問いかけは、不断になされなければならない。歴史は、それを語る人間の眼差しの数だけ存在するからだ。

いくつか主要文献のあらましを述べよう。新井豊美は、『[女性詩]事情』(1994)、『近代女性詩を読む』(2000)、『女性詩史再考 「女性詩」から「女性性の詩」へ』(2007)など、一貫して女性詩史叙述に取り組んできた⁹⁶⁾。明治大正の与謝野晶子と昭和初期の左川ちかを女性詩初期の代表として、詩史の系譜を編み、ちかの言語感覚を丁寧に読み解いている。

福田(井上)知子『微熱の花びら 林芙美子・尾崎翠・左川ちか』(1990)は、竹内てるよ、尾崎翠らの女性詩人たちとの位相のなかで位置づけた。同時代の永瀬清子、金子みすゞ、江間章子らを横断的に並べることで、昭和初期の都市モダニズムを活写したのが、井坂洋子『永瀬清子』(2000)、寺田操『左川ちか・青のコラージュ・ロマン』(2000)、たかとう匡子『私の女性詩人ノート』(2014)である。

たかとう、寺田、福田や季村敏夫など、ちかとその周辺に関心を寄せる現代の論者に関西、とりわけ神戸ゆかりの詩人が少なくないのはおそらく偶然ではない。「プロムナード」(1934)を神戸の詩誌『闘鶏』に寄稿した左川ち

かを挟み、神戸・東京発のムーブメントを担った竹中郁・濱名與志春ら神戸モダニズムの系譜を今に思わせ興味深い⁹⁷⁾。

また、中村文昭を中心とするえこし会が、『えこし通信』「天才 詩人左川ちか小特集」(2004)などで、主に作品論から議論を提起している。『えこし通信』の所論は、のちに『江古田文学』「特集天才左川ちか」(2006)に再録された。『江古田文学』は、小松による評伝なども再録、城戸朱理の講演、新井豊美の評論や日大生たちの小論、略年譜・文献一覧なども一挙に掲載され、現在のところ、最も大部の評論集となっている。

水田宗子『モダニズムと＜戦後女性詩＞の展開』(2012)は、故郷からも社会からも切り離され、内面的亀裂を抱えながら自我をさらけ出す、自然や都会といった暴力的世界に対峙する、個の“私”という存在を左川ちかに見た。女性の主体形成、自己表現の問題について、ジェンダー文化論とペルソナ(語り手)論という視点を軸に、テキストから詳細に読み込んでいる。2012年4月、同著の刊行を記念したシンポジウムが開催、現代詩の原点としてのちかの詩の意味、モダニズムの問題など多岐にわたる討論がなされた⁹⁸⁾。

藤本寿彦「一九三〇年代における女性詩の表現 - 左川ちかを中心として - 」(2008)は、詩人左川ちかの表現構築の戦略性を、川崎愛の実人生からのアプローチではなく、当時のジェンダー空間のなかで、左川ちかが表象したテキスト分析から徹底的に試みた研究である。同論文を収めた『周縁としてのモダニズム 日本現代詩の底流』は、左川ちかとともに百田宗治や春山行夫など、現代詩史を考える上で極めて刺激に富んでいる。

瀬本阿矢は、「左川ちかと映画 - 『暗い夏』と＜アンダルシアの犬＞を中心に - 」(2011)において、映画や絵画など同時代受容のなかで、ちかのテキストを、シュルレアリスムの独自の受容体として位置付け直している。詩の視覚性の由来に関する具体的検証は初めてではないか。瀬本の『転用と受容：日本の女性詩人たちによるシュルレアリスム受容を中心に』(2011)は、左川ちかや上田静栄ら女性芸術家の創作活動における、シュルレアリスム受容

と形成研究の集大成といえる。

鳥居万由実「1930年代モダニズム詩における、女性の自己表現の方策、左川ちか、山中富美子らの作品を手がかりにして」(2015)は、従来の評論・研究を踏まえた最も新しい論考の一つである。左川ちか、山中富美子、北園克衛、竹中郁らの作品をテキストに、詩的主体である“私”をどのような構造のもと、構築し表現したか、表現し得なかったかを、その葛藤と困難をあわせて分析している。さらにちかの詩のイメージ系列である昆虫群を、作詩手法の戦略という視点で論じ、学ぶべき点が多い。

『文芸レビュー』『マダム・ブランシュ』を始め、ちかに関連する雑誌・文献資料の研究・復刻は、この20年で飛躍的に進展、整備された。内堀弘・澤正宏・竹松良明・藤本寿彦・和田博文編『現代詩誌総覧』シリーズ(1996～98)、和田博文監修・内堀弘他編『コレクション・日本シュールレアリスム』シリーズ(1999～2001)、和田博文編『現代詩1920-1944-モダニズム詩誌作品要覧』(2006)、早稲田大学図書館編『マイクロフィッシュ版 文芸レビュー』(雄松堂アーカイブズ,2008)他関連文献、和田博文編『コレクション・モダン都市文化37 紀伊國屋書店と新宿』(2008)、和田博文・杉浦静編『戦後詩誌総覧』シリーズ(2007～2010)、和田博文監修『コレクション・都市モダニズム詩誌』シリーズ(2009～2014)などである。

また現在、ちかの詩を多数掲載し、論評特集や追悼特集が組まれた第三次『椎の木』復刻版(2017～)が、外村彰の詳細な研究を具え、京都の三人社より刊行中である。『左川ちか資料集成』(2017)とともに、今後の議論・研究の多大なる進展と全集・詩集・追悼詩文集編纂、特集企画等の展開が大いに期待される。

以上、極めて不十分ながら、左川ちかをめぐる評論・研究の概観と、全体像の把握に努めた。独自の詩風を重ねたこのモダニズム詩人は、死後ほどなくして夭逝の女流詩人として表象されながら、戦後空白期を挟み、幻の詩人として伝説化する。男性中心の詩史叙述に対するカウンターとしても、近年

再評価の機運が高まる一方で、モダニズム史の中での位置付け、同時代の他の詩人たちとの関係、翻訳詩の問題など、論点は多様化している。資料研究とテキスト分析という原点に戻りつつ、先学の豊かな蓄積を批判的に継承し、確かな議論を進めていくことが肝要であろう。

10 おわりに 解釈の迷宮を超えて

昆虫が電流のやうな速度で繁殖した。

地殻の腫物をなめつくした。

美しい衣装を裏返へして、都会の夜は女のやうに眠つた。

私はいま痣を乾す。

鱗のやうな皮膚は金属のやうに冷たいのである。

顔半面を塗りつぶしたこの秘密をたれもしつてはゐないのだ。

夜は、盗まれた表情を自由に廻転さす痣のある女を有頂天にする。⁹⁹⁾

左川ちかのデビュー作「昆虫」(1930) 全篇である。顔半分を塗りつぶし昆虫の殻を被り、女は昼の社会を生きる。痣を乾し殻を脱ぎ、有頂天になる女の夜。誰も知らない“秘密”とは何だろうか。新井豊美は、伊藤との秘めた関係にこれを求め、藤本寿彦は、昼の仮面(化粧)と隠された夜の素顔を女が告発することで、欺き／欺かれている男性とのジェンダー的關係を暴露した詩と解釈する¹⁰⁰⁾。かたや坂東里美は、ちかの初作であることに着目し、“秘密”は夜に心を解放し、詩を作る私と解している¹⁰¹⁾。

ちかの人生、ここでは伊藤との関係にあてはめ詩を読み込む行為を、坂東

は「この作品をつまらなくしてしまう」、「誰の心にも一つや二つ『痣』ぐらいはある。もし伊藤との恋愛を読むなら、『痣』程度にしておいた方がよい」と軽やかに語っている¹⁰²⁾。

ちかの生涯をどこまで作品の読みに還元してしまうのか、そのさじ加減は難しい。例えば、6章で引用した「緑」(1932)の最後の一行「私は人に捨てられた」は、伊藤整に捨てられたとの解釈も散見されるが、これなども「昆虫」に通ずる問題を孕んでいる。

また、いわゆる“早逝詩人”として表象し、早く死んだことに彼女の詩の意味すら特別視する読み方は今なお根強いが、そこにも違和感がある¹⁰³⁾。他方で、あまりにジェンダー概念に傾斜して読み解こうとするのも、その詩の可能性を縛ってはいないかとの懸念もある。さらに言えば、ちかの詩の言葉それ自体が、そもそもどこまで意識的に意味と解釈に支配されたものであるか疑問が残るところだ。

作者がどのような意味を込め詩作したかを探ることは肝心ではあるが、読み手がどのように詩を読んだのかも同じく重要であろう。「昆虫」の“私”とは、左川ちか一人であり、そうではない。例えば、詩を書く私をこの詩に見出すとき、それは詩を読む私たちを語り出す営みに等しいのでないか。であれば、“秘密”をどのように解釈してもよいし、またはどうでもよいともいえる。“秘密”は詩を読む私たちの側にこそ存在するからだ。

作品と作者は別のものだと判断するには、作者を知らなければならない。左川ちかの文学と伊藤整の文学は別のものだと判断するには、二人の文学を知らなければならない。詩を新たに読み直すには、これまでの先人の読みを知らなければならない。そういった試みの一端から生まれたのが、本稿と関連文献目録である。

その詩の一群に稿者が最初に出会ったとき、伝記的背景を始め、左川ちかの名前すら知らなかったが、意味と内容を考えるよりも、感じなさいとでもというような、昨今の詩よりもはるかにモダンでアヴァンギャルドな風格。簡

潔な一文と一文の連続線上に転がる言葉と言葉。言葉の記号がコラーージュしてシュールな世界を現出させる、前衛絵画のような視覚性に瞠目した。

クールに硬質でありながら、観念的になり過ぎず、他のモダニズム詩には希薄な、“私”という何者かの熱量をじかに感じた。“私”とはおそらく、川崎愛でも左川ちかでもない、何者かとしか言いようがなく、それは読み手の心の臓を直接鷲掴みにするような世界の住人だった。そして何といっても、最後のセンテンスの破壊力である。ちかの詩は読み手の想像力を刺激する。先人たちの読みに出会うことで、さらなる知見と洞察、想像の翼は広がるだろう。本稿がその一助となれば幸甚である。

今後、如上の研究史の状況分析を踏まえ、左川ちか像の創出に大きく与かった、伊藤整の創作と沈黙の意味、『左川ちか詩集』における詩文の編集について、別に稿を改めて述べる。また、北海道時代からの左川ちかの文学経験の初発と生成の問題。そして、前期モダニズムから中期“マダム・ブランシュの時代”へ、後期（ポスト）モダニズムに至る具体的な詩風の解析。さらには、詩人たちによる左川ちか表象イメージの史的解析などは、近い将来の課題としたい。

注

- 1) 例えば、水田宗子・藤井貞和・井坂洋子・水無田気流「[シンポジウム] 左川ちかから手渡されるもの 詩とジェンダー、その先へ」(水田宗子編『ジェンダーとアジア 水田宗子対談・鼎談・シンポジウム集3』城西大学出版会、2016年)では、水田は左川ちかの詩を「戦後の女性詩の原点」(238頁)、藤井は「現代詩の始まり」(257頁)と位置づけている。
- 2) 曾根博義「編輯者の一人として」(小野夕靨・川崎浩典・曾根博義編『左川ちか全詩集』附属の葉、森開社、1983年)12頁。曾根博義「左川ちか 補遺と訂正」(『江古田文学』64号、2006年11月)で、未発見のちかの作品・同時代評・関連文献を想定して、「若い方々にぜひ受け継いでほしいと思うのは、何よりもまず左川ちかの著作全体を徹底的に調べ上げ、誰でもそのすべてに近づけるようにするための、地道な意志と努力の持続である。そのために左川ちかに関心のある人々が協力して情報を提供し合うようになることを心から望みたいと思う。」(63頁)との言葉は重い。

- 3) なお、稿者の関連文献目録及び解説については、『左川ちか資料集成』別冊『左川ちか関連文献目録稿・解説』（2017）として、一般読者を想定し、本稿草稿を書き改めたものが別に刊行されている。収録文献に関しては、本稿附属の目録（約670点）が『資料集成』版の内容（追補含め約490点）を増補改訂したものとなる。
- 4) 例えば、池田誠「左川ちか」（『現代詩大事典』三省堂、2008年）
- 5) 左川ちか著・伊藤整編『左川ちか詩集』（昭森社、1936年）167頁
- 6) 前掲『左川ちか詩集』、167頁
- 7) 島田龍「(仮題) <詩人左川ちか>像の創出と伊藤整」（『文学史を読みかえる』研究会編『(仮題) 文学史を読みかえる・論集』インパクト出版会、2018秋以降予定）
- 8) 党派やジャンルを横断する柔軟な理解者として若手詩人を積極的に紹介、1930年代の詩的トレンドを演出した百田宗治の特質については、藤本寿彦「アンデパンダン誌『今日の詩』と一九三〇年代のポエジイ運動 - 百田宗治の再評価に向けて -」（『周縁としてのモダニズム 日本現代詩の底流』双文社出版、2009年）に詳しい。
- 9) 濱名與志春「CHAMBER MUSIC その他」（『椎の木』3-2「特集左川ちかの作品」1934年2月）43頁
- 10) 伊東昌子「女流詩人の旗」（『文藝汎論』5-5、1935年5月）37頁
- 11) 一部引用する。「画家は瞬間のイメージを現実の空間に自由に具象化することの出来る線と色をもつてゐる。彼の魔術は凡てのありふれた観念を破壊することに成功した。(略) 又、いつも見馴れて退屈してゐるものをぶちこわして新しい価値のレッテルを貼る。画家の仕事と詩人のそれとは非常に似てゐると思ふ。その証拠に絵を見るとくたびれる。色彩の、或はモチーフにおける構図、陰影のもち来らす雰囲気、線が空間との接点を決める構図、こんな注意をして、効果を考へて構成された詩がいくつあるだらうか。」（『魚の眼であつたならば』『カイエ』7、1934年）
- 12) 西脇順三郎「気品ある思考」（『椎の木』5-3、1936年3月）45頁
- 13) 田中克己「左川ちかノ詩」（『Etoile de Mer [海盤車]』5-21、1936年6月）16頁
- 14) 乾直恵「思ひ出すまま」（『椎の木』5-3、1936年3月）44～45頁。伊藤が指し示した詩が何であったか、乾は書き残していないが、小松瑛子「黒い天鵝絨の天使 - 左川ちか小伝」（『北方文芸』5-11、1972年11月）は、その散文詩を「前奏曲」（1934）と推定している。
- 15) 中山省三郎「海の天使よ」（『椎の木』5-3、1936年3月）19頁
- 16) 北園克衛「二人の若い女詩人」（『今日の詩』5.1931.4）17頁
- 17) 最晩年の北園による左川ちかの回想は、実際に取材した小松瑛子「左川ちかと北園克衛」（『北海タイムス』1972年11月15日朝刊）に詳しい。
- 18) 北園克衛「左川ちかと室楽」（『椎の木』1-10、1932年10月）118頁
- 19) 北園克衛「左川ちか」（『詩学』6-8、「物故詩人追悼特輯」1951年8月）一部引用する。「一九三〇年の初夏の頃であつた。僕が住むことになつた西銀座の井上ビルの上階に

「文藝レビュー」といふ同人雑誌の編集部があつた。僕はそこで一人の若い詩を書くといふ少女に紹介された。そのいかにもしなやかな體つきの少女が左川ちかであつたのである。當時彼女はまだ自分の書く詩が、他の詩人達が書く詩とあまりにかけ離れてゐるので、戸迷ひしてゐるといふ状態だつた。凡庸でない詩人が最初に経験するこの不當な不安といふのが、いかに無慈悲なものであるかを、平凡な詩人達は想像することができない。

ちょうどその頃、僕は岩本修蔵とアルクイユのクラブをつくり、「白紙」という詩の雑誌を発行してゐたので、そのメムバアに彼女を加へることにした。彼女は最初から、あまり多くの詩を書かなかつたが、一つ一つの作品は何れも均整のとれたものであつた。均整がとれた作品といふ意味は、単にレトリックの上でのそつのなさといふ意味ではない。レトリックの世界と、それからはみだしてゐるものとの均衡によつて整へられた安定といふ意味である。

彼女は一作ごとに堅実な生長をしていつた。「白紙」が「MADAME BLANCHE」と改題し、四十数名の大きなグループとなつてからも、目だつた存在であつた。ただ、目だつた存在といつても、それが言ふところの人間的な華やかさといふ意味ではない。病弱であつたし、口かずもすくなかつた。(略) もうすつかり夜となつた銀座のオフィスの三階の暗い窓を背にして、一寸ピアズレエの少女を思はせる黒い天鵝絨の衣裳を着た左川ちかと、編集プランを練つたり、遅い夕食をとつたことなどが想ひ出される。

彼女は生れつき謙譲で静かな性質であつたが、詩の世界では王女のやうに自由に大胆にふるまつてゐた。美も死も彼女の自由を奪ふこともゆがめることもできなかつた。彼女は自分自身の詩を書くために生れてきたやうなものである。ほんの少しの、しかし永久に燦めくやうな作品を書き、そして、いそいで處女のままで死んでいつた。今少しゆつくりと死んでもよかつたのに。」79頁

- 20) 江間章子『埋もれ詩の焰ら』（講談社、1985年）129～134頁、新井豊美「屈託のなさと不思議な自由感 初期モダニズムの女流詩人たちと北園克衛」（『現代詩手帖』45-11、「特集 生誕百年・北園克衛再読」2002年11月）64頁、John Solt『北園克衛の詩と詩学 意味のタペストリーを細断する』（田口哲也監訳、思潮社、2010年）154、435頁
- 21) 中村千尾「左川ちかの詩」（『葡萄』22、葡萄発行所、1962年7月）18頁
- 22) 江間章子前掲『埋もれ詩の焰ら』50～51頁
- 23) 例えば、小川和佑「美の探究者たちもうひとつの近代詩史」（『昭和詩歌俳句史』別冊一億人の昭和史、毎日新聞社、1978年）は「夭折の女神」と讃えた。322頁
- 24) 萩原朔太郎「手簡」（『椎の木』5-3、1936年3月）34頁
- 25) 左川ちか著・小野夕霞・川崎浩典・曾根博義編『左川ちか全詩集』（森開社、1983年）「年譜」287頁
- 26) 川村欽吾「詩人左川ちか回想」（『地球』68、地球社、1979年7月）82頁
- 27) 江間章子「左川さんの思ひ出」（『椎の木』5-3、1936年3月）42頁

- 28) 江間章子前掲『埋もれ詩の焔ら』43頁
- 29) 江間章子を中心に左川ちかとの関係に触れたものとして、佐々木桔梗「解説」(山田野理夫編『江間章子全詩集』宝文館出版、1999年)が参考になる。
- 30) 時系列に沿って整理すると1934年8月『マダム・ブランシュ』終刊後、アルクイユのクラブは翌年1月『ジャングル』を創刊。5月に2号で廃刊後、アルクイユのクラブは解散。7月VOUクラブ結成、機関誌『VOU』が創刊された。ちかは『VOU』には寄稿していない。
モダニズム運動の分解については、内堀弘他編『現代詩誌総覧4 レスプリ・ヌーボーの展開』(日外アソシエーツ、1998年) vii~ix頁参照。『椎の木』の変遷については、外村彰『(第三次) 椎の木 解題・総目次・執筆者索引』(外村彰編『(第三次) 椎の木 [復刻版]』別冊、三人社、2017年7月)に詳しい。
- 31) 小松伸六「同人雑誌評」(『文学界』27-1、1973年1月) 326頁
- 32) 三浦朱門は2017年2月3日、91歳で死去。三浦逸雄・朱門父子と左川ちか、江間章子らの交流については、左川ちか「明るい夢と江間章子氏」(『文藝汎論』5-8、1935年8月)、江間章子「左川ちか氏」(『文藝汎論』5-8、1935年8月)、同「ある夏の思ひ出 式根島」(『少女画報』30-8、1941年8月)、同前掲『埋もれ詩の焔ら』18~22頁、川村湊「三つの質問したかった 三浦朱門さん追悼文の代わりに」(『毎日新聞』2017年2月13日夕刊)などを参照。
- 33) 江間章子「詩と俳句のあいだ5」(『朝日新聞』1981年5月31日朝刊)
- 34) 『左川ちか詩集』でちかの経歴を略述した「左川ちか小伝」は、『左川ちか全詩集』(森開社、1983年)によれば、川崎昇の編とされている。260頁
- 35) 無記名「(予告告知文左川ちか詩集)」(『椎の木』5-2.1936. 2)に「一月八日に物故した椎の木社同人左川ちかの遺稿詩集を、近く椎の木社から刊行する。編纂者伊藤整。(後略)」とある。53頁
- 36) 江間章子前掲『埋もれ詩の焔ら』16頁、小松瑛子「評論 左川ちかの詩の形成」(『小樽詩話会』36周年記念号、1999年12月) 67頁
- 37) 伊藤整「『左川ちか詩集』」(『北海タイムス』「ブックレビュー」欄1937年4月8日/『未刊行著作集12 伊藤整』白地社、1994年)『未刊行著作集』版97~98頁
- 38) 根上姉妹については、曾根博義「恋愛と詩人の終焉」(『伝記・伊藤整<詩人の肖像>』六興出版、1977年)、山本茂「西洋菓子の匂いのする少女 重田根見子・伊藤整『雪明りの路』」(『物語の女 - モデルの歩いた道』講談社、1979年)、小松瑛子前掲「黒い天鵝絨の天使 - 左川ちか小伝 -」、江間章子前掲『埋もれ詩の焔ら』54~56頁、川西政明「伊藤整の性と愛」(『新・日本文壇史5 昭和モダンと転向』岩波書店、2011年)など、諸文献を参照されたい。
- 39) 島田龍前掲「(仮題) <詩人左川ちか>像の創出と伊藤整」でこれを論ずる。
- 40) 伊藤礼『伊藤整氏こいぶみ往来』(講談社、1987年) 156頁。「父・伊藤整」(市立小

櫛文学館編『伊藤整生誕100年市立小櫛文学館特別展記念講演会・シンポジウム「よみがえる伊藤整」全記録』(2006年)でも、ちかの名は伏せつつ、整と貞子、3人の逸話を礼が語っている。

- 41) 島田龍掲掲「(仮題) <詩人左川ちか>像の創出と伊藤整」で考察する。
- 42) 例えば詩誌『椎の木』『四季』などに関わり、日本のモダニズム詩運動と密接に繋がる、1930年代植民地台湾のモダニズム詩結社「風車詩社」を扱った台湾映画『日曜日の散歩者 わすれられた台湾詩人』(黄亞歴監督、2015年)のような。
- 43) 例えば、鍵谷幸信「昭和詩における西欧詩の影響」(村野四郎他編『講座日本現代詩史 3 昭和前期』右文書院、1973年)は、日本のモダニズム詩人たちの無定見な外国文学の輸入は、流行をいち早くまとった形骸に過ぎず、滑稽ですらあるとして、春山行夫・北園克衛らを徹底的に批判している。
- 44) 1940年代、回想以外の記述として物故詩人を列挙するなかで、「優れた女流詩人の少い詩壇にとつて際立つて注目されていた女流詩人だけに記憶している人も案外多いのではないかと思う。百田宗治の編纂になる『左川ちか詩集』は再刻されるべき詩の一つであろう。」(K「詩壇点鬼簿」『文芸往来』1-3、1949年3月)との一文がある。85～86頁。その詩業がすでに忘却されかかっていたことへの懸念が窺える。
- 45) 麻生直子「解説 女性の詩と時代をめぐって」(『女性たちの現代詩 日本100人選詩集』梧桐書院、2004年) 233頁
- 46) 富岡多恵子「詩人の誕生 - 左川ちか」(『文学界』32-8、1978年8月) 207頁
- 47) 坂東里美「モダンガールズその1 失われた詩人 - 左川ちか - 」(『蘭』60、2005年9月/<http://www.interq.or.jp/sun/raintree/rain31/moderngirls1.html>)、藤本寿彦「一九三〇年代における女性詩の表現 - 左川ちかを中心として - 」(『周縁としてのモダニズム 日本現代詩の底流』双文社出版、2009年) 162頁、KIKUCHI, Rina (菊地利奈)・Carol Hayes「Selected Translations of Sagawa Chika's Poems I」(滋賀大学経済学部ワーキングペーパーオンラインジャーナル 192号、2013年6月)
- 48) 青木亮人「講座・全集と世代間のヘゲモニー」(和田博文編『戦後詩のポエティクス』世界思想社、2009年) 79頁
- 49) 『日本現代詩辞典』「岩本修蔵」「新領土」の項にもちかの名は記されている。「左川ちか」の項では、「詩風は大ざっぱに言えばモダニズムであるが、ときずましたような神経がはりめぐらされ、その底に死の暗い影がのぞいている。四才ころまでは自由に歩行もできなかつたと言われる体質にも関係しよう。」(100頁)と評されている。
- 50) 大岡信『昭和詩史』(『現代詩鑑賞講座 12』「明治・大正・昭和詩史」角川書店、1969年/[『昭和詩史』](#)思潮社、1977年他) 81頁
- 51) 塚本邦雄「詩人について」(『詩学』1959年7月号/[『塚本邦雄全集第9巻』](#)ゆまに書房、1999年)で、「この詩人の、陰惨で華麗な詩を私はかつて朔太郎にも拓次にもまして理解した」として、ちかの詩「死の髻」を「決して一口にモダニズムと評し去る

わけにはゆかぬ悽愴な感動がみなぎっている」と評した。『全集』版 509～510 頁。また吉岡実、「救済を願う時 - 『魚籃』のことなど」（『短歌研究』1959年8月号）などで、北園克衛『白のアルバム』、『左川ちか詩集』で超現実派の詩の世界を発見し、自らの詩が出発したことを述べている。

- 52) 浅沼君子・小松瑛子・北浦淳子・中田美恵子・小田幸枝（司会友田多喜雄・佐々木逸郎）「座談会 北の詩・その女流の系譜」（『北方文芸』5-11、1972年11月）での佐々木逸郎の発言。「私たち戦後に詩を書き始めたものの立場で言うと、（略）なんとなく“幻の詩人”という感じがあった。」18頁
- 53) 川崎昇「妹」（『青空』8、1923年4月）から4首。
- 54) 田居尚（川崎尚）「北海道文芸界の回顧」（『北海タイムス』1935年5月25日）。田居の『蘇春記 - 素膚の伊藤整 -』（岩崎書店、1976年、192頁）によると、『夕刊旭川タイムス』の俳句選者であった泉谷蕪月も1935年か36年の同紙に詳しく伝えていたようだ（旭川タイムスについては未確認、調査中）。
- 55) 小松瑛子前掲「黒い天鵝絨の天使 - 左川ちか小伝 -」には、同級生たちの回想として、淡彩画と和裁が得意であること。汽車通学の折り、昨夜みた夢の話を毎日「いくらか暗く、人の心を誘うもの」として話していたという。小松はこの夢は川崎愛の創作であり、「愛は、おそらく原稿にしない創作を、汽車の中で創っては、楽しんでいただ」としている。66～67頁。ちか自身、散文「童話風な」（『呼鈴派』1-2、1935年3月）で、女学生時代の夢語りについて記している。
- 56) 小松瑛子「海の天使 左川ちかの詩」（『ラ・メール』1、1983年7月）180頁。新井豊美『近代女性詩を読む』（思潮社、2000年）78～79頁。水田宗子「モダニズムと戦後女性詩の展開（3）終りへの感性 左川ちかの詩」（『現代詩手帖』1-9、2008年9月／『モダニズムと＜戦後女性詩＞の展開』思潮社、2012年）。井坂洋子「左川ちかと緑のたたかい」（えこし研究所編『えこし通信』創刊準備6号「天才 詩人左川ちか小特集」えこし会、2004年3月）16～17頁
- 57) 「緑」全篇（『文芸汎論』2-10、1932年10月）
- 58) 「暗い夏」（『作家』1、1933年7月）に緑の風景と眼科での様子を記している。
- 59) 木原直彦『北海道文学史 大正・昭和戦前編』（北海道新聞社、1976年）、同『北海道文学散歩Ⅱ道央編』（立風書房、1982年）など。
- 60) 春山行夫「ジョイスに関する文献」（ハーバート・ゴオマン著・永松定訳『ジョイスの文学』厚生閣書店、1932年）以来、近年の川口喬一『昭和初年の「ユリシーズ」』（みずず書房、2005年）など、ジョイスの受容研究は豊富である。
- 61) 菊地利奈「現代アイルランド詩研究及び詩を『翻訳する行為』についての比較文学研究」（『滋賀大学経済学部・大学院経済学研究科 HP』2008年度／2017年12月20日閲覧、<https://www.econ.shiga-u.ac.jp/study/6/1/2/5/5.html>）、同「伊藤整と左川ちか - アイルランド文学にみいだした『希望』」（『エール（アイルランド研究）』28、2008年

- 12月) 132～133頁
- 62) 北園克衛前掲「左川ちかと室楽」118頁
- 63) 無記名「広告 左川ちか訳『室楽』(『椎の木』1-10、1932年10月)に、「美しい訳だと感心。これが韻文だつたらと惜しく思ひました。装幀は素晴らしい、英国版は足元にも及びません」とある。81頁
- 64) 榊原貴教「ハックスレー翻訳作品年表」(『翻訳と歴史』50・51「二十世紀文学特集《ジョイス・ウルフ・ハックスレー・ブルースト》」ナダ出版センター、2010年5月)
- 65) 榊原貴教「ヴァージニア・ウルフ翻訳作品年表」(前掲『翻訳と歴史』50・51)
- 66) 無記名(百田宗治か)「椎の木社月報 ジョイスの詩集」(『椎の木』1-7、1932年7月)には、「左川ちか氏の訳出により七月当社から刊行することになりました。(略)目下伊藤整氏の手で校訂中です」(82頁)、同号広告にも伊藤整校訂とある。
- 67) 創作詩の掲載誌は、1930年は『ヴァリエテ』『白紙』『文芸レビュー』『レスプリ・ヌウボオ』である。翌年1月と5月に訳詩「室楽」の『詩と詩論』掲載を経て、他誌に発表していた「黒い空気」など6篇に手を入れ、6月『詩と詩論』にまとめて掲載している。以後、『詩と詩論』(後継誌『文学』『詩法』含む)は、『椎の木』『マダム・ブランシュ』とともに左川ちかが投稿する主要詩誌でありつづけた。
- 68) 例えば、太田三郎「ジェイムズ・ジョイスの紹介と影響」(『学苑』175、昭和女子大学光葉会、1955年4月)21頁、和田桂子『二〇世紀のイリュージョン「ユリシーズ」を求めて』(白地社、1992年)135～137頁、榊原貴教編『翻訳と歴史』50・51(ナダ出版センター、2010年5月)、大橋吉之輔『アングスと三人の日本人-昭和初年の「アメリカ文学」-』(研究社出版、1984年)65頁、古平隆「日本におけるSherwood Andersonの書誌(1921-1988)」(『横浜市立大学論叢』40-3、1989年3月)、吉川佳代・高田宣子「解説」(フウの会編『モダニスト ミナ・ロイの月世界案内 詩と藝術』水声社、2014年)380頁
- 69) 菊地利奈前掲「伊藤整と左川ちか・アイルランド文学にみいだした『希望』」133～134頁、同「〈翻訳〉という名の異文化交流」(『滋賀大学経済経営研究所』HP 2008年経済学部ワークショップ／2017年12月20日閲覧)<http://www.biwako.shiga-u.ac.jp/eml/kouenkai2008/WS20081023kikuchi.htm>、同前掲「現代アイルランド詩研究及び詩を『翻訳する行為』についての比較文学研究」HP
- 70) 例えば、「寡婦のジャズ」(『文学リーフレット』10、1933年9月)の書き出し「白い肉体が黒人の魂に合はせて震へる」、「太陽の唄」(『るねっさんず』2、1935年3月)の書き出し「白い肉体が／熱風に渦巻ながら／刈りとられた闇に踞く」
- 71) 左川千賀名義で翻訳家としてデビューしたのが、1929年4月、モルナール「髪黒い男の話」を訳した『文芸レビュー』1-2であった。その2か月後、『文芸レビュー』1-4(1929年6月)「後記」には「ところで、此処に御紹介いたしますが、左川麟駛朗君です。今後主として広告のことに当ることになりました。よろしく。(川)」と川崎昇が

記述し、隣欄に「東京府下吉祥寺の榎本様（と記憶するのですが）へお詫び、当方の不注意から、前金の御送付を受けた儘になっています。一報をお願いする次第です（係）」と麟駛朗であろう一文がある。また、翌5号「後記」（1929年7月）に「御送金は成るべく、振替貯金（振替口座東京五二二七番）を御利用下さい（係）」とある。他に左川麟駛朗と思われる特段の文章は認められなかった。

- 72) ADRIENNE Raphael「THE STARTLING POETRY OF A NEARLY FORGOTTEN JAPANESE MODERNIST」(『THE NEW YORKER』 August.18.2015) は、「she was one of the most innovative and prominent avant-garde poets in early-twentieth-century Japan.」と記す。
- 73) 1933年以降翻訳に選んだ作品の一例を記す。Frances Fletcher「Coquette」、Bravig Imbs「Bloomed」、Mina Loy「The Widow's Jazz」、Howard Weeks「Poem」、R.S.Fitzgerald「Night Images」、Norman Macleod「Early Walk to the Valley in Six Poems」
- 74) 『るねっさんず』2号（るねっさんず社、1935年3月）にちかは「太陽の唄」を投稿している。1号にはダダイスト詩人高橋新吉「スキイ」が掲載、室涇二「マダムとお腹の疵」が原因で風壊発禁処分を受けている。2号にはプロレタリア作家井東憲が「曲線」、詩人でのちの児童文学作家山本和夫が「秃鷹の巢」「現代詩の研究」を寄稿するなど、ユニークな雑誌となっている。3号以降は未見だが、7号までは続いていたようだ。
- 75) 加藤仁「左川ちか書誌・補遺」（『文献探索』2007年3月）でも「最近発見された発表誌を見ていると、左川ちかの活動の幅は思っていたよりも広がったことがうかがえる」（145頁）との指摘がある。付言すれば、ちかは地方誌にも積極的に投稿している。『書帷』（福井丸岡）『女人詩』（高岡）『越佐詩歌集』（新潟）『呼鈴』（浜松）『日本詩壇』（東京→大阪）『海盤車』（横浜→神戸）『鬮鶏』（神戸）『小劇場』（福岡）など。なかでも北陸に多いのは、福井丸岡の内田忠などとの関係もあろうが、ちかの祖父川崎長左エ門の出自が福井の廻船問屋であることを思うと興味深い。内田忠「左川ちかのこと」（『日本詩壇』5-3、1937年4月／『詩のために』椎の木社、1940年）によると、内田への手紙で大雪の日に「小さい時に聞かされた越前の話を想ひ出す」と記している。ちかの心象風景に雪国越前があったことは記憶してよいだろう。
- 76) 内田忠前掲「左川ちかのこと」『詩のために』版106～107頁
- 77) H・R・ロットマン著・天野恒雄訳『セーヌ左岸 フランスの作家・芸術家および政治：人民戦線から冷戦まで』（みすず書房、1985年、原著1981年）、アンドレ・ワイス著・伊藤明子訳『パリは女 セーヌ左岸の肖像』（現代書館、1998年、原著1997年）
- 78) NAKAYASU, Sawako『MOUTH:EATS COLER - Sagawa Chika Translations, Anti-Translations, & Originals』（[United States] Roque Factorial Press.2011）p.83、NAKAYASU, Sawako『THE COLLECTED POEMS OF CHIKA SAGAWA』（[Michigan] CanariumBooks.2015）p. v
- 79) 例えば ADRIENNE Raphael前掲『THE STARTLING POETRY OF A NEARLY FORGOTTEN

JAPANESE MODERNIST]

- 80) 小松瑛子前掲「海の天使 左川ちかの詩」180頁。浅沼君子他前掲「座談会 北の詩・その女流の系譜」においても小松は、「当時は左というものがすごく魅力があった」(19頁)とシュールレアリスム詩人の左傾化の問題として理解している。
- 81) 小松瑛子「北海道における女性詩人の歩み<下> 左川ちかの詩」(『朝日新聞』1974年12月8日朝刊北海道)。小松は「死の髯」(1931年)を小林多喜二弾圧の文脈で理解する。その弾圧時期に関連し「左川の友人Nも検挙された」とも記し、「青服の看守」「牢獄」などの言葉に特別のリアリティを指摘している。稿者の見解はここでは保留するが、文学の社会性へのちかの関心については、註85の事実を指摘しておく。
- 「死の髯」全篇を以下に引く。「料理人が青空を握る。四本の指跡がついて、——次第に鶏が血をながす。ここでも太陽はつぶれてゐる。／たづねてくる青服の空の看守。／日光が驅脚でゆくのを聞く。／彼らは生命よりながい夢を牢獄の中で守つてゐる。／刺繍の裏のやうな外の世界に觸れるために一匹の蛾となつて窓に突きあたる。／死の長い巻鬚が一日だけしめつけるのをやめるならば私たちは奇蹟の上で跳びあがる。／死は私の殻を脱ぐ。」(『今日の詩』10冊、1931年9月)
- 82) 河原直一郎「巴里通信」(『文芸レビュー』1-1、1-5 / 1929年3、7月)
- 83) 無署名(河原直一郎か)「モンパルナス新風景」(『文芸レビュー』2-1、1930年1月)
- 84) 川村欽吾「詩人左川ちか回想」(『地球』68、地球社、1979年7月)に1930年8月15日付の書簡が掲載されている。「マラルメの記念詩集たまはりましてありがとうございます。御禮がたいへんおくれてしまひまして。花瓶のやうにレエスの卓上を飾って、ほんとうにうれしうございました。／夏のお休みもだいぶすぎましたけど、楽しくおすごしていらっしゃいますか。どうぞお元気でいらっしゃいますやうに。私はどこへも行かずに、ボンヤリして家におります。暑くなると壁にひろげられた世界地図をながめております。ちょっとの間、たのしいです。／太陽が私たちにあまり近すぎるのでせうか。本も読めない程、私はなまけております。／九月にはまたお元気なお姿にお目にかかることが出来ますこととせう。／御機嫌を祈上げます。 さようなら／八月十五日 左川ちか／川村欽吾様」84頁
- 85) ちかの死直後、『VOU』6号(1936年2月)に江間章子の詩集『春への招待』広告が掲載されている。江間は「詩集について」という一文を寄せ、あらためてちかを追悼、詩集を彼女に捧げた。病床の様子を綴った同文によると、ちかは入院後(1935年10～11月頃)、新刊の『文化の擁護国際作家会議報告』(小松清編、第一書房、1936年)、『キイランド短編集』(前田晃訳、岩波文庫、1934年)を読んでいた。
- 左岸の前衛詩人ミナ・ロイらの表現を血肉化した左川ちかが、35年6月、反ファシズムを掲げパリで開催された文化擁護国際作家会議といった、海外の同時代的状況に敏感に関心を抱いていたことがうかがえる。会場は左派運動の聖地、左岸カルチエ・ラタンのミュチュアリテ会館であった。ミュチュアリテを中心とした1930年代の文学

- 者たちの政治的動向については、H・R・ロットマン前掲『セヌ左岸 フランスの作家・芸術家および政治：人民戦線から冷戦まで』に詳しい。
- 86) 阪本越郎「『椎の木』の人々について」(『詩学』16-10「詩壇100年史」、1961年9月) 101頁
 - 87) 打和長江「黒縁の写真 - 逝ける佐川ちかの霊に捧ぐ - 」(『北陸毎日新聞』1936年4月8日)は、今回の新出資料の一つである。一部を引く。「(前略)ムーランルーヂュの風車は、激しく回転してゐやう／小田急のレールは、光るだけ黝光するんだ／その日、君の黒縁の写真が届けられ、もう一度、東京へ出ると、言ひ残して来たのに君の生活は、色濃く消えていつた／美味だつた英語を食べて、もう、外人とは話せなくなつた君、ロンドンタイムスも、今は悲しみの夢／世田谷の、麦は、随分、伸び、だが霜柱を、踏みしめる気持— (後略)」「ムーランルーヂュ」とは1931年に設立され、知識人や学生たちに親しまれた劇場、新宿ムーランルーヂュであろうか。
 - 88) 吉岡陽子「年譜」(『吉岡実全詩集』筑摩書房、1996年)にもちか詩集の記述がある。
 - 89) 濱名與志春前掲「CHAMBER MUSIC その他」43頁
 - 90) 江間章子前掲『埋もれ詩の焰ら』50頁
 - 91) 三善晃「作曲者のことば」(『音楽芸術』21-8付録楽譜、1963年8月) 23頁
 - 92) ちかの「青い道」(1932)をモチーフに、詩人wagaは抒情的なボーカロイド曲「君去りしのち青く庭」(2018)を作詩作曲している。
 - 93) 小松瑛子前掲「北海道における女流詩人の歩み - 左川ちかの詩」
 - 94) 富岡多恵子前掲「詩人の誕生 - 左川ちか」211頁
 - 95) フェミニズム批評と富岡多恵子の左川ちか論との関係については、中島和歌子「ジェンダーと文学 - 他の文化テキストも視野に入れつつ - 」(北海道教育大学公開講座委員会編『「女」と「男」 - ジェンダーで解きあかす現代社会 - 』(北海道大学図書刊行会、1997年)も指摘している。
 - 96) 一方で河野道代「詩史の形成」(panta rhei、2017年)は、70年代末にメディアが造つた「女性詩」という商業的概念を、翼賛的言説として新井が是認したとして、その論理の問題性を厳しく批判しており、今後の議論の行方が注目される。
 - 97) 神戸モダニズムの展開については、季村敏夫『山上の蜘蛛神戸モダニズムと海港都市ノート』(みずのわ出版、2009年)、『窓の微風モダニズム詩断層』(みずのわ出版、2010年)など一連の論考に詳しい。
 - 98) 水田宗子講演「わたし語り」から自己表象へ - 現代女性詩の「惨事のあと」の感性」、シンポジウム水田宗子・藤井貞和・井坂洋子・水無田気流「左川ちかから手渡されるもの 詩とジェンダー、その先へ」については、以下の文献に概要がまとめられている。(1)『現代詩手帖』55-11、2012年11月。(2)『Rim Journal of the Asia-Pacific Womens Studies Association』(『Rim』アジア・太平洋女性学研究会会誌)14・1、城西大学ジェンダー・女性学研究所、2013年3月。(3)水田宗子編『ジェンダーとアジア

- ア 水田宗子対談・鼎談・シンポジウム集3』（城西大学出版会、2016年）。
- 99) 「昆虫」全篇（『ヴァリエテ』1-1、文芸レビュー社、1930年8月）本文「瘧を乾す」は、伊藤整編『左川ちか詩集』では「殻を乾す」に改められている。
- 100) 新井豊美前掲『近代女性詩を読む』90頁。藤本寿彦前掲「一九三〇年代における女性詩の表現 - 左川ちかを中心として - 」35頁
- 101) 坂東里美前掲「モダンガールズその1 失われた詩人 - 左川ちか - 」、同「左川ちか - 予見する未来 一九三〇年代の女性前衛詩人たち(1)」(『詩学』62-3,2007.3) 41～42頁。なお、鳥居万由実「1930年代モダニズム詩における、女性の自己表現の方策、左川ちか、山中富美子らの作品を手がかりにして」(『言語態』15、2015年)は、坂東説を採っている。
- 102) 坂東里美前掲「モダンガールズその1 失われた詩人 - 左川ちか - 」
- 103) 文学史における〈早逝詩人〉なる言説の再検討は、近稿で行いたい。

左川ちか関係文献目録増補版

凡例（2018年2月末現在）

1. 本目録は、『左川ちか資料集成』別冊、『左川ちか関連文献目録稿・解説』（2017）の増補改訂版（約490点→約670点収録）である。
1. 掲載順序は、巻頭に個人詩集、合集・アンソロジーを掲げ、次におよそ10年ごとの編年順と著者の五十音順に従って収め、最後に参考となるHPを附した。
1. 形態によっては、文献データの末尾に〔個人詩集〕〔合集〕〔事典〕〔新聞〕と記した。
1. 内容が一つに特化できる文献については、事典・新聞類等を除き、〔翻訳〕〔北海道〕〔音楽〕〔詩歌〕に限定し、これを附した。ただし複数のテーマを広範に議論した文献も多く、そういった文献への分類表記は省いたため、あくまで便宜的なものとされた。
1. 左川ちかの名が記されている『室楽』や雑誌、単行本（『詩抄』など）の広告については、特記事項のある一部を除き、これを省略した。
1. 古書目録については、ごく一部を除き、基本的には収録しなかった。
1. 海外の文献については、詩の翻訳書を除き、基本的には収録しなかった。他日を期したい。

【個人詩集】

- 左川ちか訳・ジエイムズ・ジョイス著『室楽』（椎の木社. 1932）300部限定（発行者百田宗治）
- 左川ちか著・伊藤整編『左川ちか詩集』（昭森社. 1936. 11）収録詩篇76、百田宗治「詩集のあとへ」、伊藤整「左川ちか詩集覚え書 - 刊行者 -」、川崎昇「左川ちか小伝」、普及版・特製版・書痴版計350部限定（発行者森谷均）
- 左川ちか著・小野夕馥・川崎浩典・曾根博義編『左川ちか全詩集』（森開社. 1983）『左川ちか詩集』75篇に拾遺詩6篇、散文9篇、『室楽』、追悼録（『椎の木』『海盤車』17編）、書誌、解題、未収録翻訳目録、年譜、栞（浦和淳・千葉宣一・鶴岡善久・小松瑛子・川崎昇・曾根博義）、普及版・特製版計550部限定（発行者小野夕馥）
- 左川ちか著・小野夕馥編・曾根博義編輯協力『左川ちか全詩集新版』（森開社. 2010）『左川ちか全詩集』収録詩に加え拾遺詩4篇、散文5篇、解題、翻訳作品目録、書誌、年譜、普及版・上製版計500部限定（発行者小野夕馥）別装版100部限定（2013. 全詩集新版未収録散文等附録）
- 左川ちか著・小野夕馥編『左川ちか翻訳詩集』（森開社. 2011）収録翻訳詩篇・散文10、解題、500部限定（発行者小野夕馥）
- 左川ちか著・紫門あさを編『新編左川ちか詩集 前奏曲』（えていしおん うみのほし、東都我刊我書房. 2017）収録詩篇84、『室楽』、編纂付記、はしがき、300部限定

□紫門あさを編『左川ちか資料集成 [The Black Air: Collected Poems and Other Works of Chika Sagawa]』(加藤仁・島田龍他編集協力、えていしおん うみのほし、東都我刊我書房. 2017) 帯文: 佐藤弓生、別冊: 島田龍『左川ちか関連文献目録稿・解説』 詩、散文、翻訳書、翻訳詩文、目録 (作品ヴァリエント含め 192 種)、本文及び別冊追捕・訂正表、120 部限定

【合集・アンソロジー】

- 百田宗治編『詩抄 I』(椎の木社. 1933 年) 6 篇収録「眠つてゐる」「雲のかたち」「蛋白石」「神秘」「朝のパン」「記憶の海」
- 春山行夫・上田敏雄・村野四郎・近藤東・永田助太郎共編『新領土詩集』(山雅房. 1941) 3 篇収録「出発」「黒い空気」「海の捨子」
- 百田宗治編『現代詩』(白井書房. 1948) 2 篇収録「海の花嫁」「緑の焰」
- 中野重治編・解説『日本現代詩大系 第 10 巻 昭和期 (3)』(河出書房. 1951) 4 篇収録「鐘のなる日」「憑かれた街」「毎年土をかぶらせてね」「山脈」
- 北川冬彦・小野十三郎・丸山薫・伊藤信吉・大江満雄共編、北川解説『日本詩人全集 第 6 巻 昭和篇 (1)』(創元社. 1952) 15 篇収録「昆虫」「錆びたナイフ」「雪が降つてゐる」「青い馬」「死の髯」「季節のモノクル」「記憶の海」「白と黒」「五月のリボン」「雪の日」「緑」「花咲ける大空に」「暗い歌」「果実の午後」「1. 2. 3. 4. 5.」
- 野田宇太郎編『世界名詩集大成 17 日本 II』(平凡社. 1959) 1 篇収録「海の花嫁」
- 『詩学』16-10 「詩壇 100 年史」(1961. 9) 1 篇収録「花」
- 『詩学』17-8 「シュルレアリスム特集」(1962. 9) 1 篇収録「黒い空気」
- 金子光晴・村野四郎・三好豊一郎・大岡信共編『類別日本詩集』(文芸新聞社. 1963) 2 篇収録「昆虫」「死の髯」、三好選
- 鶴岡善久編『日本の詩 昭和の詩 I』(ほるぷ出版. 1975) 13 篇収録「毎年土をかぶらせてね」「山脈」「死の髯」「記憶の海」「花咲ける大空に」「1. 2. 3. 4. 5.」「青い馬」「昆虫」「錆びたナイフ」「雪が降つてゐる」「季節のモノクル」「白と黒」「緑」
- 伊藤信吉編『日本の詩第 23 巻近代詩集 (2)』(集英社. 1979) →伊藤信吉「モダニズム・抒情詩の世界」、武田文章「略伝」 5 篇収録「五月のリボン」「毎年土をかぶらせてね」「海の花嫁」「夏のこゑ」「季節の夜」
- 支部沈黙他編・佐々木逸郎解説『北海道文学全集 第 22 巻 北の抒情 (詩・短歌・俳句編)』(立風書房. 1981) 2 篇収録「山脈」「緑の焰」
- 中島みゆき編・阿木津英他『日本の恋歌 3 涙が出ないのはなぜ』(作品社. 1985 / 正津勉編『心にひびく恋のうた愛のうた 7 失恋』リブリオ出版. 2006 として新編集、正津勉解説「左川ちか」) 1 篇収録「緑」
- 北海道文学館編『北海道文学百景』(共同文化社. 1987) 1 篇収録「山脈」
- 相賀徹夫編『花のうた 花の俳句短歌詩』(小学館. 1990) 1 篇収録「山脈」

- 正津勉・平出隆編『新潮 臨時増刊 日本の詩 101 年』（新潮社. 1990. 11）1 篇収録「雲のやうに」
- 鈴木貞美編『モダン都市文学 X 都市の詩集』（平凡社. 1991）2 篇収録「錆びたナイフ」「青い馬」
- 『ラ・メール』39「特集 20 世紀女性詩選」（1993. 1）1 篇収録「緑色の透視」
- 木原直彦編『ふるさと文学館 第 1 巻 北海道 1』（ぎょうせい. 1993）1 篇収録「山脈」
- 東雅夫編『夢 書物の王国 2』（東雅夫編. 国書刊行会. 1998）1 篇収録「童話風に」
- 中村文昭編著『現代詩研究 昭和篇』（ノーサイド企画室. 2003）4 篇収録「鐘のなる日」「昆虫」「緑の焰」「雲のやうに」
- 鶴岡善久編『モダニズム詩集 1「詩と詩論」「文学」』（思潮社. 2003）10 篇収録「昆虫」「青い馬」「朝のパン」「錆びたナイフ」「緑の焰」「死の髯」「幻の家」「眠つてゐる」「海泡石」「The street fair」
- 高橋順子編『現代日本女性詩人 85』（新書館. 2005）2 篇収録「死の髯」「海の天使」
- 高橋順子編『日本の現代詩 101』（新書館. 2007）1 篇収録「緑」
- 堀江敏幸・松浦寿輝編『個人的な詩集』（『群像』67-8. 2012. 8）3 篇収録「雪線」「死の髯」「眠つてゐる」
- 蜂飼耳編『大人になるまでに読みたい 15 歳の詩 3 なやむ』（ゆまに書房. 2013）2 篇収録「死の髯」「昆虫」
- 小池昌代編『恋愛詩集』（NHK 出版新書. 2016）1 篇収録「緑」
- 川上未映子編『早稲田文学増刊 女性号』1026（早稲田文学会. 筑摩書房. 2017. 9）3 篇収録「緑の焰」「花」「海の花嫁」
- 長山靖生編『詩人小説精華集』（彩流社. 2017）1 篇収録「暗い夏」
- 蜂飼耳編『大人になるまでに読みたい 15 歳の詩 6 わらう』（ゆまに書房. 2017）1 篇収録「波」

【同時代：1920 年代～1935 年】

- 泉芳朗「創刊號を讀んで」（『ごろっちょ』3. 1934. 8）
- 伊藤整「林檎園の六月」（伊藤整第一詩集『雪明りの路』. 1926 年／『伊藤整全集 1』新潮社. 1972）
- 伊藤整「風を見る」（第一次『椎の木』10. 1927. 7／伊藤整第二詩集『冬夜』. 1937／『伊藤整全集 1』新潮社. 1972）
- 伊藤整「いま帰れば - 川崎昇に」（第一次『椎の木』11. 1927. 8／『伊藤整全集 1』新潮社. 1972）
- 伊藤整「海の捨兒」（『信天翁』1. 1928. 1／『冬夜』. 1937／『伊藤整全集 1』新潮社. 1972）
- 伊藤整「海の少女に」（『愛誦』3-10. 1928. 10／『冬夜』. 1937／『伊藤整全集 1』新潮社.

1972)

- 伊藤整「言葉」(第二次『椎の木』2-6. 1929. 5 / 『伊藤整全集1』新潮社. 1972)
- 伊藤整「雲雀」(第二次『椎の木』2-6. 1929. 5 / 『伊藤整全集1』新潮社. 1972)
- 伊藤整「忘却に就いて」(『詩・現実』2. 1930. 9 / 『伊藤整全集1』新潮社. 1972)
- 伊藤整「ジョイスの『室楽』」(『椎の木』1-8. 1932. 8 / 『伊藤整全集13』新潮社. 1973)
[翻訳]
- 伊藤整「海の肖像」(『新作家』3-5. 1931 / 『伊藤整全集1』新潮社. 1972)
- 伊東昌子「女流詩人の旗」(『文藝汎論』5-5. 1935. 5)
- 内田忠「<椎の木>の作家」(『椎の木』2-1. 1933. 1)
- 内田忠「『椎の木』三年」(『椎の木』3-13 臨時号. 1934. 12)
- 江間章子「三つの星を想ふ」(『椎の木』3-12. 1934. 12)
- 江間章子「左川ちか氏」(『文藝汎論』5-8. 1935. 8)
- 長田恒雄「整列! 女流詩人」(『女性詩歌』1-2. 1933. 11)
- 片岡敏「作品批評 第二年第一冊所感」(『椎の木』2-2. 1933. 2)
- 片岡敏「似而非絵画論 或は、ディレッタント吐言」(『椎の木』2-8. 1933. 8)
- 川崎昇「妹」(『青空』8. 1923. 4)
- 川崎昇「帰郷抄」(『青空』13. 1924. 4)
- 川崎昇「後記」(『文芸レビュー』1-4. 1929. 6)
- 春日新九郎(岩本修蔵又は北園克衛力)「詩集の審判」(『MADAME BLANCHE (マダム・ブランシュ)』15. 1934. 4)
- 北園克衛「二人の若い女詩人」(『今日の詩』5. 1931. 4)
- 北園克衛「詩の誕生」(初出不明. 1932. 3 / 『天の手袋』. 春秋書房. 1933 / 『北園克衛全評論集』沖積舎. 1988)
- 北園克衛「左川ちかと室楽」(『椎の木』1-10. 1932. 10 / 『天の手袋』. 春秋書房. 1933 / 『北園克衛全評論集』沖積舎. 1988 / 内堀弘編『コレクション・日本シュールレアリスム 7 北園克衛・レスプリヌーボーの実験』本の友社. 2000) [翻訳]
- 北園克衛「若き女性詩人の場合」(『天の手袋』. 春秋書房. 1933 / 『北園克衛全評論集』沖積舎. 1988)
- 北園克衛「L'Essai critique aux jeunes poètes en 1934」(初出不明. 1934. 4 / 『ハイブローウの噴水』昭森社. 1941 / 『北園克衛全評論集』沖積舎. 1988)
- 高祖保「聖地巡礼 椎の木一年の作品概観」(『椎の木』1-12. 1932. 12)
- 高祖保「三十三年終曲 椎の木第二年の回顧」(『椎の木』2-12. 1933. 12)
- 阪本越郎「今年の詩人達」(『椎の木』1-12. 1932. 12)
- 左川ちか訳・ジエイムズ・ジョイス著『室楽』(椎の木社. 1932) [個人詩集] 参照
- 末松太郎「編輯後記」(『貝殻』3-1. 1934. 3)
- 荘原照子「『椎の木』第二年の注意を惹かれた作品」(『椎の木』2-12. 1933. 12)

- 田居尚（川崎尚）「北海道文芸界の回顧」（『北海タイムス』1935年5月25日／『蘇春記 - 素膚の伊藤整 - 』岩崎書店、1976）[新聞]
- 高松章「『椎の木』第二年の注意を惹かれた作品」（『椎の木』2-12、1933、12）
- 永瀬清子「今年の女性詩壇」（『輝ク』2-12、1934、12／不二出版、1988で復刻）
- 濱名與志春「六月のヴルヴァール 第六冊作品評」（『椎の木』3-7、1934、7）
- 春山行夫「ジョイスに関する文献」（ハーバート・ゴオマン著・永松定訳『ジョイスの文学』厚生閣書店、1932／復刻版、ゆまに書房、1995）[翻訳]
- 春山行夫「雑感」（『椎の木』1-12、1932、12）
- 春山行夫「ジョイスの三著《室楽》左川ちか氏訳《短編集》長松定氏訳《若き日の芸術家の肖像》小野松二、横堀富雄氏訳」（『文学』4、1932、12）[翻訳]
- 村野四郎「昭和十年度詩壇総批評」（『文藝汎論』1935年12月号）
- 室川創「<椎の木>による人々」（『椎の木』2-1、1933、1）
- 本山茂也「カイエ《室楽》- ジェイムズ・ジョイス 左川ちか訳著 -」（『小説』3号、芝書店、1933、2）[翻訳]
- 百田宗治「左川ちか・山中富美子」（『詩と詩論』12、1931、6）
- 百田宗治「詩作法」（『椎の木』1-1、1932、1）
- 百田宗治編『詩抄Ⅰ』（椎の木社、1933年）[合集] 参照
- 百田宗治「後記」（『椎の木』3-2、1934、2）
- 山村西之助「吠ゆる詩人達 - 詩壇時評」（『椎の木』3-10、1934、10）
- XYZ「(レントゲン室) 左川ちか子氏と澤木隆子氏」（『今日の詩』10、1931、9／合冊『今日の詩』再録、1932、2）
- XYZ「女流詩人評判記」（『詩人時代』1935年6月号）
- 無記名「世界人気者投票の投票者解説（その一）」（『文芸レビュー』1-6、1929、8）[翻訳]
- 無記名「新刊紹介 室楽 左川ちか氏訳」（『作品』3-10、1932、10）[翻訳]
- 無記名「椎の木の会消息」（『椎の木』1-3、1932、3）
- 無記名（百田宗治カ）「後記」（『椎の木』1-6、1932、6）
- 無記名「椎の木社月報 ジョイスの詩集」（『椎の木』1-7、1932、7）[翻訳]
- 無記名（百田宗治カ）「広告 左川ちか訳『室楽』」（『椎の木』1-9～12他、1932、9～12他）[翻訳]
- 無記名（百田宗治カ）「後記」（『椎の木』3-4、1934、4）
- 無記名（百田宗治又は高祖保カ）「椎の木社通信」（『椎の木』3-4、1934、4）
- 無記名「女人消息」（『女人詩』14、1934、8）
- 無記名「新刊図書分類目録」（『東京堂月報』1932年8月／朝倉治彦監修『日本書籍分類総目録27』日本図書センター、1986）
- 『椎の木』2-5「詩抄瞥見」（1933、5）→岩佐東一郎「『詩抄』に就いて」、竹中郁「寸暇のペン」、菱山修三「『詩抄』を読んで - 同人諸賢に」

- 『椎の木』2-6「詩抄瞥見」(1933.6)→片岡敏「『詩抄』読後」、朱印船「『詩抄』とその批評」
- 『椎の木』3-2「特集左川ちかの作品」(1934.2)→饒正太郎「左川ちかの作品」、柏木俊三「The street fair」、高松章「左川ちか論への序」、濱名興志春「CHAMBER MUSIC その他」、内田忠「序論的に」
- 『椎の木』3-4「近刊予告 左川ちか詩集」(1934.4)

【没後：1936年～39年】

- 『椎の木』5-3(1936.3)→萩原朔太郎「手簡」、堀口大学「手簡」、竹中郁「手簡」、北園克衛「※」、山村西之助「左川ちかを憶ふ」、阪本越郎「野の花」、春山行夫「ペンシル・ラメント」、衣巻省三「沢山の天使」、山中富美子「左川氏を憶ふ」、江間章子「左川さんの思ひ出」、高祖保「わたした太陽」、乾直恵「思ひ出すま」、西脇順三郎「気品ある思考」、中山省三郎「海の天使よ」、内田忠「線」、編輯者(百田宗治)「編輯後記」「椎の木社通信」中山、内田、編集後記以外は『左川ちか全詩集』(森開社.1983)に再録
- 『Etoile de Mer(海盤車)』5-21(1936.6)→村野四郎「左川ちか子氏のために」、江間章子「左川さんの追憶記」、田中克己「左川ちかノ詩」、加藤一「左川ちか氏のこと」『左川ちか全詩集』(森開社.1983)に再録
- 伊藤整「左川ちか詩集覚え書・刊行者-」(『左川ちか詩集』昭森社.1936.11／『左川ちか全詩集』森開社.1983、『左川ちか全詩集新版』森開社.2010に再録)〔個人詩集〕参照
- 伊藤整「『左川ちか詩集』」(『北海タイムス』「ブックレビュー」欄1937年4月8日／『未刊行著作集12伊藤整』白地社.1994)
- 伊藤整「浪の響きのなかで」(『文学界』3-5.1936.5／『伊藤整全集2』新潮社.1973)
- 岩本修蔵「悪の花 一九三六年の喧嘩帳序論」(『日本詩壇』4-3.1936.3)
- 内田忠「左川ちかのこと」(『日本詩壇』5-3.1937.4／『詩のために』椎の木社.1940)
- 打和長江「黒縁の写真・逝ける佐川ちかの霊に捧ぐ-」(『北陸毎日新聞』1936年4月8日)〔詩歌〕
- 江間章子「詩壇の訃報」(『レットゼン』1936年2月号〔紀伊國屋書店月報〕／和田博文編『コレクション・モダン都市文化37 紀伊國屋書店と新宿 ゆまに書房.2008に再録)
- 江間章子「春への招待」(東京VOUクラブ.1936)
- 江間章子「詩集について」(『VOU』6.1936.2／西村将洋編『コレクション・都市モダンズム詩誌14VOUクラブの実験』ゆまに書房.2011に復刻)
- 菊池美和子「<レエル・ド・モア>左川ちか詩集」(『純粹詩』2.1937.6)
- 左川ちか著・伊藤整編『左川ちか詩集』(昭森社.1936.11)〔個人詩集〕参照
- 莊原照子「詩人と個性色」(『日本詩壇』4-9.1936.9)
- 田居尚「郷土文芸に就て」(初出不明.1936／『蘇春記-素膚の伊藤整-』岩崎書店.1976)
- 春山行夫「1935年の詩壇」(文芸家協会編『文芸年鑑 1936年版』第一書房.1937)

- 村野四郎「碑銘 - 左川ちか子氏のために -」（『書窓』2-6. 1936. 4 / 『Etoile de Mer（海盤車）』5-21. 1936. 6「左川ちか子氏のために」で改作）〔詩歌〕
- 百田宗治「左川ちかの死」（『椎の木』5-2. 1936. 2）
- 百田宗治「夭折した女詩人左川ちか」（『目 auge』1936年11月号（創刊号） / 「詩集のあとへ」と改題し『左川ちか詩集』に再録. 昭森社. 1936. 11 / 「左川ちかのこと」と改題し『私の綴方帖』に再録. 大和出版社. 1942 / 『爐邊詩話』柏葉書院. 1946 で内容増補）〔個人詩集〕参照
- 吉川則比古「昭和十一年度詩壇の概観」（『日本詩壇』4-12. 1936. 12）
- 無記名（百田宗治カ）「（予約告知文 左川ちか詩集）」（『椎の木』5-2. 1936. 2）『椎の木』5-3、5-4に告知
- 無記名（百田宗治カ）「編集後記」（『椎の木』5-3. 1936. 3）
- 無記名（百田宗治カ）「椎の木社通信」（『椎の木』5-3. 1936. 3）
- 無記名「消息欄」（『輝ク』35. 1936. 2 / 不二出版. 1988 で復刻）
- 無記名「文学界十二年度婦人著書目録」（『昭和十三年婦人年鑑』1937. 12 / 日本図書センター. 1988 に復刻）

【1940年代】

- 江間章子「- ある夏の思ひ出 式根島」（『少女画報』30-8. 1941. 8）
- 北園克衛「一人のVOU ポエットの記録」（初出不明. 1948 / 『黄いろい楕円』宝文館. 1953 / 『北園克衛全評論集』沖積舎. 1988）
- 黒田三郎「蔵書目録」（1940. 5 / 『黒田三郎日記戦中編Ⅱ』思潮社. 1981）
- K「詩壇点鬼簿」（『文芸往来』1-3. 鎌倉文庫. 1949. 3）
- 春山行夫・上田敏雄・村野四郎・近藤東・永田助太郎共編『新領土詩集』（山雅房. 1941）〔合集〕参照
- 春山行夫「『詩と詩論』の時代について」（『蠟人形』3-11. 1948. 11）
- 百田宗治編『現代詩』（白井書房. 1948）〔合集〕参照

【1950年代】

- 伊藤整「文学的青春伝」（『群像』6-3. 1951. 3 / 『我が文学生活Ⅱ』河出書房版『伊藤整全集10』 / 『伊藤整全集23』新潮社. 1974）
- 伊藤整「詩と詩論」（『増補改訂日本文学大辞典別巻』新潮社. 1952）
- 伊藤整「若い詩人の肖像」（『新潮』『中央公論』『文芸春秋』1954～55 / 単行本. 新潮社. 1956 / 『伊藤整全集6』新潮社. 1972）
- 伊藤整「妨害者」（『週刊新潮』1956年2月26日号 / 『伊藤整全集6』新潮社. 1972）
- 太田三郎「ジェイムズ・ジョイスの紹介と影響」（『学苑』175. 昭和女子大学光葉会. 1955. 4）〔翻訳〕

- 太田三郎「ジョイスの紹介と影響」(伊藤整他『ジョイス研究』英宝社. 1955) [翻訳]
- 遠地輝武『現代日本詩史』(昭森社. 1958)
- 川村欽吾「現代詩の教授上の問題点」(『国文学 解釈と教材の研究』3-6. 1958. 6)
- 北川冬彦・小野十三郎・丸山薫・伊藤信吉・大江満雄共編、北川解説『日本詩人全集 第6巻 昭和篇(1)』(創元社. 1952) [合集] 参照
- 北園克衛「左川ちか」(『詩学』6-8.「物故詩人追悼特輯」1951. 8 / 『黄いろい楯円』宝文館に「左川ちかのこと」と改題して収録. 1953 / 『北園克衛全評論集』沖積舎. 1988)
- 北園克衛「『G・G・P・G』から『V・O・U』まで」(初出不明. 1951. 11 / 『北園克衛全評論集』沖積舎. 1988)
- 木原孝一「昭和編(芸術派)」(壺井繁治他『ポエム・ライブラリー6 現代詩はどう歩んできたか』東京創元社. 1955)
- 杉浦伊作「詩書による日本詩史4 昭和篇」(現代詩人会編『現代詩新講』宝文館. 1951)
- 瀬沼茂樹「あとがき」(『昭和の文学』河出文庫版. 1954 / 『完本・昭和の文学』冬樹社. 1976)
- 高見順「エスプリ・ヌーボー」(『昭和文学盛衰史』文芸春秋新社. 1958) [翻訳]
- 塚本邦雄「詩人について」(『詩学』1959年7月号 / 『塚本邦雄全集第9巻評論II』ゆまに書房. 1999)
- 壺井繁治「プロレタリア文学運動の昂揚と『詩と詩論』の創刊」(『現代詩の流域』筑摩書房. 1959)
- 中野重治編・解説『日本現代詩大系 第10巻 昭和期(3)』(河出書房. 1951) [合集] 参照
- 野田宇太郎編『世界名詩集大成 17 日本II』(平凡社. 1959) [合集] 参照
- 古川清彦「詩」(久松潜一編『日本文学史近代』至文堂. 1957 / 増補新版 1981)
- 山室静「昭和詩の展望」(荒正人編著『昭和文学史下』角川文庫. 1956)
- 吉岡実「救済を願う時 - 『魚藍』のことなど」(『短歌研究』1959年8月号 / 『死児』という絵』思潮社. 1980 / 増補版. 筑摩書房. 1988)
- 久保田正文・司代隆三『日本現代詩辞典』(北辰堂. 1955) →無記名「岩本修蔵」「左川ちか」「新領土」

【1960年代】

- 安藤一郎「『詩と詩論』」(伊藤整他『新潮日本文学小辞典』新潮社. 1968 / 磯田光一他編『新潮日本文学辞典』1988と改題し増補改訂) [事典]
- 安藤一郎「西脇順三郎の詩的世界」(『文学』(岩波書店) 36-5. 1968. 5 / 『西脇順三郎研究』右文書院. 1972)
- 伊藤信吉他編『現代詩鑑賞講座9 現代詩編Ⅲモダニズムの旗手たち』(角川書店. 1969) →近藤東「『詩と詩論』の系譜」、上田保「『詩法』と『新領土』の詩人たち」

- 伊藤整「寛容」(『世界』1967～68／単行本、岩波書店、1968／『伊藤整全集10』新潮社、1972)
- 江間章子「昭和の詩」(成瀬正勝編著『昭和文学十四講』右文書院、1966)
- 大岡信「ダダイズムから戦後詩まで」(吉田精一・稲垣達郎編『日本文学の歴史12』角川書店、1968)
- 大岡信『昭和詩史』(『現代詩鑑賞講座12』『明治・大正・昭和詩史』角川書店、1969／『講座日本現代詩史3 昭和前期』『新文学の成立と展開』右文書院、1973／『昭和詩史』思潮社、1977／『昭和詩史 昭和現代詩史・現代詩人論』新装版、思潮社、1980／『昭和詩史 - 運命共同体を読む』詩の森文庫、思潮社、2004)
- 小田切進「詩と詩論」「文学」「文芸レビュー」「新文学研究」「行動」(『現代日本文芸総覧文学・芸術・思想関係雑誌細目及び解題中』明治文献、1968)
- 金子光晴・村野四郎・三好豊一郎・大岡信共編『類別日本詩集』(文芸新聞社、1963)[合集] 参照
- 神林暁「田居尚素描」(『観世流名誉師範田居尚七周年記念会誌』1969カ／『蘇春記 - 素膚の伊藤整 -』岩崎書店、1976)
- 枯木虎夫「石狩平原の手紙」(『詩風土』詩風土の会、詩風土社、38、1966、10／枯木虎夫『石狩平原の手紙 詩風土より 枯木虎夫二十三回忌記念誌』井上二美、1999)
- 菊地康雄『青い階段をのぼる詩人たち - 現代詩の胎動期』(青銅社、1965／『現代詩の胎動期 - 青い階段をのぼる詩人たち -』現文社、1967増補改訂版) → 「アヴァン・ギャルド詩の展開」(『俳句研究』32-10、1965、10を大幅改訂)、「アヴァン・ギャルド詩の展開補遺」
- 木村重雄「東京の批評」(『音楽芸術』20-11、1962、11)[音楽]
- 黒田三郎「森谷さんの思い出」(『詩学』1969年5月号／『黒田三郎著作集3』思潮社、1989)
- 阪本越郎「『椎の木』の人々について」(『詩学』16-10「詩壇100年史」、1961、9)[合集] 参照
- 『詩学』17-8「シュルレアリスム特集」(1962、9) 左川ちか「黒い空気」[合集] 参照
- 田中冬二「セレニテの詩人 - 山本信雄句集『春燕集』 - 」(初出不明、1966?／『妻科の家』東京文献センター、1970／『田中冬二全集3』筑摩書房、1985)
- 千葉宣一「昭和詩誌展望(一) - 『新詩論』『詩法』総目次・解題 - 」(『国語国文研究』40、1968、6)
- 塚本邦雄「魔女不在」(『短歌研究』17-4、1960、4)
- 中村千尾「左川ちかの詩」(『葡萄』22、葡萄発行所、1962、7)
- 早川雅之「『雪明りの路』論」(『日本文学詩要』21、1968／『伊藤整論』八木書店、1975)
- 早川雅之「初期短編群の世界」(執筆1967、未発表／『伊藤整論』八木書店、1975)
- 三善晃『白く～佐川ちかによる4つの詩』(「白く」「他の一つのもの」「むかしの花」[Finale]の声楽曲4曲、1962、楽譜、レコード、CD各種出版多数。近年は藍川由美『高

原断章』2005、斉藤京子『白く』2015などに収録。詳細は三善晃・丘山万里子『波のあわいに－見えないものをめぐる対話』春秋社。2006及びサイト『三善晃作品リスト』参照 http://chorch.fc2web.com/miyoshi_a.html [音楽]

□三善晃「作曲者のことば」(『音楽芸術』21-8付録「白く」楽譜。1963.8) [音楽]

□吉岡実「読書遍歴」(『週刊読書人』1968年4月8日号／『「死児」という絵』思潮社。1980／増補版。筑摩書房。1988)

□吉田精一「現代詩の流れⅠ－詩法の問題を中心に」(伊藤整・吉田精一・分銅惇作・小海永二編『読解講座現代詩の鑑賞3現代詩Ⅰ』明治書院。1968)

□無記名「遺著左川ちか詩集」(『本』2-7。麦書房。1965)

□無記名「不死鳥の女流詩人 莊原照子は生きていた」(『毎日新聞』1967年8月20日朝刊。都内中央版) [新聞]

【1970年代】

□浅沼君子・小松瑛子・北浦淳子・中田美恵子・小田幸枝(司会友田多喜雄・佐々木逸郎)「座談会 北の詩・その女流の系譜」(『北方文芸』5-11。1972.11) [北海道]

□板垣弘子「近代女流文学史年表」(板垣弘子他編著『近代女流の文学』新典社。1972)

□伊藤信吉「モダニズム・抒情詩の世界」(伊藤信吉編『日本の詩第23巻近代詩集(2)』集英社。1979) [合集] 参照

□今村忠純「『北方文芸』」(日本近代文学館・小田切進編『日本近代文学大事典5』講談社。1977) [事典]

□江間章子「『詩と詩論』あゝのころ」(吟遊編集部編『吟遊別冊 モダニズム50年史 総特集・詩と詩論』吟遊社。1979/『詩と詩論－現代詩の出發』と改題して冬至書房より1980年に再刊)

□太田三郎「ジョイス(ジェイムズ)」(松田稔編『比較文学辞典』東京堂出版。1978) [翻訳]

□大橋吉之輔「吉田甲子太郎とアンダスン」(『英語青年』1975年8月号～76年3月号／『アンダスンと三人の日本人－昭和初年の「アメリカ文学」-』研究社出版。1984) [翻訳]

□小川和佑「美の探究者たちもうひとつの近代詩史」(『昭和詩歌俳句史』別冊一億人の昭和史、毎日新聞社。1978)

□鏡味國彦「日本におけるJames Joyceの紹介とその影響について－昭和初年代の伊藤整を中心として-」(『立正大学人文科学研究所年報』15。1978.3) [翻訳]

□川村欽吾「詩人左川ちか回想」(『地球』68。地球社。1979.7)

□上林暁「足袋の思い出」(『伊藤整全集7』新潮社。1972／『幸徳秋水の甥』新潮社。1975／『上林暁全集15』筑摩書房。1967)

□北見恂吉(鈴木重道)「余市歌壇史(四) 戦前篇」(『余市文芸』5。1979) [北海道]

□木原孝一「左川ちか」(日本近代文学館・小田切進編『日本近代文学大事典2』講談社。

1977) [事典]

- 木原直彦『伊藤整文学散歩』(北書房. 1975) [北海道]
- 木原直彦「大正期 昂揚期 大正の青春」(『北海道文学史 大正・昭和戦前編』(北海道新聞社. 1976) [北海道]
- 木ノ内洋二「冥府織娟 - 百合子・ちか詩集幻想」(『小樽詩話会』153号 1978. 7)
- 小寺謙吉・佐々木嘉朗編『現代日本詩書綜覧昭和戦後篇』(名著刊行会. 1971) ※『左川ちか詩集』特製版書影
- 小寺謙吉・佐々木嘉朗編『著者別詩書刊行年次書目』(名著刊行会. 1971)
- 小松瑛子「黒い天鷲絨の天使 - 左川ちか小伝 - 」(『北方文芸』5-11. 1972. 11 / 日本大学芸術学部『江古田文学』63. 2006. 11 に再録)
- 小松瑛子「左川ちかと北園克衛」(『北海タイムス』1972年11月15日朝刊) [新聞]
- 小松瑛子「北海道における女性詩人の歩み<上>」(『朝日新聞』1974年12月1日朝刊北海道) [新聞]
- 小松瑛子「北海道における女性詩人の歩み<下>左川ちかの詩」(『朝日新聞』1974年12月8日朝刊北海道) [新聞]
- 小松伸六「同人雑誌評」(『文学界』27-1. 1973. 1)
- 昭和女子大学近代文学研究室「近代文芸年表 (39)」(『近代文学研究叢書 39』昭和女子大学近代文化研究所. 1974)
- 昭和女子大学近代文学研究室「近代文芸年表 (40)」(『近代文学研究叢書 40』昭和女子大学近代文化研究所. 1974)
- 全音楽譜出版社出版部編『三善晃歌曲集』(全音楽譜出版社出版社. 1971、増補改訂版. 1995) [音楽]
- 曾根博義「恋愛と詩人の終焉」(『伝記・伊藤整<詩人の肖像>』六興出版. 1977 / 改訂版 1981 で同章内容補訂)
- 高橋留治「丈二の周辺と北海道」(『評伝無冠の詩人宮崎丈二 - その芸術と生涯 - 』北書房. 1974) [北海道]
- 武井静夫『若き日の伊藤整』(冬樹社. 1974) [北海道]
- 武井静夫『後志歌人伝』(海鳴詩社. 1975) [北海道]
- 武田文章「略伝」(伊藤信吉編『日本の詩第23巻近代詩集 (2)』集英社. 1979) [合集] 参照
- 田村隆一「若い荒地 (抄)」(吉本隆明編『現代詩論大系 3 1955-59 下』思潮社. 1971)
- 千葉宣一「左川ちか」(稲垣達郎・大岡信選『別冊太陽 近代詩人百人』平凡社. 1978)
- 鶴岡善久「透徹と跛行 - 左川ちかへの試み - 」(『詩学』30-6. 1975. 5 / 『幻視と透徹 - 詩的磁場を求めて』沖積舎. 1983)
- 鶴岡善久編『日本の詩 昭和の詩 I』(ほるぶ出版. 1975) [合集] 参照
- 富岡多恵子「詩人の誕生 - 左川ちか」(『文学界』32-8. 1978. 8 / 『さまざまなうた - 詩

人と詩』文芸春秋. 1979、1984に文庫化／『富岡多恵子の発言3 女の表現』岩波書店. 1995)

□中野嘉一・柴山幹郎・西垣脩・加藤郁乎「異端とは何か 座談会」(『詩学』25-12「特集 - 異端の詩人を祭れ!」1970. 12)

□中野嘉一『前衛詩運動史の研究 モダニズム詩の研究』(大原新生社 1975 / 沖積舎より 2003 復刻)

□中野嘉一「宝石のやうな朝 西脇詩と氾濫するエスプリ・ヌーボー」(分銅惇作・吉田熙生編『現代詩物語』有斐閣. 1978)

□中野嘉一「春山行夫」(「春山行夫論」『風土と詩人たち下』宝文館出版. 1977 と前掲「宝石のやうな朝」を加筆編集／『モダニズム詩の時代』宝文館出版. 1986)

□日本近代詩論研究会編『昭和詩論の研究 - その資料と解説 - 』(日本学術振興会. 1974) →佐々木満子「『詩と詩論』」、鈴木美枝子「『椎の木』」、同「『文芸汎論』」、佐藤房儀「近代詩集年表」

□原崎孝「『詩と詩論』及び『文学』の成立と展開覚書」(吟遊編集部編『吟遊別冊 モダニズム 50 年史 総特集・詩と詩論』吟遊社. 1979 / 『詩と詩論 - 現代詩の出發』と改題して冬至書房より 1980 再刊)

□原子朗「『詩と詩論』をめぐる諸問題 - 新しい詩史のための反語的な詩論 - 」(『日本近代文学』19. 1973. 10)

□北海道文学館編「北海道文学地図」(『北海道文学地図』北海道新聞社. 1979) [北海道]

□三善晃「一瞬の望見」(『三善晃の音楽』ビクターレコード VX-5 ~ 7. 1970 / 『遠方より無へ』所収. 白水社. 1979、新装版 2002) [音楽]

□村野四郎他編『講座日本現代詩史 3 昭和前期』(右文書院. 1973) →大岡信「新文学の成立と展開」(「昭和詩史」1969 を補訂)、金井直「主知主義の展開と挫折」、鍵谷幸信「昭和詩における西欧詩の影響」

□師井キヌエ「日本文学研究年報(昭和四十九年十一月~同五十年十月) 付補遺」(『学苑』(昭和女子大学日本文学紀要) 433. 1976. 1)

□山本茂「西洋菓子の匂いのする少女 重田根見子 - 伊藤整『雪明りの路』」(初出『サンデー毎日』1979 年連載 / 『物語の女 - モデルの歩いた道』講談社. 1979 / 中公文庫. 1990)

□(也)「吉岡実」(『中央公論』92-6. 1977. 6)

□無記名「昭森社刊行書目総覧」(『本の手帖別冊・森谷均追悼文集・昭森社刊行書目総覧』昭森社. 1970)

□「教養特集『二つの青春』 - 多喜二と整 - 」(NHK 教育テレビ映像番組. 1972 年 6 月 8 日) 川崎昇他出演 [未見]

参考:『緑丘』(小樽商大同窓会誌) 86 号「緑丘夜話 NHKTV 二つの青春・多喜二と整」(1972. 9)

【1980年代】

- 石塚繁幸『私家版 左川ちか詩集』(1986. 12、私家版) [未見] 「後記・左川ちかの詩などについて」は一部、石塚繁幸「左川ちか資料集」(千年町詩舎. 1992. 私家版) に収録
- 伊藤礼『伊藤整氏こいぶみ往来』(講談社. 1987)
- 上田周二『詩人乾直恵一詩と青春一』(潮流社. 1982)
- 内田忠『覚書メモ』(丸田桜子・橋野稔子編『山桐 内田忠回想特輯号』内田五郎発行. 1985) ※ 1930年代後半～40年代前半の内田忠の覚書掲載
- 江間章子「詩と俳句のあいだ 1」「詩と俳句のあいだ 5」(『朝日新聞』1981年5月3日朝刊、同31日朝刊) [新聞]
- 江間章子「詩人としてこの世に生まれた女性 - 『ポエジー』というケープを肩にかけて逝く - 」(『図書新聞』1984年1月1日) [新聞]
- 江間章子「埋もれ詩の焰ら」(『幻視者』1983. 12月号～85. 6月号連載「華麗なる回想・若くして逝った詩人たちへの鎮魂歌」/講談社. 1985)
- 江間章子「バンジーの花束を前にして 亡き詩人群を思う」(『岩手日報』1984年2月16日夕刊) [新聞]
- 江間章子「左川ちかが置いて行ったもの」(『青春旅情詩歌集 さすらいと心の旅』[別冊詩とメルヘン 1986年冬号]. 14巻2号通巻167号. 1986. 2 / 『<夏の思い出>その想いのゆくえ』収録. 宝文館出版. 1987)
- 大村喜吉他編『英語教育史資料5 英語教育事典・年表』(東京法令出版. 1980) [翻訳]
- 丘山万里子「生と死と創造と - 作曲家・三善晃論」(『音楽芸術』39-5・6・8、1981 / 『聞きあうもの超えゆくもの』所収. 深夜叢書社. 1990) [音楽]
- 鏡味國彦「大正期から昭和初年代にかけてのジョイス紹介の概観」(『ジェイムズ・ジョイスと日本の文壇 - 昭和初期を中心として - 』(文化書房博文社. 1983 / 「ジェイムズ・ジョイス移入考(その一) - 大正期から昭和初年代にかけてのジョイス紹介の概観 - 」と改題し『立正大学人文科学研究年報』33. 1995で加筆修正) [翻訳]
- 金子秀夫「詩誌・詩集評」(『神奈川の文学 87 神奈川文芸年鑑 11』神奈川新聞社. 1987)
- 川村二郎・飯島耕一・津島佑子「読書鼎談立松和平『光匂い満ちてよ』富岡多恵子『斑猫』」(『文芸』19-1. 1980. 1)
- 川村湊「妹の恋 - 大正・昭和の“少女”文学」(『幻想文学』24「特集 夢みる二〇年代」幻想文学会出版局. 1988 / 『紙の中の殺人』河出書房新社. 1989 / 『異端の匣 ミステリー・ホラー・ファンタジー論集』インパクト出版会. 2010)
- きたのじゅんこ「海の花嫁」「海のお天使」イラスト (『青春旅情詩歌集 さすらいと心の旅』[別冊詩とメルヘン 1986年冬号]. 14巻2号通巻167号. 1986. 2)
- 木原直彦『北海道文学散歩Ⅱ 道央編』(『北方文芸』1968～連載/立風書房. 1982) [北海道]
- 木原直彦「戦後の成熟 - 昭和五十年前後 受賞者たち」(『北海道文学史 戦後編』(北海

道新聞社. 1982) [北海道]

□木原直彦『伊藤整「若い詩人の肖像」・小樽』（『文学散歩名作の中の北海道』北海道新聞社. 1988）[北海道]

□小海永二「現代詩の流れ」（『講座日本現代文学 31 現代詩』角川書店. 1982 / 『小海永二著作選集 8』丸善株式会社. 2007）

□小海永二編『郷土の名詩<東日本篇>』（大和書房. 1986）→千葉宣一「概観・北海道」、小松瑛子「鑑賞の手引」[北海道]

□古平隆「日本における Sherwood Anderson の書誌（1921-1988）」（『横浜市立大学論叢』40-3. 1989. 3）[翻訳]

□小松瑛子「海の天使 左川ちかの詩」（『ラ・メール』1. 1983. 7）

□小松瑛子「左川ちか」（『北海道文学大事典』北海道新聞社. 1985）[事典]

□左川ちか著・小野夕靄・川崎浩典・曾根博義編『左川ちか全詩集』（森開社. 1983）→浦和淳「左川ちか氏のこと」、千葉宣一「海は満つることなし」、鶴岡善久「左川ちかと<死>」、小松瑛子「左川ちかの詩と私」、川崎昇「遠い記憶」、曾根博義「編輯者の一人として」（『左川ちか全詩集』付録「栞」所収. 1983）[個人詩集] 参照

□左川ちか「書簡冬・夏」（丸田桜子・橋野毬子編『書帷 内田忠回想特輯号』内田五郎発行. 1984）※内田忠宛の書簡二通掲載

□酒（略名）「新刊 人と本 『埋もれ詩の焔ら』 愛しい詩人を語る」（『朝日新聞』1985年12月8日朝刊）[新聞]

□佐々木逸郎「詩・概説（戦前）」（北海道文学館編『北海道文学読本』共同文化社. 1988）[北海道]

□佐々木桔梗『北園克衛とモダニズム雑誌群』（プレス・ビブリオマーズ. 1980）

□静岡県詩史編纂委員会『年表静岡県の詩の歴史 140 年』（静岡県詩人会. 1989）

□柴田基典「詩の困難な時代」（『西日本新聞』「西日本詩時評」1982 / 『想像力の流域 西日本の詩時評』西日本新聞社. 1984）

□曾根博義「伊藤整」（『研究資料現代日本文学 1』明治書院. 1980 / 『新研究資料現代日本文学 1』明治書院. 2000 で追捕）

□田辺福德「左川ちか詩集」（『北海道医療新聞』682号. 1987. 1 / 『本と珈琲』. 私家版. 1993）

□田辺福德「ジョイスの詩集」（『北海道医報』687号. 1989. 1 / 『本と珈琲』. 私家版. 1993）[翻訳]

□千葉宣一「芸術的近代派」（長谷川泉編『日本文学新史現代』至文堂. 1986 / 新装改定版1991 / 「モダニズムの史的動態」と改題し、『モダニズムの比較文学的研究』おうふう. 1998 に収録）

□手塚久子「江間章子詩集『イラク紀行』をめぐって」（『幻視者』31. 1984. 3 / 『続 詩をめぐる随想』山脈会. 山脈叢書 21. 1986）

- 中河与一「〈伊藤整〉“性”問題へ傾斜していった軌跡」（『誰も書かないから僕が書く - 隠された文壇史 -』青春出版社. 1980）
- 中島みゆき編・阿木津英他執筆『日本の恋歌 3 涙が出ないのはなぜ』（作品社. 1985 / 正津勉編『心にひびく恋のうた愛のうた 7 失恋』リブリオ出版. 2006 として新編集、正津勉解説「左川ちか」[合集] 参照
- 野崎明弘「コンピューターと文学」（『人工知能はどこまで進むか』岩波書店. 1988）
- 支部沈黙他編・佐々木逸郎解説『北海道文学全集 第 22 巻 北の抒情（詩・短歌・俳句編）』（立風書房. 1981）[合集] 参照 [北海道]
- 原崎孝「近代詩現代詩年表」（『近代詩現代詩必携』別冊国文学 35. 1988 / 改装版. 1989 / 特装版. 1993）
- 日高昭二「北海道新聞雑誌等・伊藤整参考文献目録（戦後編）」（『藤女子大国文学雑誌』31. 1983. 6 / 『国文学年次別論文集「近代Ⅳ」昭和 58（1983）年』学術文獻刊行会. 1985）
- 藤富保男『評伝北園克衛』（有精堂. 1983 / 修正加筆して沖積舎より 2003 発行）
- 分銅惇作・田所周・三浦仁編『日本現代詩辞典』（桜楓社. 1986）→鈴木亨「椎の木」、千葉宣一「マダム・ブランシュ」、沼沢和子「左川ちか」[事典]
- 北海道文学館編『北海道関係詩書所蔵目録稿』（北海道文学館. 1982）
- 北海道文学館編「余市」（『北海道文学百景』共同文化社. 1987）[合集] 参照 [北海道]
- 明珍昇「『詩法』細目」（『解釈』26-8. 1980. 8）
- 山森三平「詩人の街・そして海」（『想像する旅』西田書店. 1989）[北海道]
- 有精堂編集部編『講座昭和文学史 2 混迷と摸索』（有精堂. 1988）→佐藤公一「小説の方法」、倉西聡・吉田司雄編「昭和文学史年表（二）」
- 余市町教育研究所編集委員会編「昭和初期（戦前）の教育文化」（『余市文教発達史』余市郷土史 3 巻. 余市町教育研究所. 1982）[北海道]
- 吉田照生編「年譜」（『鑑賞日本現代文学 20 中原中也』角川書店. 1981）
- 和田利夫「若い詩人たち」（『青芝』1980 年代連載 / 『郷愁の詩人田中冬二』筑摩書房. 1991）
- 無記名「学界教育界の動向」（『国文学 解釈と教材の研究』26-11. 1981. 8）
- 無記名「『短歌研究』歌と論一覧（第一回）七～十一年」（『短歌研究』39-2. 1982. 2）
- 無記名「伊藤整」（『人物年表シリーズ大正期人物年表 5』日外アソシエーツ. 1987）
- 無記名「日本現代詩大系（河出書房新社）」「日本の詩（集英社）」（青山毅編『詩歌全集・内容綜覧下』日外アソシエーツ. 1988）

【1990 年代】

- 阿賀猥・阪本若葉子他「JO5 論争 I 部 言語理性鳥ジェーンの巻」（『JO5』18 号. 1993. 7）
- 阿賀猥「殻を脱ぐ - 嵯峨信之、左川ちか、阪本若葉子…と『羊たちの沈黙』-」（『詩学』

50-4. 1995. 4)

- 新井豊美『『女性詩』の展望 - その発生から八〇年代まで』（『女性詩』事情』思潮社. 1994)
- 新井豊美「詩の中の『私』 - 戦後詩に表れた主体の変容について -」（『新日本文学』558. 1995. 2)
- 新井豊美「近代女性詩をめぐって 続『女性詩』ノート7～11」（『現代詩手帖』41-1～5. 1998. 1～5 / 『近代女性詩を読む』思潮社. 2000)
- 新井豊美「女性詩の50年 日本の女性詩について」（『女性作家シリーズ24 現代詩歌集』角川書店. 1999 / 『近代女性詩を読む』思潮社. 2000)
- 荒川洋治「<詩>詩の力、説明尽くす 福田知子の論集『微熱の花びら』」（『読売新聞』1990年7月31日夕刊）
- 安藤久美子「左川ちか」『左川ちか詩集』（『日本現代文学大事典』明治書院. 1994）[事典]
- 井坂洋子「四季の詩」（『詩の誘惑』丸善株式会社. 丸善ブックス. 1995)
- 石塚繁幸「左川ちか資料集」（千年町詩舎. 1992. 私家版）
- 市原正恵「市民文化の諸相」（『静岡県史通史編6 近現代2』ぎょうせい. 1997)
- 上野千鶴子・富岡多恵子・小倉千加子「小島信夫 抱擁家族」（『男流文学論』筑摩書房. 1992. ちくま文庫 1997)
- 上田修「左川ちかへの追憶」（『詩集やがて誰も居なくなる』宝文館出版. 1991）[詩歌]
- 内堀弘『ボン書店の幻 モダニズム出版社の光と影』（白地社. 1992 / ちくま文庫. 2008 で増補）
- 内堀弘・澤正宏・竹松良明・藤本寿彦・和田博文編『現代詩誌総覧4 レスプリ・ヌーボーの展開』、『現代詩誌総覧5 都市モダニズムの光と影I』、『現代詩誌総覧6 都市モダニズムの光と影II』、『現代詩誌総覧7 十五年戦争下の詩学』（日外アソシエーツ. 1998)
- 相賀徹夫編『花のうた 花の俳句短歌詩』（小学館. 1990）[合集]
- 大森郁之助「大林清『桜の進軍』覚書 - 敗戦直前期の『少女倶楽部』連載小説 -」（『国語と国文学』71-9. 1994. 9)
- 小川和佑「同人研究誌の動向」（『昭和文学研究』21. 1990. 7)
- 桶谷秀昭「奸智と微笑 - 伊藤整（三） -」（『新潮』90-2. 1993. 2)
- 川村湊「海が天にあがる 左川ちか 山脈」（『現代詩手帖』42-4. 1999. 4)
- 木原直彦編『ふるさと文学館 第1巻 北海道1』（ぎょうせい. 1993）[合集] 参照 [北海道]
- 紅野敏郎「逍遙・文学誌（33）『新文芸時代』 - 伊藤整・瀬沼茂樹・上林暁ら」（『国文学解釈と教材の研究』39-4. 1994. 3)
- 国立国会図書館図書部編『国立国会図書館蔵書目録昭和元年 - 24年3月第6編文学(1)』（国立国会図書館. 1998)

- 小坂太郎「澤木隆子・男鹿の詩星」(木下耕甫編『詩画集「白い国の詩」』東北電力株式会社. 1996)
- 小松瑛子「評論 左川ちかの詩の形成」(『小樽詩話会』36周年記念号. 1999. 12)
- 佐々木桔梗「解説」(山田野理夫編『江間章子全詩集』宝文館出版. 1999)
- 佐々木幹郎「詩」(木原直彦・神谷忠孝監修『89・北の文学』北海タイムス社. 1990)
- 佐藤公一「『街と村』再論 - 中野重治『閏二月二十九日』より - 」(『地上』3. 1990. 8 / 「中野重治と平野謙と『街と村』 - 中野重治『閏二月二十九日』より - 」と改題、『モダニスト伊藤整』有精堂出版. 1992)
- 澤正宏・和田博文編『日本のシュールレアリスム』(世界思想社. 1995)
- 澤正宏・和田博文編『都市モダニズムの奔流 『詩と詩論』のレスプリ・ヌーボー』(翰林書房. 1996)
- 市立小樽文学館・伊藤整文学賞の会・北海道新聞社編『若い詩人の肖像 - 伊藤整、青春のかたち』(市立小樽文学館・伊藤整文学賞創設10周年記念企画展図録1999) [北海道]
- 正津勉・平出隆編『新潮 臨時増刊 日本の詩101年』(新潮社. 1990. 11) [合集] 参照
- 鈴木貞美編『モダン都市文学X 都市の詩集』(平凡社. 1991) [合集] 参照
- 鈴木貞美「新刊紹介村松定孝・渡辺澄子編『現代女性文学辞典』」(『昭和文学研究』22. 1991. 7)
- 関井光男「解題」(『坂口安吾全集1』筑摩書房. 1999)
- 曾根博義「評伝伊藤整 - 一つの物語」(明治大正昭和文学研究会監修『未刊行著作集12 伊藤整』白地社. 1994)
- 曾根博義「ジョイスと芥川龍之介 - ジョイス受容史の点と線 (一) - 」(『遡河』27. 1990. 1)
- 曾根博義『新潮日本文学アルバム伊藤整』(新潮社. 1995)
- 曾根博義「詩人の恋愛 - 伊藤整の周辺 (三)」(伊藤整『日本文壇史I5』講談社芸文庫版解説. 1997)
- 高橋啓介「限定本」(『別冊太陽 古書遊覧』平凡社. 1998)
- 武井幸夫「詩人左川ちかについて - 文献に残されている足あとと作品を中心に - 」(余市郷土研究会・史談会. 1999) [北海道]
- 鶴岡善久「解題」(大岡信・武満徹・東野芳明・鶴岡善久・巖谷國士監修『コレクション 瀧口修造11 戦前・戦中篇I 1926-1936』みすず書房. 1991)
- 土肥みゆき編『三善晃・猪本隆』(尼崎印刷株式会社. 1993) [音楽]
- 永井浩「評論活動」(『北の詩人たちとその時代』北海道新聞社. 1990) [北海道]
- 永井浩「小樽圏」(北海道詩人協会編『資料・北海道詩史 - 明治・大正・昭和 - 』(1993) [北海道])
- 中島和歌子「ジェンダーと文学 - 他の文化テキストも視野に入れつつ - 」(北海道教育大学公開講座委員会編『「女」と「男」 - ジェンダーで解きあかす現代社会 - 』(北海道大学図

書刊行会. 1997)

- 東雅夫編『夢 書物の王国 2』（東雅夫編. 国書刊行会. 1998）〔合集〕 参照
- 飛高隆夫「春への招待」（『日本現代文学大事典』明治書院. 1994）〔事典〕
- 飛高隆夫「詩誌『海盤車』 - “Etoile de Mer” - 細目（稿）」（『大妻女子大学紀要文系』28. 1996. 3）
- 福田（井上）知子「水晶体の詩人・左川ちか」（『微熱の花びら 林美美子・尾崎翠・左川ちか』蜘蛛出版社. 1990）
- 北海道文学館編『北海道文学の流れ』（北海道立文学館常設展図録. 北海道文学館. 1995）〔北海道〕
- 村永美和子『詩人 藤田文江 支え合った同時代の詩人たち』（本多企画. 1996）
- 森英一『『北陸毎日新聞』文芸関係記事年表稿（昭和篇④）』（『金沢大学教育学部紀要（人文科学・社会科学編）』45. 1996. 2）
- 余市町史編纂室編「余市生活文化発達史の具体的展開」（『余市生活文化発達史』余市郷土史 7 卷. 余市町. 1998）〔北海道〕
- 吉岡実『うまやはし日記』「昭和 14 年 7 月 27 日」（書肆山田. 1990）
- 吉岡陽子「年譜」（『吉岡実全詩集』筑摩書房. 1996）
- 『ラ・メール』39「特集 20 世紀女性詩選」（1993. 1）〔合集〕 参照
- 和田桂子『二〇世紀のイリュージョン 『ユリシリーズ』を求めて』（白地社. 1992）〔翻訳〕
- 無記名「江間章子」（村松定孝・渡辺澄子編『現代女性文学辞典』東京堂出版. 1990）〔事典〕
- 無記名「左川ちか」（『日本著者名総目録 27/44 2』日外アソシエーツ. 1991）
- 無記名「佐川ちか」（東雅夫・石堂藍編著『日本幻想作家名鑑』別冊幻想文学 6. 幻想文学出版局. 1991. 9 / 『日本幻想作家事典』国書刊行会. 2009 として増補改訂）〔事典〕
- 無記名「左川ちか」（日外アソシエーツ編『詩歌人名事典』日外アソシエーツ. 1993 / 新訂版 2002）〔事典〕
- 無記名「想像する旅 山森三平著」（『紀行・案内記全情報 45/91 日本編』日外アソシエーツ. 1993）
- 無記名「想像する旅 山森三平著」（『ノンフィクション・ルポルタージュ図書目録 86/92 II』日外アソシエーツ. 1993）
- 無記名「左川ちか」（芳賀登他監修『日本女性人名辞典』日本図書センター. 1993）〔事典〕
- 無記名「左川ちか」（『全集・作家名綜覧第二期』日外アソシエーツ. 1993）
- 無記名「左川ちか」（勝又浩・藤本寿彦監修『20 世紀文献要覧大系 21 日本文学研究文献要覧（1975～1984）現代日本文学 I』日外アソシエーツ. 1994）
- 無記名「左川ちか」（『伝記・評伝全情報 90/94 日本・東洋編』日外アソシエーツ. 1995）
- 無記名「<新春の詩> 3 小松瑛子 『1999』の詩人」（『北海道新聞』1999 年 1 月 6 日

夕刊全道) [新聞]

□『BOOK PAGE 本の年鑑 1999』[文学] (ブックページ刊行会, 1999)

【2000年代】

□赤井都『カプセル文学 左川ちか』(「海の花嫁」「死の髯」「眠ってゐる」「季節のモノクル」「昆虫」「青い道」「朝のパン」の七種の豆本, 2006. 7～2007. 12)

□麻生直子「解説 女性の詩と時代をめぐって」(『女性たちの現代詩 日本100人選詩集』梧桐書院, 2004)

□我孫子晴美「<北のこぼ抄>『左川ちか詩集』所収「青い道」より」(『朝日新聞』2008年1月19日朝刊北海道) [新聞]

□我孫子晴美「<北のこぼ抄>『左川ちか詩集』」(『朝日新聞』2008年4月16日朝刊北海道) [新聞]

□新井豊美『近代女性詩を読む』(思潮社, 2000)

□新井豊美「女性の詩集から 『左川ちか全詩集』永瀬清子「焰について」白石かずこ『聖なる淫者の季節』」(『現代詩手帖』44-3, 2001. 3)

□新井豊美「屈託のなさと思議な自由感 初期モダニズムの女流詩人たちと北園克衛」(『現代詩手帖』45-11, 「特集 生誕百年・北園克衛再読」, 2002. 11)

□新井豊美『女性詩史再考 「女性詩」から「女性性の詩」へ』(思潮社, 詩の森文庫, 2007)

□新井豊美「北園克衛と左川ちか」(『季刊 びーぐる 詩の海へ』2, 2009. 1)

□荒木瑞子『ふたりの出版人 アオイ書房・志茂太郎と昭森社・森谷均の情熱』(西田書店, 2008)

□安藤元雄・大岡信・中村稔監修、大塚常樹・勝原晴希・國生雅子・澤正宏・島村輝・杉浦静・宮崎真素美・和田博文編『現代詩大事典』(三省堂, 2008) →池田誠「左川ちか」、宮崎真素美「江間章子」、小泉京美「近・現代詩史年表」[事典]

□飯島耕一「詩人の今昔」(『日本経済新聞』2000年7月2日朝刊) [新聞]

□井坂洋子『永瀬清子』(五柳書院, 2000)

□井坂洋子「雨樋の羽根」(『本の窓』2005年1月号／『はじめの穴 終わりの口』幻戯書房, 2010)

□伊藤礼「父・伊藤整」(市立小樽文学館編『伊藤整生誕100年市立小樽文学館特別展記念講演会・シンポジウム「よみがえる伊藤整」全記録』2006)

□内堀弘「石神井書林日録」(初出『図書新聞』／晶文社, 2001)

□内堀弘「詩集を遺さなかった詩人クロニクル二〇〇二年九月・十二月」(『ユリイカ』36-5, 2003. 4)

□内堀弘「優れた火災の完了 - 詩人塩寺はるよ」(『初版本』1, 人魚書房, 2007. 7／『古本の時間』晶文社, 2013)

□えこし研究所編『えこし通信』創刊準備6号「天才 詩人左川ちか小特集」(えこし会,

2004. 3) →中村文昭・林花子・河村尚則・内藤丈志・鯉淵史子・クリハラ冉「中村文昭の文学空間 左川ちかの詩」、井坂洋子「左川ちかと緑のたたかい」、内藤丈志「左川ちか小論」、河村尚則「左川ちかの眼差し」、鯉淵史子「『染色工場!』論」、林花子「痛みを染め上げる母性 - 左川ちか小論」、クリハラ冉「かぎりない愛の染色工場 - 他者とは誰ですか」、同「女性詩人図」、同「左川ちか年譜 左川ちか文献・資料一覧」
- おぐらさわこ「北にある星『左川ちか全詩集を読む』時空を超えて」(『ふららこ』4. 2000. 11)
- 小樽文学舎編『左川ちか詩集』(小樽文学舎発行. 2008) 昭森社版全集に拠る。非売品。[未見]
- 小野塚力「モダニズム文学の輪郭」(『FANTAST』34. 2008. 6)
- 小野塚力「左川ちか『室楽』をめぐって」(『FANTAST』34. 2008. 6、訳詩集『室楽』収録) [翻訳]
- 小野夕馥編『LÉVOCATION』4「夭折詩人小特輯」(森開社. 2007. 5)
- 小野夕馥編『LÉVOCATION』8「左川ちか譯ハリイ・クロスビィ詩抄」[左川ちか 夢](森開社. 2009. 6) [翻訳]
- 加藤仁「左川ちか書誌・補遺」(『文献探索』2007. 3)
- 川口晴美「書評新井豊美著『近代女性詩を読む』」(『神奈川大学評論』37. 2000. 11)
- 川村湊「報告『性』とイデオロギーを超えて - 『日中女性作家シンポジウム』傍聴録」(『すばる』23-12. 2001. 12)
- 菊地利奈「伊藤整と左川ちか - アイルランド文学にみいだした『希望』」(『アール(アイルランド研究)』28. 2008. 12) [翻訳]
- 木原直彦「北海道文学地図」(『北海道文学の登音』中西出版. 2009) [北海道]
- 季村敏夫「月と星の転生 - 詩人山中幸夫のことなど」(『ムードロップ』11号. 2009. 2 / 『窓の微風 モダニズム詩断層』みずのわ出版. 2010)
- 季村敏夫「『いたましさ』について」(『山上の蜘蛛 - 神戸モダニズムと海港都市ノート』みずのわ出版. 2009)
- 工藤正弘「<道内文学 詩>向井豊昭『北の詩のバイオニア、飯島白圓』祖父の詩友を追う考証評論 ノルテ第5号の短歌 詩人が見失った主題に挑む」(『北海道新聞』2000年1月28日夕刊全道) [新聞]
- クリハラ冉「人間という名の喩(メタファ) 女性即人間である可能性について」(『現代詩手帖』47-11. 2004. 11)
- クリハラ冉「近代詩・現代詩の<核>検証 - 左川ちかと長澤延子の魅力・魔力に沿いながら」(『詩学』61-3. 2006. 4)
- 紅野敏郎「雑誌探求(一九三四年) 季刊『苑』三冊の検討」(『資料と研究』6. 2001)
- 紅野敏郎「森谷均の昭森社の『左川ちか詩集』と森開社の『左川ちか全詩集』」(『国文学解釈と鑑賞』71-5. 2006. 5)

- 近代ナリコ「孤独の始末 左川ちか『左川ちか全詩集』(『ムーンドロップ』11.2009.2 / 『女子と作文』本の雑誌社.2013)
- 小谷野敦「昭和恋愛思想史 第九回 作家たちの恋愛と結婚」(『文学界』57-10.2003.10 / 『恋愛の昭和史』文藝春秋.2005 / 文春文庫.2008)
- 佐藤弓生「少年ミドリと暗い夏の娘」(『FANTAST』34.2008.6 / 『薄い街』沖積舎.2010) [詩歌]
- 坂本真紀「左川ちか 詩の所在地」(レアリテの会『舟』116.2004)
- 志賀英夫『戦前の詩誌・半世紀の年譜』(詩画書房.2002)
- 『石神井書林古書目録』77号「左川ちか自筆詩稿(「暗い唄」「おなじく)」「『室楽』」「『左川ちか詩集』」(2009.2)
- 正津勉「私は人に捨てられた 左川ちか『緑』」(『詩人の愛 百年の恋、五〇人の詩』河出書房新社.2002)
- 正津勉「詩人の死(13) 左川ちか」(『表現者』13.2007.7)
- 曾根博義正義「伊藤整」(浅井清他編『新研究資料現代日本文学7詩』明治書院.2000)
- 征矢哲郎「『椎の木社』の本」(『初版本』1.人魚書房.2007.7)
- たかとう匡子「左川ちか 女性モダニズム詩の先駆」(『イリプスⅡnd』1.2008.4 / 『私の女性詩人ノート』思潮社.2014)
- たかとう匡子「同人誌時評 詩は閉塞状況ではないとする前向きさ (樋口伸子、吉貝甚蔵、脇川郁也(鼎談)「詩と誌と私」と『季刊午前』)緻密な文章にみる、書きたいという情熱(川口明子「はらから・愛と相克」『カプリチオ』)」(『図書新聞』2921.2009年6月13日号) [新聞]
- 高橋順子編『現代日本女性詩人85』(新書館.2005) [合集] 参照
- 高橋順子編『日本の現代詩101』(新書館.2007) [合集] 参照
- 高山美香「左川ちか」(『一葉のめがね 偉人・ミニチュア粘土人形+エッセイ』猫の事務所.2009)
- 武井幸夫「詩人左川ちか小伝 - 文献に残されている評言を中心に - 」(『余市文芸』28号.2003.3) [北海道]
- 鶴岡善久編『モダニズム詩集1「詩と詩論」「文学』」(思潮社.2003) [合集] 参照
- 鶴岡善久「温雅なモダニズムの終焉 追悼・江間章子」(『現代詩手帖』48-5.2005.5)
- 手皮小四郎「モダニズム詩人 荘原照子 聞書」(全23回)「荘原照子年表」(『菱』161~183号.菱の会2008~2014) 第1・12・13・14・19回に記載
- 寺田操「左川ちか - 青のカラージュ・ロマン」(『交野が原』48号.2000.5 / 『尾崎翠と野溝七生子』白地社.2011)
- 東京文化財研究所編「平成13年定期刊行物所載文献(近現代/絵画)」(『日本美術年鑑平成14年版』国立印刷局.2003)
- 外村彰「高祖保作品年表(一)」(『大阪産業大学論集:人文・社会科学編』2.2008.2)

- 土肥みゆき「三善晃」(『20世紀の作曲家たち』ソーケン.2006) [音楽]
- 中島美幸「詩」(岩淵宏子・北田幸恵編著『はじめて学ぶ日本女性文学史近現代編』ミネルヴァ書房.2005)
- 中村文昭編著『現代詩研究 昭和篇』(ノーサイド企画室.2003) [合集] 参照
- 中村文昭他・河村尚則・林花子・鯉淵史子・クリハラ冉・内藤丈志「中村文昭の文学空間 吉原幸子・富岡多恵子・伊藤比呂美・麻生和子 - 日本の女性には日本語の言葉がよく似合う -」(えこし研究所編『えこし通信』創刊準備9号.えこし会.2005.8)
- 中村文昭・クリハラ冉・鯉淵史子・林花子・チョルモン・栗原飛宇馬「中村文昭の文学空間 孤独遊びの天才 吉行理恵座談会」(えこし研究所編『えこし通信』10+1号.えこし会.2006.10 / 日本大学藝術学部江古田文学会『江古田文学』73「特集吉行理恵」[2010.4]に再録)
- 中村文昭・林花子・鯉淵史子・クリハラ冉「中村文昭の文学空間 女性詩人 疾風怒濤のただ中へ」(えこし研究所編『えこし通信』10+2号 [通巻12号].2007.4)
- NAKAYASU, Sawako (中保佐和子)『To the Vast Blooming sky by Chika Sagawa』([United States] Seeing Eye Books (now Mindmade Books, 2006) [翻訳])
- NAKAYASU, Sawako『[Five] Factorial』([United States] Factorial Press. 2006) → ICHIRO KOBAYASHI (小林一郎)「Minoru Yoshioka's Early Poems, in Light of Katue Kitasono and Chika Sagawa」(『初期吉岡実詩と北園克衛・左川ちか』日本語原文はHP『吉岡実の詩の世界』に掲載、<http://ikoba.d.dooo.jp/YMkataru.html>) [翻訳]
- 檜崎洋子「三善晃の作曲様式序説 - 1950年代から1960年前半にかけての器楽作品と声楽作品の関係をめぐって -」(『武蔵野音楽大学研究紀要』38.2006.3) [音楽]
- 日本詩人クラブ編『「日本の詩」一〇〇年』(土曜美術社.2000) → 水野ひかる「左川ちか」、天彦五男「椎の木」、上田周二「MADAME BLANCHE」、中村不二夫・小川英晴・森田進編「明治から現代までの詩史年表」[事典]
- 日本大学藝術学部江古田文学会『江古田文学』「特集天才左川ちか」(64号.2006.11) → 城戸朱里「左川ちかと吉岡実 詩語の魅力と魔力」、曾根博義「左川ちか 補遺と訂正」、新井豊美「モダニズム詩と左川ちか」、中林佐和子「左川ちか 詩三編 英訳」、クリハラ冉「左川ちか略年譜」、同「左川ちか文献・資料一覧」、栗栖丈(中村文昭)「『變奏曲』集四篇 左川ちかに寄す」[詩歌]、学生・院生9氏の小論(チョルモン「花の言葉 - 左川ちかの詩の世界性」、高橋文「ちか色 - 左川ちかの『緑』について」他)。以下再録→鶴岡善久「左川ちかと<死>」(初出『左川ちか全詩集』付録「栞」.1983)、小松瑛子「黒い天鵝絨の天使 - 左川ちか小伝」(『北方文芸』5-11.1972.11)、『えこし通信』創刊準備6号「天才 詩人左川ちか小特集」の各論(2004.3)
- 野坂幸弘「北方星董派にあこがれて - 左川ちかと阿部保 -」(『芸術至上主義文芸』2008)
- 野村喜和夫・城戸朱里・佐々木幹郎「起源・反起源」(『現代詩手帖』44-7.2000.7)
- 野村喜和夫「吉岡実」(飛高隆夫・野山嘉正編『展示現代の詩歌2』明治書院.2007)

- 長谷川綾「伊藤整『冬夜』、小熊秀雄全集…絶版作品 復刻へ 小樽文学館 30 年を記念 市民ら 14 人製本」(『北海道新聞』2008 年 5 月 8 日朝刊小樽・後志地方) [新聞]
- 坂東里美「モダンガールズその 1 失われた詩人 - 左川ちか - 」(『蘭』60. 2005. 9 / <http://www.interq.or.jp/sun/rain/tree/rain31/moderngirls1.html>)
- 坂東里美「左川ちか - 予見する未来 一九三〇年代の女性前衛詩人たち (1)」(『詩学』62-3. 2007. 3)
- 坂東里美「藤富保男 經由 北園克衛」(『季刊 びーぐる 詩の海へ』2.2009.1)
- 平林敏彦「はじめりのはじまり わが戦中詩篇アンソロジー」(『戦中戦後詩的時代の証言 1935-1955』思潮社. 2009)
- 藤田文江著・村永美和子編『新装改訂版 夜の聲 詩集』(セダー社. 2005)
- 藤本寿彦「アンデパンダン誌『今日の詩』と一九三〇年代のポエジイ運動 - 百田宗治の再評価に向けて - 」(『日本近代文学館年誌』3. 2007. 9 / 『周縁としてのモダニズム 日本現代詩の底流』双文社出版. 2009)
- 藤本寿彦「一九三〇年代における女性詩の表現 - 左川ちかを中心として - 」(『日本現代詩歌研究』8. 2008. 3 / 『周縁としてのモダニズム 日本現代詩の底流』双文社出版. 2009)
- 保昌正夫監修・青木正美解説『近代詩人・歌人自筆原稿集』(東京堂出版. 2002)
- 松岡正剛「詩集ばかり彗星にした 内堀弘 ボン書店の幻」(初出 2003 / 『松岡正剛千夜千冊 3』求龍堂. 2006)
- 三浦正雄「日本近現代怪談文学史年表 - 昭和戦前・戦中編 - 」(『川口短大紀要』19. 2005. 12)
- 水田宗子「『第七官界彷徨』の世界」(『尾崎翠『第七官界彷徨』の世界』新典社. 2005)
- 水田宗子「モダニズムと戦後女性詩の展開 (3) 終りへの感性 左川ちかの詩」(『現代詩手帖』51-9. 2008. 9 / 『モダニズムと<戦後女性詩>の展開』思潮社. 2012)
- 宮崎真素美「左川ちか」(『日本女性文学大事典』日本図書センター. 2006 年) [事典]
- 『ムードロップ』[特集左川ちか] (11 号. 2009. 2) →近代ナリコ「ちかのポエジー」(『孤独の始末 左川ちか『左川ちか全詩集』)と改題し『女子と作文』2013 に加筆修正収録)、萩原健次郎「『愛』は『ちか』とも読む。- 左川ちかメモ、上田美紗緒「わたしのよる」、國重游「小説家としての左川ちか - ヴァージニア・ウルフとの比較において」[翻訳]、中村恵美(神泉薫)「“ちか”幻燈」[詩歌]、季村敏夫「戦前神戸のモダニズム詩人のこと」(『月と星の転生 - 詩人山中幸夫のことなど』)と改題し『窓の微風 モダニズム詩断層』2010 に加筆修正収録)、作品採録「憑かれた家 ヴァージニア・ウルフ」(左川ちか訳)
- 山本善行『古本泣き笑い日記』(青弓社. 2002 / 増補版『定本 古本泣き笑い日記』みずのわ出版. 2012)
- ヤリタミサコ「詩人論 左川ちか - 不機嫌な死と詩」(『詩と思想』3-205. 2003. 3 / 『詩を呼吸する - 現代詩・フルクサス・アヴァンギャルド』水声社. 2006)
- 早稲田大学図書館編『マイクロフィッシュ版 文芸レビュー』(雄松堂アーカイブズ.

2008) 同館編『精選近代文芸雑誌集 総目次』(2011)に解題・目次等データ収録

□早稲田大学図書館編・紅野敏郎解題『マイクロフィッシュ版 精選近代文芸雑誌集 [星座・主潮・行路・創作時代・文芸都市・文芸レビュー・新科学的文芸・文学党员・芸術共和国・新文芸時代・あらくれ・リベルテ・尺牘] 総目次』(雄松堂アーカイブズ, 2008、オンデマンド版2009、DVD-ROM版2011)

□和田桂子「関連年表」(『コレクション・モダン都市文化 25 変態心理学』ゆまに書房, 2006) [翻訳]

□和田博文「解題」(和田博文監修・編集『コレクション・日本シュールレアリスム 1 シュールレアリスムの詩と批評』本の友社, 2000)

□和田博文監修・内堀弘編『コレクション・日本シュールレアリスム 7 北園克衛・レスブリヌーボーの実験』(本の友社, 2000)

□和田博文編『現代詩 1920 - 1944 - モダニズム詩誌作品要覧』(日外アソシエーツ, 2006)

□和田博文編『コレクション・モダン都市文化 37 紀伊國屋書店と新宿』(ゆまに書房, 2008)

□和田博文・杉浦静編『戦後詩誌総覧 2 巻 戦後詩のメディアⅡ「詩学」「詩と批評」「詩と思想』(日外アソシエーツ, 2008)、同編『戦後詩誌総覧 5 巻 感受性のコスモロジー』(日外アソシエーツ, 2009)

□和田博文「春山行夫・上田敏雄・村野四郎・近藤東・永田助太郎編『新領土詩集』(和田博文編『戦後詩のポエティクス 1935～1959』世界思想社, 2009)

□林緹圭『日本近代女性詩の研究』(『韓日語文論集』第6巻, 韓日日語日文学会発行, 2002)

□無記名「著者に聞く『永瀬清子』井坂洋子さん(詩人)女性・母性を外へ外へと解放」(『東京新聞』2000年12月10日朝刊／『月刊女性情報』178, 2001.1に再録) [新聞]

□無記名「新人も力作ぞろい『余市文芸』の第28号発刊」(『北海道新聞』2003年4月18日朝刊地方)

□無記名「第15回伊藤整文学賞 受賞の言葉『シンセミア』阿部和重さん『補陀落観音信仰への旅』川村湊さん」(『北海道新聞』2004年6月10日朝刊全道) [新聞]

□無記名「出版情報『現代日本女性詩人 85』」(『東京新聞』2005年5月1日朝刊、『西日本新聞』5月8日朝刊、『北海道新聞』2005年5月15日朝刊全道) [新聞]

□無記名「第16回伊藤整文学賞 受賞の言葉 笠野頼子さん 小説『金毘羅』富岡多恵子さん 評論『西鶴の感情』」(『北海道新聞』2005年6月9日朝刊全道) [新聞]

□無記名「二人の女性詩人」(『広報おたる平成19年6月号』2007.6) [北海道]

□無記名「<人物散歩>左川ちか(1911-36年)上 刺激的なモダニズム詩人」(『北海道新聞』2008年1月12日朝刊小樽・後志地方) [新聞]

□無記名「<人物散歩>左川ちか(1911-36年)下 鮮烈な作品残し25歳で死去」(『北海道新聞』2008年1月13日朝刊小樽・後志地方) [新聞]

- 無記名「<短信>文学館ウイークエンド・カレッジ」(『北海道新聞』2008年5月9日夕刊全道) [新聞]
- 無記名「交差点」(『朝日新聞』2008年5月16日夕刊北海道) [新聞]

【2010年代】

- 阿賀猥・中本道代・戸沢英士「海の天使」(『ドラゴン in the Sea 上』 iga. 2011)
- 阿賀猥・中本道代・戸沢英士「自足するイチゴ大福」(『ドラゴン in the Sea 下』 iga. 2012)
- 暁方ミセイ「ルーニールーム『左川ちか全詩集』夜読」(『現代詩手帖』55-11. 2012. 11)
- 麻生直子「佐川ちか」(『北海道文学事典』勉誠出版. 2013) [事典]
- ADRIENNE Raphael (エイドリアン・ラファエル)「THE STARTLING POETRY OF A NEARLY FORGOTTEN JAPANESE MODERNIST」(『THE NEW YORKER』August. 18. 2015)
- 阿毛久芳編『コレクション・都市モダニズム詩誌第12巻 都市モダニズム詩の大河Ⅱ』(ゆまに書房. 2010)
- 阿部花恵「『早稲田文学増刊女性号』責任編集川上未映子ロングインタビュー」(『ダ・ヴィンチ』24-12. 2017. 11)
- 新谷保人「余市の古さと新しさ」(『京極読書新聞』39. 京極町生涯学習センター湧学館. 2012. 11) [北海道]
- 新谷保人編『余市文集』(京極町生涯学習センター湧学館. 2012. 10)「昆虫」「朝のパン」「私の写真」「五月のリボン」「冬の日記」収録、川崎昇「露店小情」、北見恂吉「小丘」他収録 非売品。[北海道] [未見]
- 有本忠浩「刊行 作品と背景、丁寧に たかとう匡子さん、14人の女性詩人論」(『毎日新聞』2014年5月29日大阪夕刊) [新聞]
- 池田拓矢「左川ちか小論 詩作品における表現技法の特徴」(『藝文攷』22. 日本大学大学院芸術学研究科文芸学専攻. 2017. 2)
- 池田梯一「500ページに込めた『一つの運動』早稲田文学『女性号』責任編集・川上未映子さんに聞く」(『東京新聞』2017年9月22日朝刊)
- 井坂洋子「書評 水田宗子著『モダニズムと<戦後女性詩>の展開」(思潮社、二〇一二年)」(『Journal of the Asia-Pacific Womens Studies Association』城西大学ジェンダー女性学研究所. 2013. 3)
- 井上嘉明「寺田操著『尾崎翠と野溝七生子 - 二十一世紀を先取りした女性たち』都市モダニズム背景に活躍」(『日本海新聞』2011年6月23日) [新聞]
- 内堀弘「耽奇日録 プライヴェートプレスの執念 新版『左川ちか全詩集』(森開社)には、その後に発掘した新たな作品の増補が」(『図書新聞』2992. 2010. 12月4日号 / 『古本の時間』晶文社. 2013) [新聞]
- えこし研究所『えこし会企画 江古田で遊ぶ 総集編』(えこし会. 2012. 2)

- 大井浩一「ことばの周辺 左川ちかとモダニズム 『内面的亀裂』抱え世界に対峙」(『毎日新聞』2012年5月1日夕刊) [新聞]
- 大塚常樹編『コレクション・都市モダニズム詩誌第7巻 主知的抒情詩の系譜Ⅰ』(ゆまに書房. 2010)
- 大塚英良「左川ちか」(『文学者掃苔録図書館 作家・詩人たち二五〇名のお墓めぐり』原書房. 2015)
- 岡和田晃「被害者の痛みを見えなくさせる『空気』の病理」(『図書新聞』3330. 2017年12月9日号) [新聞]
- 小野塚力「ジョイスを詠じたモダニズム詩人、左川ちか」(未谷おと編『アイルランドと日本をめぐる視座Ⅱ』2017. 6. 第4回愛蘭文学研究会開催記念誌) [翻訳]
- 小野夕馥「或る回想」(市立小樽文学館『左川ちか展』パンフレット. 2013)
- 小野夕馥「夏の夜のU氏の憂鬱 - 左川ちかの場合」(『Anthologica』創刊号「小特輯天折詩人」2014. 4)
- 加賀谷誠「本屋のカガヤの三本勝負 女が書く女を読む」(『カイ』21. 2013. 10)
- 加賀谷誠「本屋のカガヤの三本勝負 本は紙で出来ていて、紙は木から出来ている。」(『カイ』24. 2014. 7)
- 加多正直編『近代詩傑作選』(ホンニナル出版. 2013. 電子書籍) ちか「Finale」収録
- 勝原晴希編『コレクション・都市モダニズム詩誌第11巻 都市モダニズム詩の大河Ⅰ』(ゆまに書房. 2010)
- 加藤仁「戦前のアヴァンギャルド詩誌と北園克衛」(『idea アイデア』364. 2014. 5)
- 金澤一志『北園克衛の詩』(思潮社. 2010)
- 川上未映子編『早稲田文学増刊 女性号』1026 (早稲田文学会. 筑摩書房. 2017. 9) [合集] 参照
- 川上未映子・北原美那「『早稲田文学増刊 女性号』刊行記念トークイベント 編集長、女性号について大いに語る」(『ちくま』560. 2017. 11)
- 川口晴美「14人の詩人の、葛藤のなかで紡がれてきた表現とその生涯 青踏の時代から戦後社会までの女性史をたどることにもなる」(『図書新聞』3189. 2015年1月10日号) [新聞]
- 川西政明「伊藤整の性と愛」(『新・日本文壇史 第5巻 昭和モダンと転向』岩波書店. 2011)
- 川村湊「三つの質問したかった 三浦朱門さん追悼文の代わりに」(『毎日新聞』2017年2月13日夕刊) [新聞]
- 紀旭峰「戦前期早稲田大学の台湾人留学生」(『早稲田大学史紀要』44. 2013. 2)
- KIKUCHI, Rina (菊地利奈)・Carol Hayes (キャロル・ヘイズ)「Selected Translations of Sagawa Chika's Poems I」(滋賀大学経済学部ワーキングペーパーオンラインジャーナル 192号. 2013. 6) [翻訳]

- KIKUCHI, Rina (菊地利奈)・Carol Hayes (キャロル・ヘイズ) [Ribbon of May, Fading, Green, and Angels of the Sea by Sagawa Chika] (『Transference』 2-1. Western Michigan University. 2014. 12) [翻訳]
- KIKUCHI, Rina (菊地利奈)・Carol Hayes (キャロル・ヘイズ) [Selected Translations of Sagawa Chika's Poems II] (滋賀大学経済学部ワーキングペーパーオンラインジャーナル 221号. 2015. 2) [翻訳]
- 菊地利奈「生田花世の作品と人生にみるフェミニズム思想 理念と現実の狭間で」(滋賀大学経済学部ワーキングペーパーオンラインジャーナル 264号. 2017. 3)
- 季村敏夫「レスプリ・ヌウボオの活きた姿」(『交野が原』 68. 2010. 4 / 『窓の微風 モダニズム詩断層』 みずのわ出版. 2010)
- 倉本さおり「孤独の始末をつけるために」(『週刊金曜日』 21-32. 2013. 8月23日号) 近代ナリコ『女子と作文』 書評
- クリハラ冉「待望の『左川ちか全詩集 新版』・共有の生命もつ『私』の詩」(『江古田文学』 76. 2011. 3)
- クリハラ冉「見えない母性へ」(『現代詩手帖』 55-11. 2012. 11)
- 黒木まがり構成『マダム・ブランシュ総目録』(トアハウス株式会社出版部. 2010)
- 小池昌代編『恋愛詩集』(NHK 出版新書. 2016) [合集] 参照
- 小池昌代「詩の月評 感傷を超えて」(『中日新聞』 2016年12月3日夕刊) [新聞]
- 五月『まぶしいみどりまで』(三島 GRY IN PUBLIC. 2017. 5) [詩歌]
- 國生雅子編『コレクション・都市モダニズム詩誌第8巻 主知的抒情詩の系譜Ⅱ・昭和の象徴主義Ⅰ』(ゆまに書房. 2010)
- 小谷野敦「伊藤整」(『文豪の女遍歴』 幻冬舎新書. 2017)
- 小山富士子「幻想から遠く離れて」(『APIED (アピエ)』 「シュルレアリスム《日本文学篇》」 26. 2016. 3)
- 酒井佐忠「詩歌の森へ 女性詩人の源流」(『毎日新聞』 2014年5月5日朝刊) [新聞]
- 酒井忠康『積丹半島記』(東京パブリッシングハウス. 2013) [北海道]
- 榊原貴教編『翻訳と歴史』 50・51「二十世紀文学特集《ジョイス・ウルフ・ハックスレー・ブルースト》」(ナダ出版センター. 2010. 5) [翻訳]
- 左川ちか著・小野夕靄編『左川ちか全詩集新版』(森開社. 2010) [個人詩集] 参照
- 左川ちか著・小野夕靄編『左川ちか翻訳詩集』(森開社. 2011) [個人詩集] 参照 [翻訳]
- 左川ちか著・紫門あさを編『新編左川ちか詩集 前奏曲』(えていしおん うみのほし、東都我刊我書房. 2017) [個人詩集] 参照
- 佐々木美和「『第七官界』への〈小さな旅〉 読者を伴って愛読する作家の創作現場へと誘い、丁寧に辿っていく温かく柔らかな雰囲気が漂う」(『図書新聞』 3054. 2012. 3月17日号) [新聞]
- 澤正宏「書評藤本寿彦著『周縁としてのモダニズム - 日本現代詩の底流』」(『日本近代文

学』82.2010.5)

- 島田龍『左川ちか関連文献目録稿・解説』（『左川ちか資料集成』別冊. えでいしおん うみのほし、東都我刊我書房. 2017）
- 島田龍『左川ちか研究史論 - 附左川ちか関連文献目録増補版』（英題[A History of Sagawa Chika Studies:With Related Bibliography enlarged edition] / 『立命館大学人文科学研究所紀要』115号. 2018. 3）本稿
- 紫門あさを編『左川ちか資料集成 [The Black Air:Collected Poems and Other Works of Chika Sagawa]』（えでいしおん うみのほし、東都我刊我書房. 2017）
- John Solt（ジョン・ソルト）『北園克衛の詩と詩学 意味のタペストリーを細断する』（田口哲也監訳. 思潮社. 2010 / 原著『Shredding tapestry of meaning:The Poetry and Poetics of Kitasono Katue（1902-1978）』Harvard University Press. 1999）
- 市立小樽文学館『左川ちか展』（市立小樽文学館企画展パンフレット. 2013）→小野夕靄『或る回想』
- 市立小樽文学館編・亀井志乃解説『伊藤整の生涯と文学』（市立小樽文学館企画展図録. 2015）
- 私論「大波小波 詩で詩を語る」（『東京新聞』『中日新聞』2012年7月25日夕刊）[新聞]
- 神泉薫「卵をわると月が出る」（『洪水』14. 2014. 7）
- 神泉薫「神泉薫のことばの扉」（調布FM ラジオ番組. 2017年11月4日）
- 杉浦静編『コレクション・都市モダニズム詩誌第10巻 レスプリ・ヌーボーの展開』（ゆまに書房. 2010）
- 瀬本阿矢「左川ちかと映画 - 『暗い夏』とくアンダルシアの犬>を中心に -」（丸橋良雄『比較文化の饗宴』英光社. 2011）
- 瀬本阿矢『転用と変容:日本の女性詩人たちによるシュルレアリスム受容を中心に』（京都大学博士論文. 2011）
- たかとう匡子「江間章子 モダニズムから歌曲へ」（『イリプスInd』4. 2010. 5 / 『私の女性詩人ノート』思潮社. 2014）
- たかとう匡子「藤田文江 夭折の閨秀詩人、『夜の聲』の価値」（『私の女性詩人ノート』思潮社. 2014）
- 高山美香「<北の文人立ち話>病弱でも才能開花・左川ちか 他人も聞きほれた『夢』（『朝日新聞』2011年11月11日夕刊北海道）[新聞]
- 谷口孝男「<本の森 ほっかいどう> ふるさと文学さんぽ 北海道」（『北海道新聞』2013年9月22日朝刊全道）[新聞]
- 玉川薫「夭折の天才詩人左川ちか」（『BYWAY 後志』16（2016. 4）
- 寺田操「二人のモダニズム詩人 永瀬清子生誕百年・左川ちか没後八十年」（『現代詩手帖』59-12. 2016. 12）

- 飛ヶ谷美穂子「書評寺田操著『尾崎翠と野溝七生子二十一世紀を先取りした女性たち』」(『比較文学』54.2012.3)
- 外村彰「昭和十一年 詩誌『椎の木』細目」(『昭和文学研究』73.2016.9)
- 鳥居万由実「1930年代モダニズム詩における、女性の自己表現の方策、左川ちか、山中富美子らの作品を手がかりにして」(『言語態』15.2015)
- 中野もえぎ「小樽余市訪問記 - 左川ちかのこと」(『ぼかん』3.ぼかん編集室.2013.11) [北海道]
- 長山靖生編「詩的生成と近代日本のあいだ」(『詩人小説精華集』彩流社.2017) 同書に左川ちか「暗い夏」収録 [合集] 参照
- ナタル「大波小波 女性による女性詩の系譜学」(『東京新聞』『中日新聞』2014年5月27日夕刊) [新聞]
- NAKAYASU, Sawako (中保佐和子)『MOUTH: EATS COLER - Sagawa Chika Translations, Anti-Translations, & Originals』([United States]Roque Factorial Press.2011) [翻訳]
- NAKAYASU, Sawako『THE COLLECTED POEMS OF CHIKA SAGAWA』([Michigan]CanariumBooks.2015) [翻訳]
- 野坂幸弘監修『ふるさと文学さんぽ 北海道』(大和書房.2013) [北海道]
- 蜂飼耳編『大人になるまでに読みたい15歳の詩3 なやむ』(ゆまに書房.2013) [合集] 参照
- 蜂飼耳「夜の殻を夜に戻せば」(『図書』2013年5月号(771) / 『おいしそうな草』岩波書店.2014)
- 蜂飼耳「<ブックマーク>悩みと向き合う詩」(『毎日新聞』2013年12月10日夕刊) [新聞]
- 蜂飼耳「<書評>『日本文学源流史』藤井貞和著」(『朝日新聞』2016年4月24日朝刊) [新聞]
- 蜂飼耳編『大人になるまでに読みたい15歳の詩6 わらう』(ゆまに書房.2017) [合集] 参照
- 坂東里美「左川ちかと翻訳(1) - ハリイ・クロスビー 愛撫すべきこれ等の夢」(『contralto』30.2012.9) [翻訳]
- 坂東里美「左川ちかと翻訳(2) - ミナ・ロイ 伶俐なモダニスト」(『contralto』31.2013.6) [翻訳]
- 坂東里美「左川ちかと翻訳(3) - ジェイムズ・ジョイス『室楽』- 抒情詩とパロディ」(『contralto』32.2013.11) [翻訳]
- 坂東里美「左川ちかと翻訳(4) - ヴァージニア・ウルフ「憑かれた家」- これがあなたの埋もれた財宝ですか?」(『contralto』33.2014.6) [翻訳]
- 坂東里美「左川ちかと翻訳(5) - <左川千賀>時代 - 翻訳事始め 詩人「左川ちか」の

作り方 -」(『contralto』34. 2015. 5) [翻訳]

□平松正子「謎の詩人『矢向季子』に光 詩人・季村敏夫さん」(『神戸新聞』2018年2月8日朝刊) [新聞]

□藤井貞和「絆を蹴ることと軟らかな接吻と たかとう匡子『私の女性詩人ノート』を読む」(『現代詩手帖』57-9. 2014. 9)

□藤井貞和「韻律を放棄する - 左川ちかの試み」(『日本文学源流史』「十六章近代詩、現代詩の発生」青土社. 2016) [翻訳]

□藤井貞和「自著を語る Book Review 源流の名告り [藤井貞和著日本文学源流史]」(『季刊 iichiko』130. 2016. 4)

□藤本寿彦「前衛詩の分水嶺／主知的抒情詩の胎動—『季刊文学』昭和七年十二月に掲載された新進詩人の表現をめぐって -」(『始更』8号. 2010. 9)

□藤本恵「童謡詩人・金子みすゞの受容パラダイム - <女性>詩というカテゴリーの構築性について -」(『近現代詩の可能性 モダニズムの視点・女性の視線 - 第8回: フェリス女学院大学日本文学国際会議 -』フェリス女学院大学. 2011)

□文月悠光「詩の月評 女性詩人の系譜」(『中日新聞』2014年6月7日夕刊) [新聞]

□堀江敏幸・松浦寿輝編「個人的な詩集」(『群像』67-8. 2012. 8) [合集] 参照

□水田宗子『モダニズムと<戦後女性詩>の展開」(思潮社. 2012)

□水田宗子・藤井貞和・井坂洋子・水無田気流「左川ちかから手渡されるもの 詩とジェンダー、その先へ」(『現代詩手帖』55-11. 2012. 11)

□水田宗子・藤井貞和・井坂洋子・水無田気流「水田宗子評論集『モダニズムと<戦後女性詩>の展開』刊行記念シンポジウム 左川ちかから手渡されるもの 詩とジェンダー、その先へ」(『Rim Journal of the Asia-Pacific Womens Studies Association ([Rim] アジア・太平洋女性学研究会会誌)』14-1. 城西大学ジェンダー・女性学研究所. 2013. 3)

□水田宗子編『ジェンダーとアジア 水田宗子対談・鼎談・シンポジウム集3』(城西大学出版会. 2016) →水田宗子・藤井貞和・井坂洋子・水無田気流「[シンポジウム] 左川ちかから手渡されるもの 詩とジェンダー、その先へ」、北田幸恵「後記 批評の力 女性・文化から新たなアジアの回路を拓く」

□水無田気流「<書評>『おいしそうな草』蜂飼耳著」(『朝日新聞』2014年6月8日朝刊) [新聞]

□宮崎真素美編『コレクション・都市モダニズム詩誌第13巻 アルクイユクラブの構想』(ゆまに書房. 2010)

□茂木宏文作曲「左川ちかの詩による二つの歌」(左川ちか詩. 連作歌曲. 2015年)「鐘のなる日」[循環路] [音楽]

□持田叙子「<今週の本棚>『はじめの穴 終わりの口』=井坂洋子」(『毎日新聞』2011年1月30日朝刊) [新聞]

□森山恵「鏡映、不可思議な反射像 海外詩展望」(『現代詩手帖』59-12. 2016. 12) [翻訳]

- 山下泉「書評 佐藤弓生歌集『薄い街』あるひとときの終りのための」(『季刊 びーぐる 詩の海へ』11.2011.4)
- 山田兼士「詩論時評(7) 豊穠な詩人論」(『季刊 びーぐる 詩の海へ』24.2014.2)
- 吉川佳代・高田宣子「解説」(フウの会編『モダニスト ミナ・ロイの月世界案内 詩と藝術』水声社. 2014) [翻訳]
- waga「君去りしのち青く庭」(2018. 1) <https://www.youtube.com/watch?v=LC-PU9yxOEU>
<http://www.nicovideo.jp/watch/sm32608119> [音楽]
- 和合亮一「書評詩人・和合亮一が読む『詩人小説精華集』長山靖生編書き手たちの足取り思わせ」(『産経新聞』2018年1月21日朝刊) [新聞]
- 渡邊十糸子「『かawaii見張り』の書きのこした渾身の言葉 人生を急いでいる最中に帰らぬ人となったモダニズム詩人の軌跡」(『図書新聞』3021. 2011. 7月9日号) [新聞]
- 無記名「くもよおし>講演会『伊東忠太が目指した日本の様式建築』ほか」(『毎日新聞』2012年3月28日夕刊) [新聞]
- 無記名「情報コーナー シンポジウム」(『東京新聞』2012年3月28日朝刊都心版) [新聞]
- 無記名「シンポジウム 城西大理事長で詩人の水田さん、評論集刊行記念 - 来月14日」(『毎日新聞』2012年3月30日東京地方版) [新聞]
- 無記名「<インフォメーション>燃料電池組み立て・発電体験、『ニリンソウ観察 Day』、他」(『日本経済新聞』2012年3月30日) [新聞]
- 無記名「シンポジウム」(『読売新聞』2012年3月31日夕刊) [新聞]
- 無記名「黒板 シンポジウム」(『東京新聞』2012年4月6日夕刊) [新聞]
- 無記名「新刊 『モダニズムと<戦後女性詩>の展開』水田宗子著」(『東京新聞』2012年4月15日朝刊) [新聞]
- 無記名「城西大理事長の水田さん、評論集出版記念でシンポ」(『毎日新聞』2012年4月15日東京地方版) [新聞]
- 無記名「夭折の天才詩人左川ちか」(『広報おたる平成25年10月号』2013. 10) [北海道]
- 無記名「コラム透視図 いじめの有無で右往左往」(『北海道建設新聞』2017年6月7日) [新聞]
- 無記名「早稲田文学『女性号』責任編集 川上未映子 女性による表現 556ページの多様性」(『北海道新聞』2017年10月4日朝刊全道) [新聞]

【刊行中・近刊予定】

- 外村彰編『(第三次) 椎の木』復刻版、外村彰『別冊 解題・総目次・執筆者索引』(全11巻・別冊1、三人社. 2017年7月より刊行中、2018年9月完結予定)
- 島田龍「(仮題) <詩人左川ちか>像の創出と伊藤整」(「文学史を読みかえる」研究会編『(仮題) 文学史を読みかえる・論集』インパクト出版会. 2018秋以降予定)

□余市町史編纂室編『余市町史 5巻 明治2～昭和1』『6巻 昭和2～』(2018.4予定)
[北海道]

【HP】

□『螺旋の器』(小野夕馥ブログ/2009年10月4日開設/2017年12月20日閲覧) <http://blogs.yahoo.co.jp/ono2893>

□『詩客』(三詩型合同企画サイト/2011年4月29日開設/2017年12月20日閲覧) <http://shiika.sakura.ne.jp/>

□菊地利奈「〈翻訳〉という名の異文化交流」(『滋賀大学経済経営研究所』HP 2008年経済学部ワークショップ/2017年12月20日閲覧) <http://www.biwako.shiga-u.ac.jp/eml/kouenkai2008/WS20081023kikuchi.htm>

□菊地利奈「現代アイルランド詩研究及び詩を『翻訳する行為』についての比較文学研究」(『滋賀大学経済学部・大学院経済学研究科 HP』2008年度/2017年12月20日閲覧) <https://www.econ.shiga-u.ac.jp/study/6/1/2/5/5.html>

□菊地利奈「日本における前衛詩運動と翻訳文学の比較文学的研究」(『滋賀大学経済学部・大学院経済学研究科 HP』2008年度/2017年12月20日閲覧) <https://www.econ.shiga-u.ac.jp/study/6/1/1/5/3.html>

上記の他ネット、ブログ、ホームページ等で言及多数

本目録増補版に記載した文献について、参考までにおおよその点数を記す。

個人詩集7点。合集・アンソロジー約30点。同時代(1920～30年代)約115点(うち生前は約75点)。40年代約10点。50年代約25点。60年代約30点。70年代約55点。80年代約65点。90年代約75点。2000年代約165点。10年代約130点。計約670点。

おおよその傾向として本文で分析しているように、死後、1940～60年代にちかへの言及は減少する。50年代の創元社『日本詩人全集』などで作品が読み継がれていたとはいえ、全貌を知ることは難しく、伝説の詩人と化していった。60年代末から70年代の大岡信や小松英子、曾根博義、富岡多恵子らと呼ばれ水として再評価の機運が高まり、文献数は増加。80年代の左川ちか全詩集出版や江間章子の回想などを通じ、作品が次第に普及していく。

新井豊美らを始めとする90年代以降、フェミニズム文学批評による詩史上の位置付けとテキスト解釈が進んでいった。2000年代にはネット環境の影響もあって、一気に発言が蓄積、多様な受容がなされていく。そのような100年の変遷の一端が文献数からもうかがえるであろう。

【追記】

本目録の記載資料は、NHK映像番組「教養特集『二つの青春』-多喜二と整-」(1972)など点数を除き、すべて実見したものである。今後も北海道詩歌史・郷土史、当時の詩誌

などを精査し、文献目録の充実と整理を目指したい。なお、北海道文学に関する主要文献については、木原直彦『北海道文学の発音』（2009）の参考文献目録などに詳しい。歴史学の世界同様、文学も関連文献・資料は許される限りにおいて、読者に幅広く開かれてほしいという願いが原動力にある。文献表記の誤り・欠落などご教示頂ければ幸いです。目録未記載で左川ちかについて言及した文献をご存知の方（とくにちかと同年代の詩誌資料や北海道の資料など）、未見の文献含めご紹介頂ける方、また本稿に関してご意見ご感想をお持ちの方は、ぜひ下記までお知らせ下さい。ご連絡をお待ち致しております。

立命館大学人文科学研究所 島田龍 17v00223@gst.ritsumei.ac.jp lh041958@gmail.com

文献資料の収集や執筆にあたっては、様々な方や多くの機関のご協力を得た。皆様には謝意を表したい。

阿賀賀、赤井都、李豪潤、井内謙輔、えこし会、小野夕穂、金城静穂、國重遊、クリハラ冉、紫門あさを、田村幸代、新倉弥生、坂東里美、平田更一、「文学史を読みかえる」研究会、松田正貴、未谷おと、茂木宏文（以上個人・団体五十音順、敬称略）。

大阪市立中央図書館、大阪府立国際児童文学館・中央図書館・中之島図書館、鹿児島純心大学図書館、関西大学図書館、京都市各図書館、京都大学各図書館、京都ノートルダム女子大学図書館、京都府立図書館、県立神奈川近代文学館、神戸市立図書館、国際日本文化研究センター図書館、国立国会図書館・関西館、滋賀大学付属図書館、昭和女子大学図書館、市立小樽図書館、市立小樽文学館、高岡市立図書館、高槻市立図書館、多摩美術大学図書館・アートテーク、土浦市立図書館、東京都立各図書館、同志社大学図書館、同志社女子大学図書館、鳥取県立図書館、長岡京市立図書館、日本近代文学館、日本現代詩歌文学館、野田宇太郎文学資料館、北海道大学図書館、北海道立図書館、北海道立文学館、佛教大学図書館、向日市立図書館、余市町図書館、龍谷大学図書館、立命館大学各図書館（以上諸機関五十音順）。

文献目録の作成を通じ、左川ちかについて、それぞれの思いが込められた先人たちの所論と対話することで、この詩人の魅力をさらに感じる事ができた。その全ての出会いに心より深謝申し上げます。

